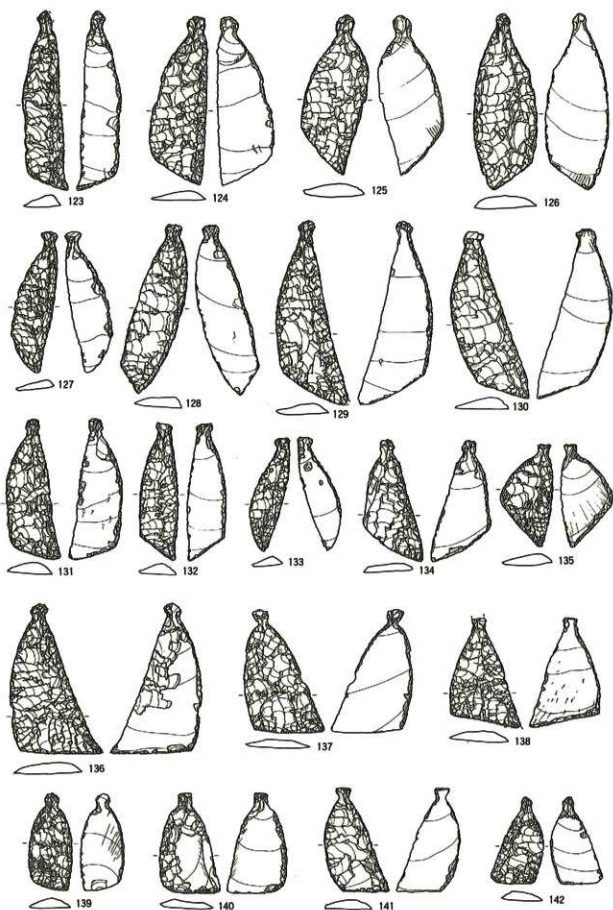
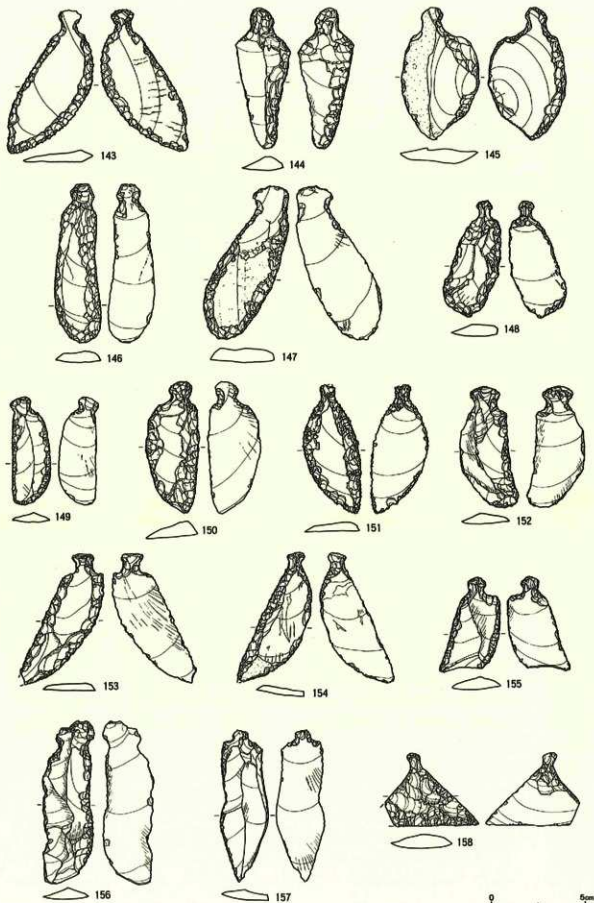




0 5cm

図Ⅲ-169 包含層出土の石器(5)



図Ⅲ-170 包含層出土の石器(6)

刃部は背面側に作り出すものが多い。167～169は周縁部に刃部が作り出されるもの。167、168は背面右側縁を除く3辺に刃部が全周するもの。169、170はほぼ刃部が全周する。171～198は側縁に刃部を作り出すもの。2側縁に刃部を作り出すものが多く、1側縁にのみ刃部が作り出されるもの(176、182、183、199～201、203)は少ない。2側縁に刃部をもつものは2種類ある。2側縁共に丁寧な加工で刃部が作り出されるものと1側縁は丁寧な加工で刃部が作り出され、逆側の刃部は浅い加工を施すものもしくは素材の形状を生かし、ほとんど加工を施さないものがある。171～196は刃部が外湾するもの。172は背面右側縁は側縁の形状を生かし浅い加工のみで刃部を作り出す。173は両端に両面からの加工により、挟り部が作り出される。179、184、187は腹面側に刃部が作り出される。182は末端部が自然面である。186は上端部以外の3辺に刃部をもつ。末端部の刃部は素材の鋭い縁辺を生かしたもので微細な剥離が認められる。190は厚みを取るために末端部に加工が施される。191は背面右側縁に刃部が作り出されるが、左側縁には散発的に微細な剥離痕が認められ、刃部としての使用が考えられる。192は裏面の周縁部に不規則な浅い加工が施される。193は両面の片側に刃部が作り出される。196は2側縁に急角度の刃部をもつ。197～211は刃部が直線状のもの。206、208、210は横長剥片を素材とする。208は両刃である。210は腹面下半部は平坦に整えるための加工が施される。211、212は刃部が内湾する。211は背面左側縁の刃部は内湾し、右側縁は外湾する。

213、214は挟入石器。213は背面右側縁に浅い挟りが2ヶ所作り出される。214は腹面側に対向する挟りが作り出される。

215～217は鋸齒縁石器。215、217は背面右側縁、216は背面左側縁に鋸齒状の刃部を作り出す。216、217は挟りが弱い。

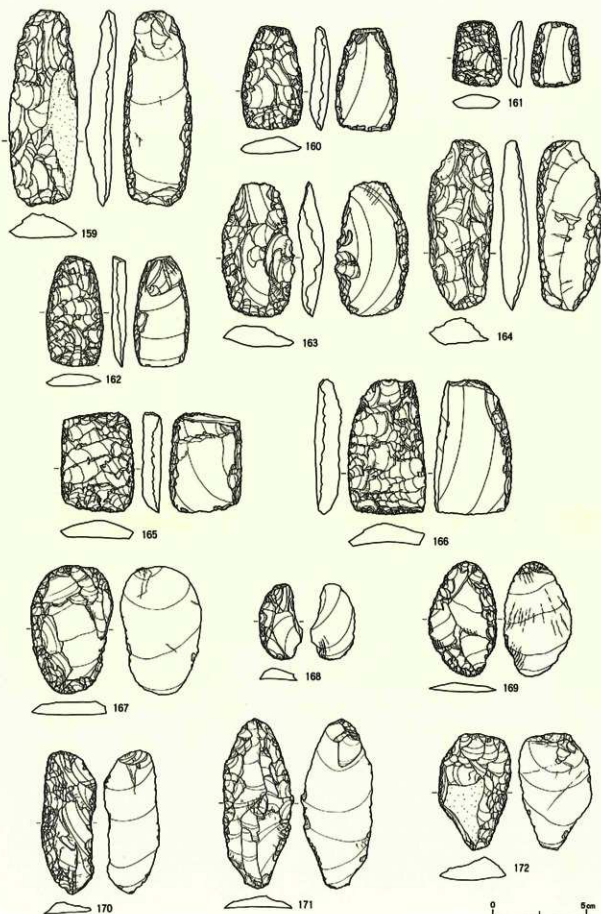
218、219は両極石器。いずれも上端部と下端部に対向する細かい剥離が認められる。

220は石核。打面、作業面共に移動しているが、正面を主な作業面とし、剥片を多く取っている。

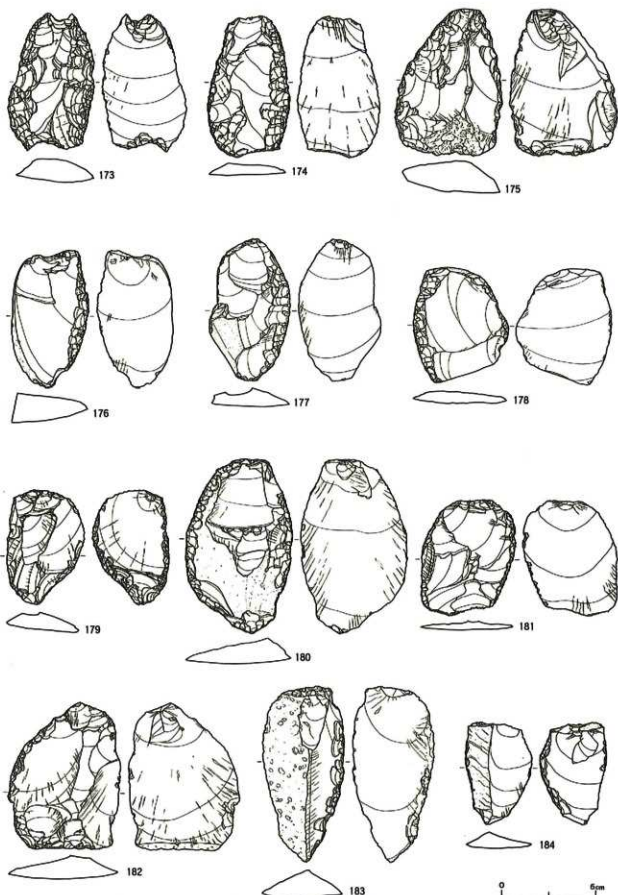
磨製石器・礫石器

1～8は磨製石斧。1は正面に整形時の打ち欠きを、裏面には素材面を残す。刃部は欠失し鈍は不明瞭である。2は部分的に敲打痕を残す。基部は斜方向に研磨され、刃部は横方向の研磨によって研ぎ出されている。研磨は全体的に粗い。刃部は両刃で、鈍は不明瞭である。3は正面はやや難な、裏面は丁寧な研磨が斜方向に加えられる。周縁部に整形時の打ち欠きが認められ、正面は敲打痕を大きく残す。刃部は両刃で、裏面は一部にのみ研磨が施される。4は被熱によると思われる赤褐色の変色が上半部にみられる。裏面に黒色の付着物が認められる。刃部は大きく欠失する。側面は丁寧な研磨により平坦で、正面との稜線は明瞭である。5は小形で全面に横及び斜方向の丁寧な研磨が施される。刃部は片刃で、刃縁はやや外湾する。両面とも鈍は明瞭で正面は刃縁付近にわずかに研ぎ出しが認められる。6は側面の中程に素材面を残す。両面の基部は斜方向、側面は縦方向に研磨が加えられる。刃部は片刃で刃縁はやや外湾する。鈍は明瞭である。7は正面に自然面を大きく残す。正面周縁部と刃部及び裏面に周縁部からの打ち欠き及び細かい敲打痕が認められる。打ち欠きによる剥離が敲打痕を切っており、敲打→打ち欠きという製作順序が伺える。研磨は認められず未成品の可能性が高い。8は擦り切り残片。緑色泥岩製で両主面に擦り切り溝が認められる。右側面は折った痕を残す。左側面には敲打痕がある。9は環状石斧未成品。正面上部～裏面を大きく欠失する。内側は打ち欠き及び敲打による整形が認められる。周縁部は散発的な剥離のみ認められ、刃部の作り出しは行なわれていない。

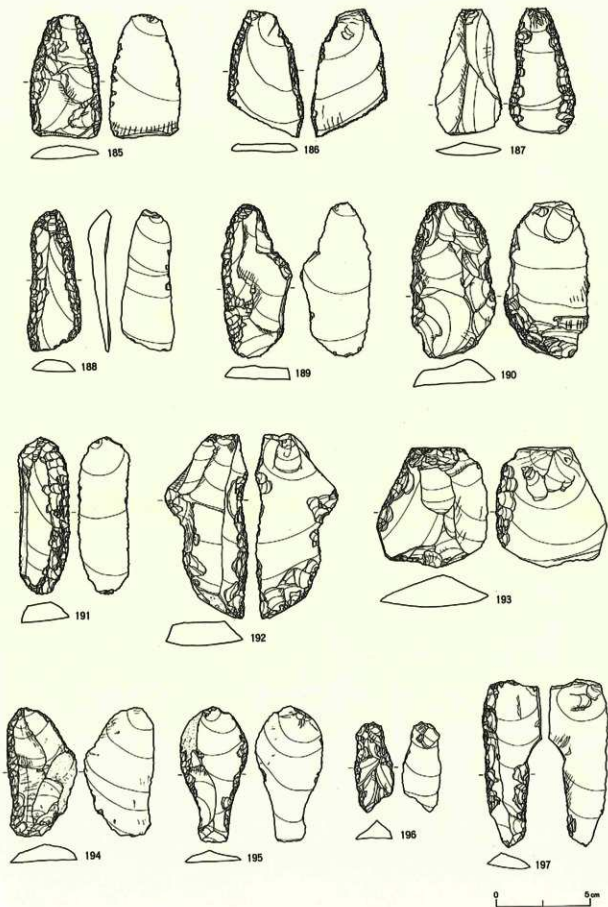
10～28はたたき石。10～14は礫の端部にたたき痕が認められるもの。10、11、13は棒状礫を素材とする。10は正面及び側面にもたたき痕が認められ、下端部のたたき痕は中央部がややくぼむ。11は下



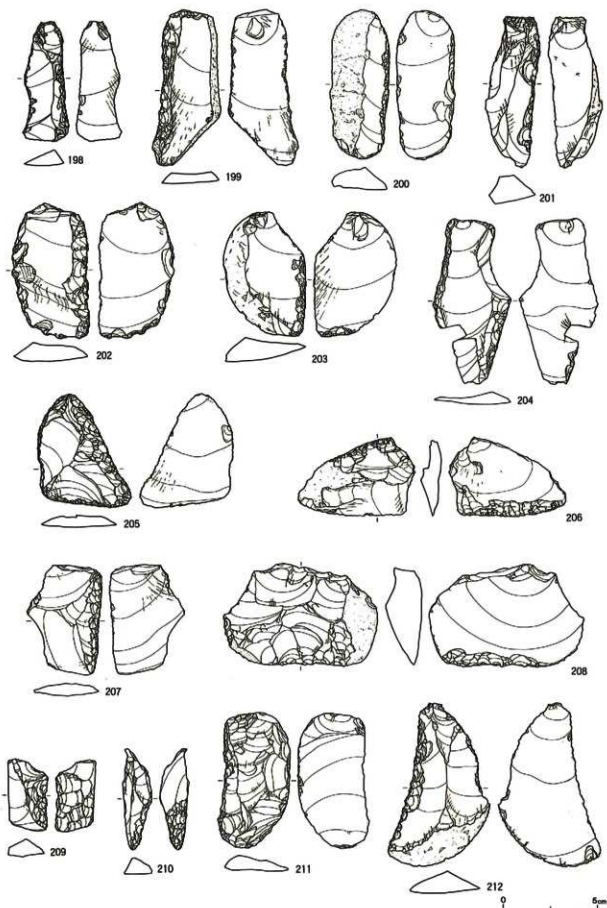
図Ⅲ-171 包含層出土の石器(7)



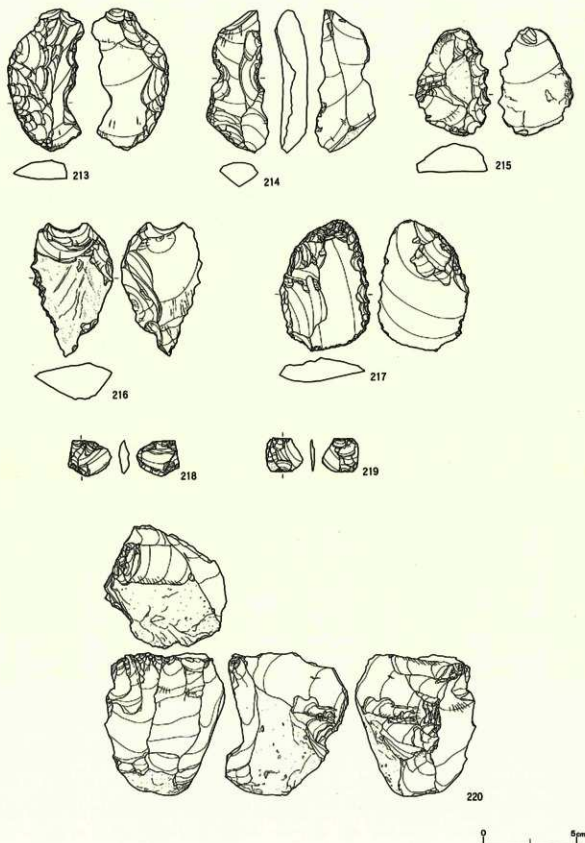
図Ⅲ-172 包含層出土の石器(8)



図Ⅲ-173 Ⅲ層中・下部の調査



図Ⅲ-174 包含層出土の石器⑩



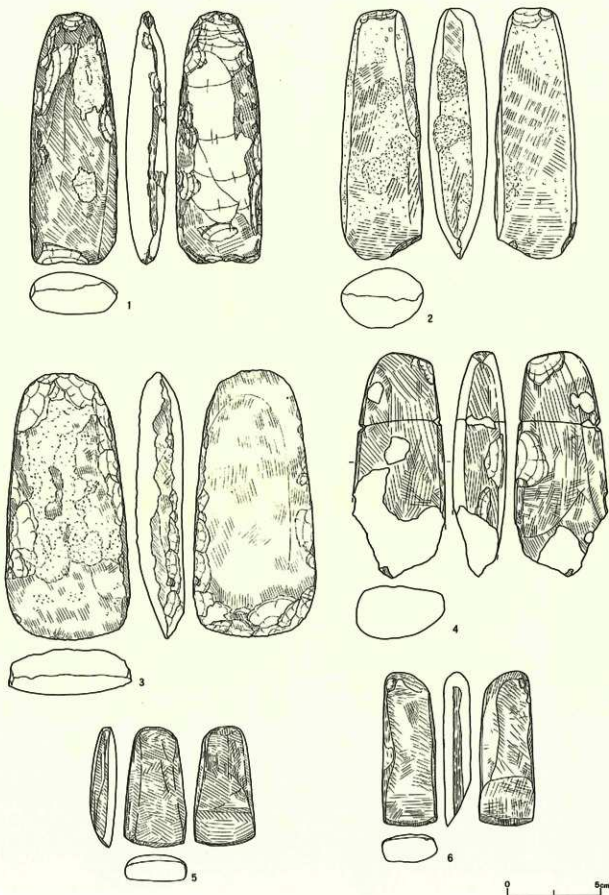
図Ⅲ-175 包含層出土の石器⑩

端周辺部に敲打痕が認められる。また、裏面を弱く擦っており石斧の未成品の可能性もある。12はチャート製のもの。たたき痕は細かい。13は素材の礫の大きさに比べてたたき痕が大きく、強い加撃による結果と推定される。14は偏平礫の一端にたたき痕をもつ。15～20は周縁部にたたき痕をもつもの。円礫を素材とするものが多い。15はチャート製。浅いたたき痕が右側縁を除いて全周する。16は珪質頁岩製。正面中央付近の礫の角にも浅いたたき痕をもつ。17は棒状礫を素材とする。18は左側面のたたき痕が平坦面をなす。20は被熱により一部赤色に変色している。21～28は正面及び裏面にくぼみ上のたたき痕をもつもの。円礫を素材とするもの(21、23、27、28)、棒状礫を素材とするもの(22、24、25、26)が認められる。21、22は正面のたたき痕が裏面より深い。21は左側面にも強い加撃によるたたき痕が認められる。23は左側縁にも軽微で不明瞭なたたき痕をもつ。26のたたき痕は弱く散発的である。27は被熱により部分的に赤色化している。たたき痕内も変色しており、使用後に熱を受けている。28は自然にくぼんでいる礫を利用している。部分的に打ち欠きによる整形が認められる。

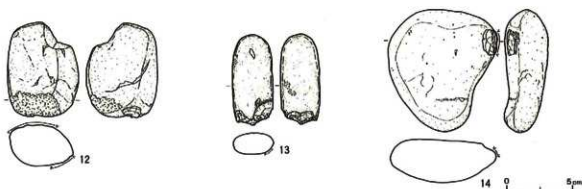
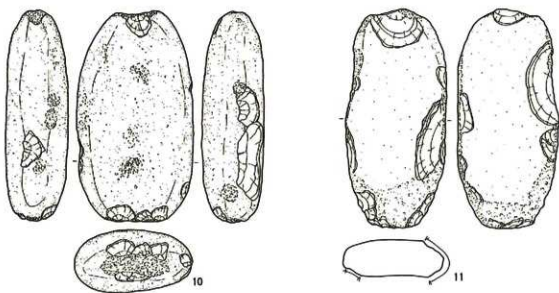
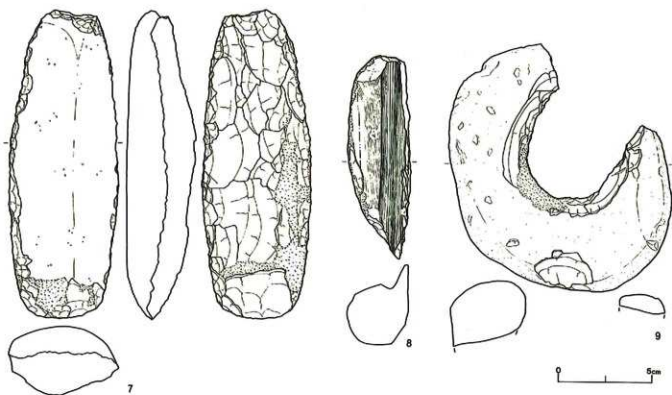
29～54はすり石。29～34は礫の一侧縁をすり面とするもの。29～32は断面が隅丸の三角形形状もしくはそれに近い形状のもの。すり面を整形した後擦っているものが多い。29はすり面に敲打痕を残す。30、31は部分的に被熱による変色が認められる。30は打ち欠きにより細いすり面を作り出す。31はすり面の幅がやや広く、表面に部分的に煤が付着する。32はすり面に打ち欠きを施し、すり面の再加工を行なっている。また礫の平坦面もすり面としている。33、34は偏平礫の一侧縁にすり面を作り出すもの。共にすり面は軽微である。34は両端部に弱いたたき痕をもつ。35～43は偏平礫の周縁部に打ち欠きを施したいわゆる偏平打製石器である。打ち欠きはいずれも両面から施される。35～37は周縁部の打ち欠きがほぼ全周するもの。35、37はすり面の幅が広い。35はすり面の両端部は細くなっており、すり面の再加工中である可能性が高い。36の裏面はあまり打ち欠きが施されないものの、全体の作りは丁寧である。すり痕は軽微である。37は周縁部の部分的に敲打痕が認められる。38～43は周縁部の打ち欠きが全周しないもの。38、39は3辺に打ち欠きを施すもの。38は打ち欠きを施していない辺をすり面として利用している。39はすり痕が軽微で、下面からみるとすり面はやや湾曲している。40は両側縁に打ち欠きを施すもので、上部も機能部として作り出している可能性がある。41～43は打ち欠きが部分的なもの。41は両端部に対向した打ち欠きによる浅い抉りがあり、石錘に転用している可能性がある。42は下面からみるとすり面がやや湾曲している。43はすり面を作り出すのみで、すり痕はほとんど認められない。44～52はいわゆる北海道式石冠である。44、45は比較的作りが丁寧なもの。44は打ち欠きは大きく雑で、握り部に対してすり面がやや傾く。45、46はすり面があまり平滑ではない。46～52は粗雑な作りのもの。46の握り部の溝は粗く、ごく浅い敲打で作り出される。47は裏面に大きな剥離を残し、すり面はよく使い込まれている。48はすり面内の部分的に整形時の敲打痕を残す。49は握り部に対してすり面が傾く。50は握り部の溝が斜めに巡る。すり面はよく使い込まれている。51は握り部の溝が全周せず、敲打は雑で大きな凹凸が認められる。52は両端及び両面中程にくぼみ状のたたき痕が認められ、たたき石と機能が複合する可能性がある。53、54は礫の平坦面にすり面を有するもの。53はすり面は平滑でよく使い込まれている。54は礫の平坦面のほぼ全面がすり面である。

55～58は砥石。55は両面に溝状の擦痕が認められる。56は偏平礫の両面に擦痕が認められる。下端部は両面に狭いすり面が認められる。57は両側面を砥面とし、よく使い込まれている。58は両面にくぼんだ砥面を作り出す。砥面はよく使い込まれ、砥面内には数本の綾線が認められる。

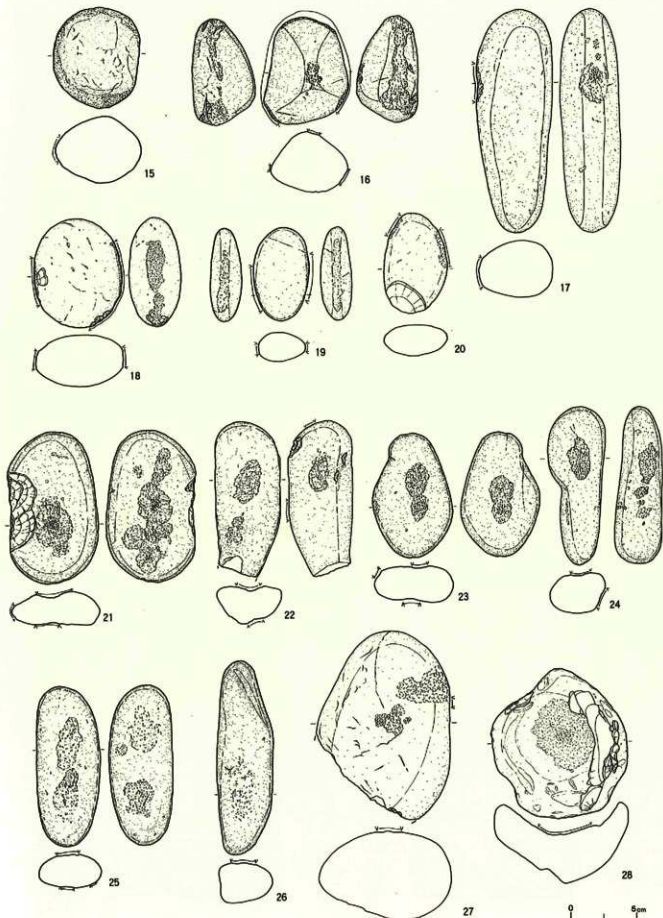
59～61は石鋸。いずれも板状の礫を素材とし、縁辺部に刃部を作り出す。59は2辺にすり面をもつもの。下端部の刃部はよく使い込まれ、横方向にやや太い擦痕が認められる。断面形はV字を呈する。右側縁の刃部のすり痕は軽微である。60は薄い礫片を素材とする。縁辺は部分的に打ち欠きを施し細



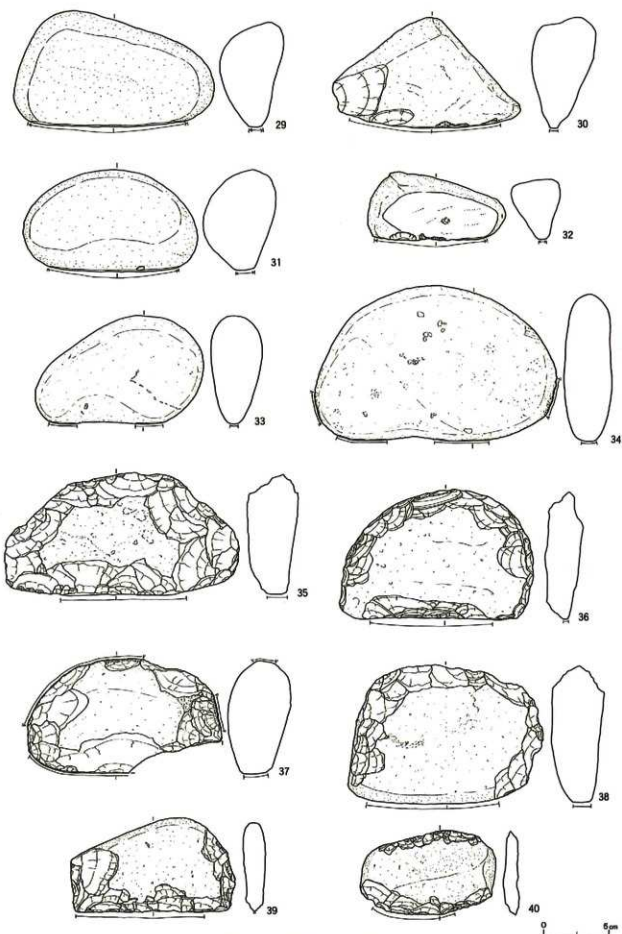
図Ⅲ-176 包倉層出土の石器⑫



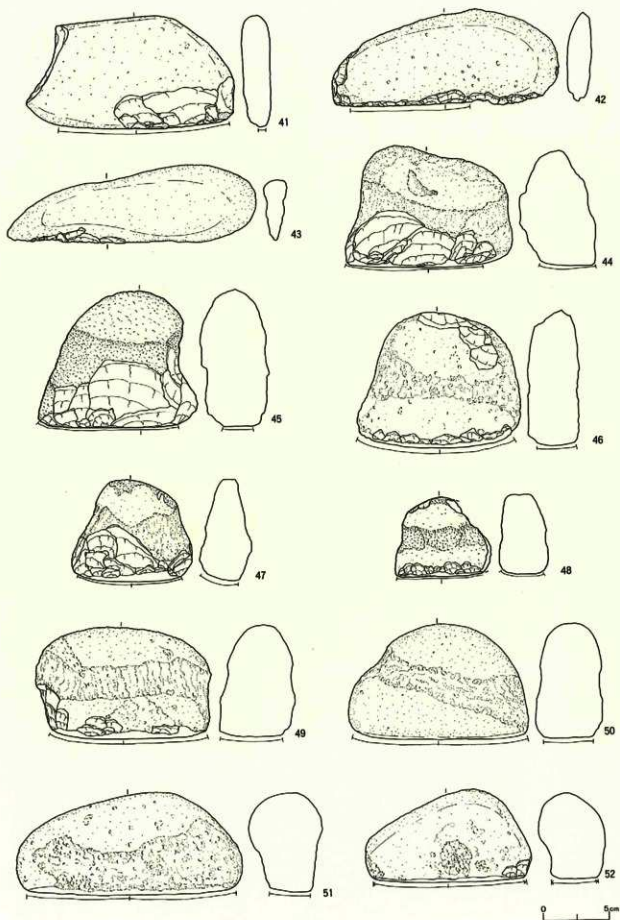
図版-177 包含層出土の石器⑬



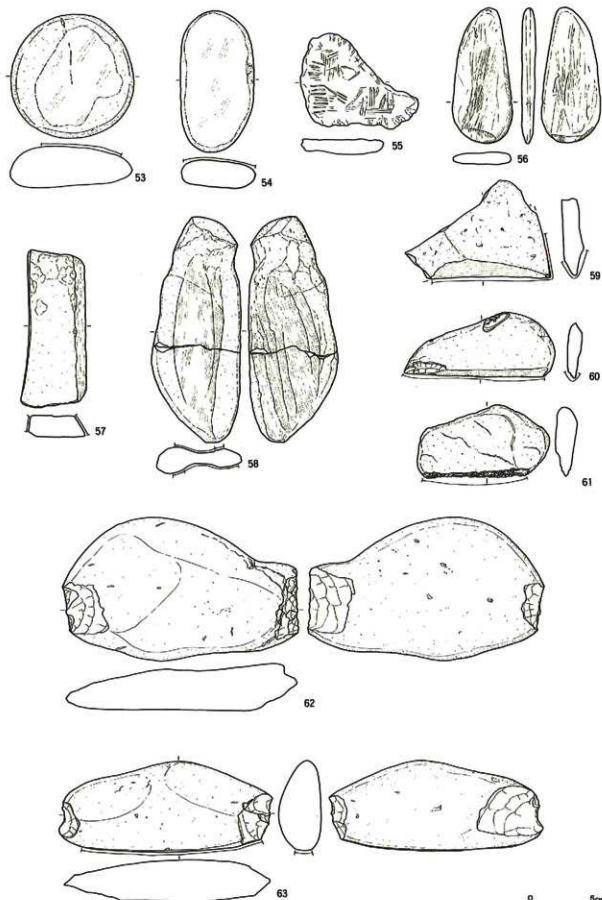
図Ⅲ-178 包含層出土の石器④



図Ⅲ-179 包含層出土の石器09

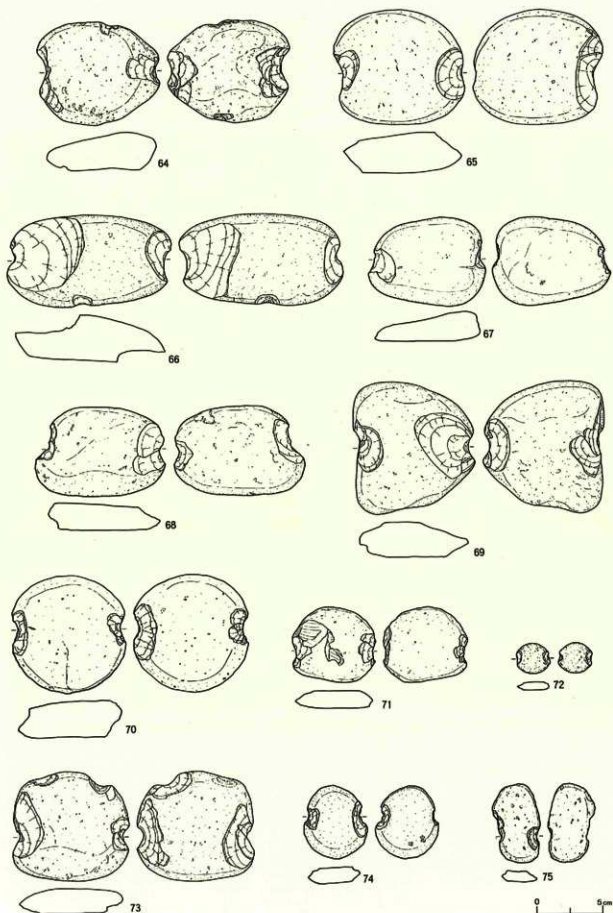


図Ⅲ-180 包含層出土の石器⑩



図Ⅲ-181 包含層出土の石器07

0 5cm



図Ⅲ-182 包含層出土の石製品⑧

い刃部を作り出している。断面形はやや広がるU字状を呈する。61は両面からの細かい打ち欠きにより刃部を作り出す。すり面は認められず、未成品と考えられる。

62～75は石錐。ほとんどのものが扁平な楕円形の礫を素材とする。62～68、71、72は素材の長軸に両面から打ち欠きを施すもの。62、63は大形である。64は長軸方向以外に、側縁に1ヵ所打ち欠きが認められる。また被熱により全体的に赤色に変色している。69は短軸方向に対向する挟りが作り出される。70は素材がほぼ円形の礫である。71は表面に幅の広いくぼんだすり痕が認められる。72は小形で重さが5.2gしかなく、実用のかどうかは不明である。73は4ヵ所に打ち欠きが施される。74、75は短軸に打ち欠きを施すもの。

石製品・土製品（1～27）

1は泥岩製の玉。裏面は一部欠失する。穿孔は2方向から施される。周縁部にほぼ等間隔で8ヵ所三角形の切り込みがある。切り込みには上下方向の擦痕が認められる。

2～13は三角形礫石器。2、4～6、8は泥岩製で、他は流紋岩製の扁平な礫を素材とする。全体としては流紋岩製のものが多い。いずれも素材の片面から周縁加工が施し、正三角形に整形する。部分的に整形のための細かい加工が認められる。2は自然面を残さないもの。表面中央付近の加工は厚みを取るためのものと考えられる。3は角が丸みを帯びる。4、6は右辺がやや内湾する。7、8は3辺がやや外湾する。9、10は形状が比較的整っている。11は底辺が内湾する。12は上半部がやや厚手で不整のもの。

14～18は円形礫石器。形状は三角形礫石器と異なるが素材、加工等の特徴はほぼ同じである。三角礫石器よりやや厚手のものが多い。形状は円形というより、多角形状のものが多いが、一括してここに含める。17は薄手のもの。18は加工が雑で大きく周縁部は鋸歯状を呈する。

19、20は青竜刀型石器。共に安山岩製で、柄部を欠失する。19は全面に丁寧な研磨が施されており、精巧に仕上げられている。刃部先端にはわずかに敲打痕を残し、刃部内には溝が巡っている。刃部上端には突起が作り出されている。背部はゆるやかに湾曲しており、正面との間にわずかに稜線が認められる。20は粗雑な作りでほとんど研磨が認められず、未成品の可能性はある。正面は敲打痕を大きく残し、周縁部には細かい打ち欠きが認められる。刃部付近に弱い研磨が加えられ、刃縁にわずかに自然面が残る。裏面は整形時の打ち欠きを大きく残し、部分的に敲打が施される。

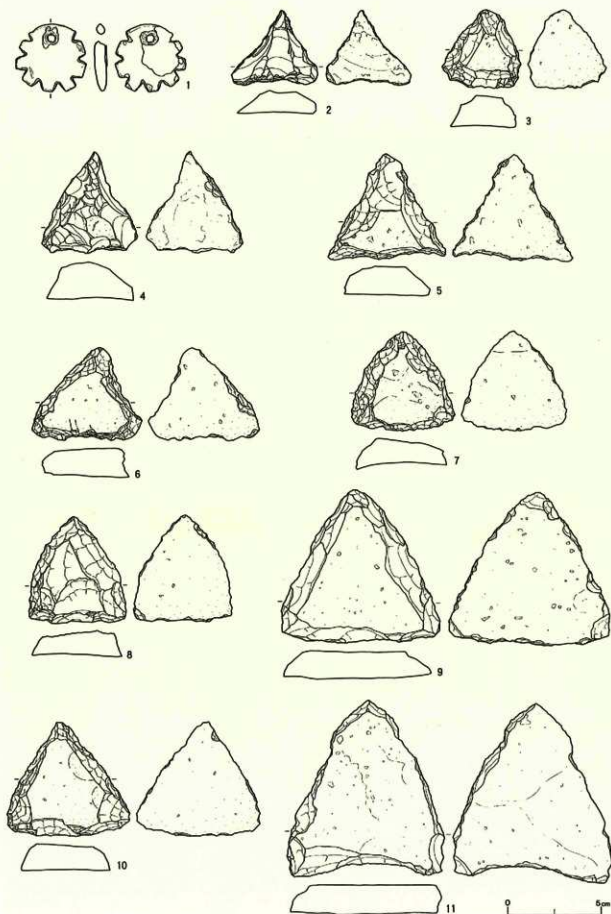
21、25は軽石製石製品。21は上部に穿孔が施される。25は人、もしくは動物の顔を表現したものか。目に当たる部分の穿孔は裏面まで貫通する。孔の間には両面共に溝がある。口にあたる部分は周辺部が盛り上がり、孔は裏面まで貫通せず途中で止まる。正面左側縁中程に細い溝が認められる。

22、23、26は未分類石製品。22は砂岩製。23は薄い礫片を素材とし、裏面は剥離面である。左側縁から末端部にかけて部分的に挟りを作りだし、全体としては丸みを帯びた鋸歯状を呈する。26は表裏面及び下端部は研磨され、周辺部は敲打により整形されている。下端部は特に丁寧に研磨され、平滑である。いわゆるうさぎ石の可能性はある。

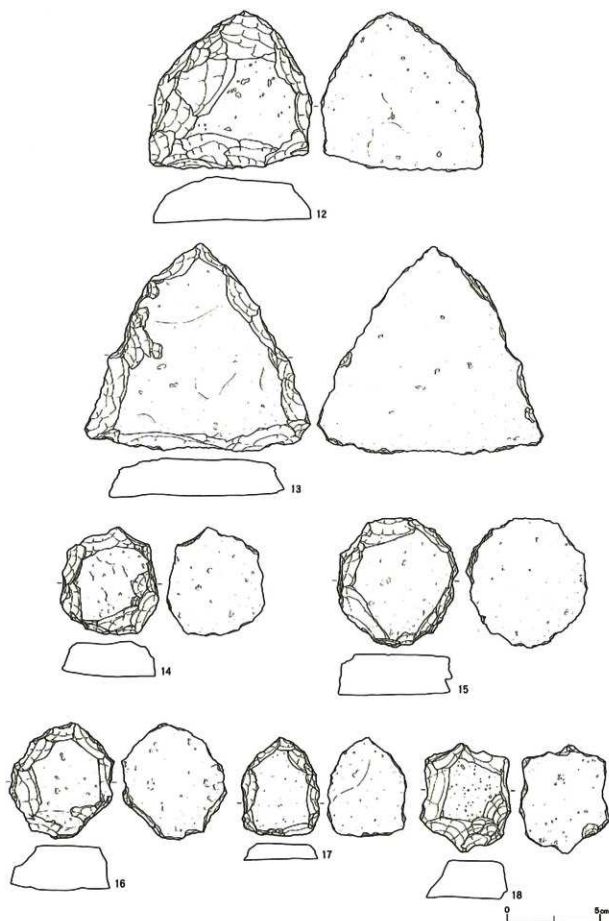
24は石棒。下半部を欠失する。上面以外の全面に粗い敲打を施して整形している。上面は弱く擦っている。
(広田良成)

27は三角形土製品である。IV群A類とみられる土器片を利用している。

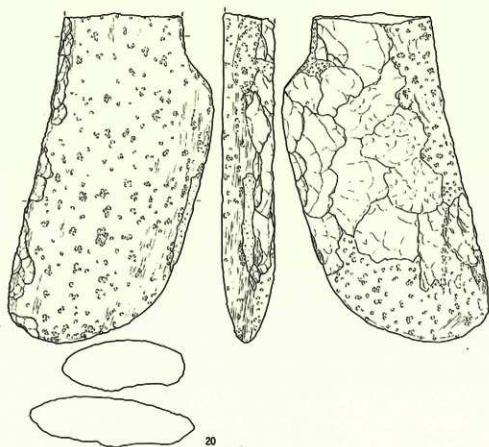
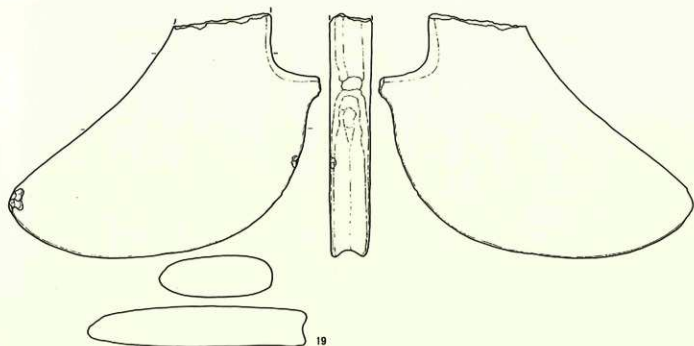
(立田 理)



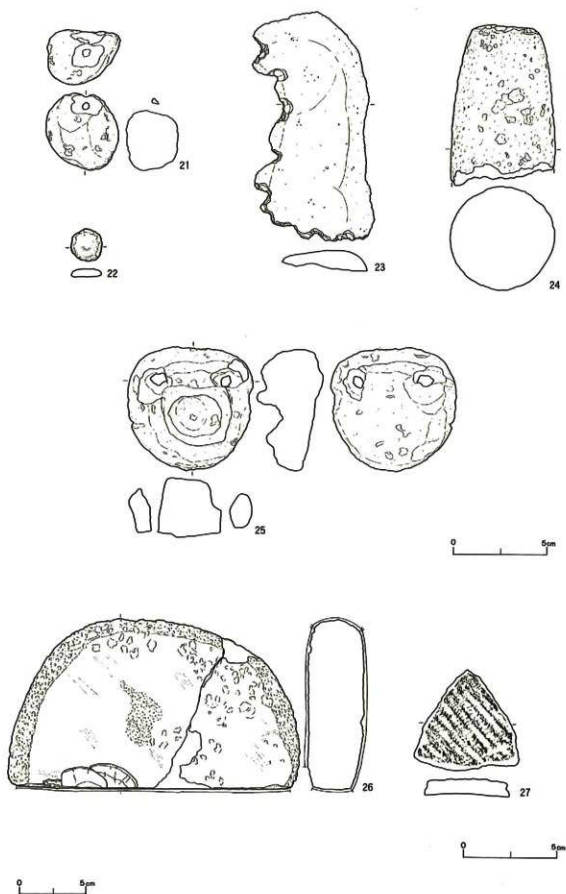
図Ⅲ-183 包含層出土の石製品(1)



図Ⅲ-184 包含層出土の石製品(2)



図Ⅲ-185 包含層出土の石製品(3)



図Ⅲ-186 包含層出土の石製品(4)・土製品(1)

IV Ⅲ層上部の調査

1 概要

これまでの調査で質・量共に良好な恵山文化の資料が発見された。

検出された遺構には、住居跡、土墳墓、土坑、焼土がある。住居跡は海側に面した台地の先端部に位置している。その他の遺構は主に茂辺地川に面した台地の縁辺部から斜面部にかけて集中している。

出土した遺物には土器、石器、土・石製品がある。土器には恵山式の古い段階のものが多く、石器には石鏃、石鈹、スクレイパー、靴形石器、磨製石斧、魚形石器、石鐮、たたき石、すり石等がある。土・石製品には土製の管玉や碧玉・ヒスイ製の玉類がある。

2 遺構

(1) 住居跡

Ⅲ層上部の調査では6軒の住居跡が発見された。いずれもⅢ層上面でⅡ層の火山灰が落ち込んでいるのを確認できた。台地先端の平坦面にあるH-1～H-5の5軒は平成3年度の調査で確認され、翌、平成4年度に調査が完了した。H-9は台地のやや奥まったところに位置する。平成5年度の調査で住居跡と確認されたが、平成4年度の調査ではこの遺構の存在に気づかず一部を掘り下げていたことが分かった。

H-1 (図IV-1)

位置 K-17

規模 $2.65 \times 2.47 / 2.34 \times 2.24 / 0.42$

特徴 台地先端に近い平坦面にある。Ⅲ層上面で円形の窪地となっていた。トレンチを掘って確認したところ、遺構と分かった。平面形は円形に近く、壁は急に立ち上がる。掘り込み面はⅢ層上部で、Ⅴ層まで掘り込まれている。床面の中央には炉跡とみられる焼土が1か所ある。壁の近くから柱穴が8か所検出された。

遺物 (図IV-2)

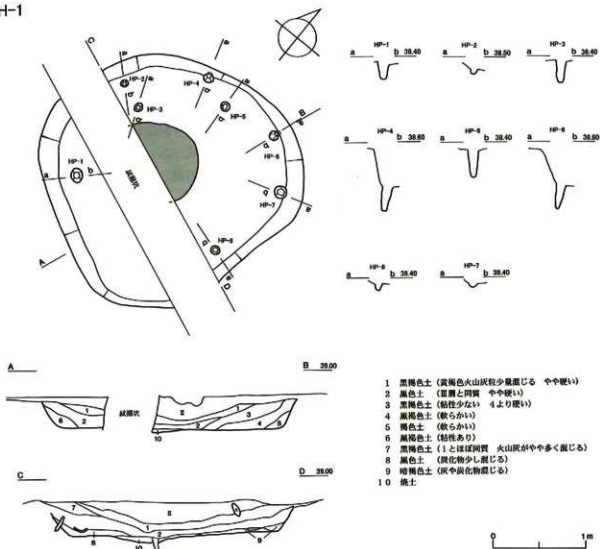
土器: 1～5は覆土から出土したⅥ群土器。1は口縁部が外反する平縁の変形土器。頸部から体上部にかけて縄文地に横走沈線と小波状沈線が施されている。口唇角には棒状工具による刻み目が施されている。覆土出土の資料と周囲の包含層から出土した資料が接合したものである。2は無文の丸底鉢。3は変形もしくは鉢形土器の口縁部。4、5は鉢形土器とみられるもの。

(工藤研治)

石器: 覆土から挟入石器(6)、剥片石器片、Rフレイク、石核、剥片、たたき石(7)、礫・礫片が出土している。6は挟入石器。背面右側縁のほぼ中央に挟り部を作り出す。最初に大きな剥離で粗く挟り部を作り出した後、さらに細かい加工により刃縁を整えている。周縁部の大きな加工は形態補正のためと思われる。7はたたき石。被熱のため下半部を大きく欠損し、部分的に変色が認められる。表面上半部に細かいあばた状のたたき痕がある。

(広田良成)

H-1

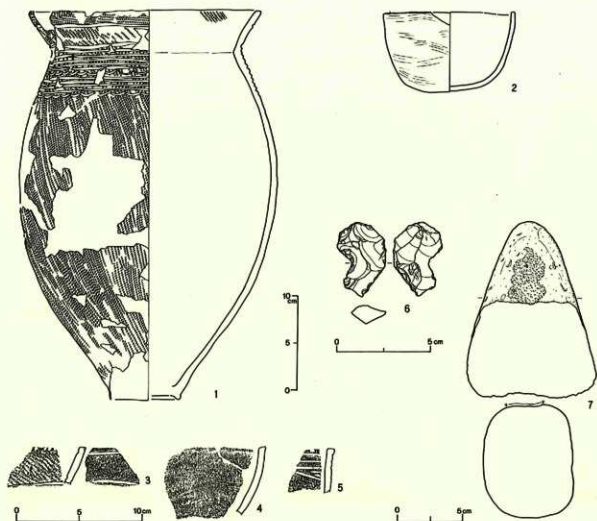


図IV-1 H-1

H-2 (図IV-3・4)

位置 I-17・18、J-17・18、K-17・18 規模 9.60×8.28/9.04×8.00/0.34

特徴 台地先端の平坦面にある。Ⅲ層上面で円形の浅い大きな窪地となっていた。トレンチ調査の結果、Ⅲa層から掘り込まれた浅い堅穴と分かった。堅穴の覆土は極めて薄く、中央部では数センチメートルほどの厚さしかない。床はⅢb層中にある。平面形は円形に近いが北西-南東方向で少し長くなる。南側は塹壕によって切られているため、張り出し部の有無については明らかでない。床は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。床面中央には石囲いの炉跡が1基ある。炉石の一部はⅡ層の火山灰を除去した段階で露出していた。図として記録していないが、東側半分の壁際では覆土から細かい炭化物やくすんだ赤褐色の焼土が点々と検出された。量的には少ないけれどもH-9の炭化材や焼土の出土状況に類似することから、本遺構も焼失した家屋の可能性が高い。柱穴と考えられる小ピットは15個ある。床面で確認できたものは少数で、大部分は床面をさらに掘り下げてⅢc層若しくはⅣ層で検出されたものである。住居跡の周囲では構築時に掘り上げた土が10~30cmの厚さでめぐっているのが確認された。この掘り上げ土はH-3を覆い、H-4の壁に切られているのが後に確認された。した



図IV-2 H-1出土の遺物

がってH-2はH-3より新しく、H-4より前に構築されたものである。また、土層断面図に現れているとおり、中央部ではX-10が本遺構を切っている。北西部ではX-12が床面をIV層まで掘り下げた段階で検出された。遺物の取り上げに当たっては、覆土より上位に堆積しているⅢa層も覆土との区別が判然としないほど薄かったため、便宜的に上面から1～2 cm程掘り下げて出土した遺物をⅢa層出土の遺物、それより下位から出土したものを覆土の遺物、炉跡の確認された面から出土したものを床面出土の遺物として扱っている。床面からはVI群の付付き鉢が1個体分つづれた状態で出土している。

遺物(図IV-5～11)

土器：出土資料のうちI群A類(17)、II群A類(1)、VI群(2～16、18～48)を図示した。

床面及び床面直上出土の資料(1～12、17～30)

覆土や周囲の遺物包含層及び隣接する遺構から出土した資料が多数接合したものもここで記載する。17は沈線文が施されたものでムシリI式に相当するものである。1は体部に羽状縄文が施されたもので、口唇上にも施文されている。胎土には砂粒と繊維が含まれている。2～7は甕。肩が張らず頸部が内傾するもの(2、3、5、7)と頸部と肩部の境が不明瞭になり一連の曲線を描くもの(4、6)

がある。2、3は頸部に無文帯を残すもので、2では口唇角、3には口唇上に刻み目が施されている。4、5は頸部にも施文されているもの。4の頸部には縄文、5には縄文地に鋸歯状の沈線文が施されている。6、7は全面に縄文が施されたものである。8、10～12、26～28は鉢土器。8は揚げ底、11、12は丸底。9は台付鉢。体部の縄文は縦位の磨り消しが施され、縞状を呈する。台部には透かしがあり、無文地に沈線文と列点文が施されている。裾の部分を残す。27はH-3床面出土の資料と接合したものである。29は無文の浅鉢。18～25、30は口縁部が外反する小片。

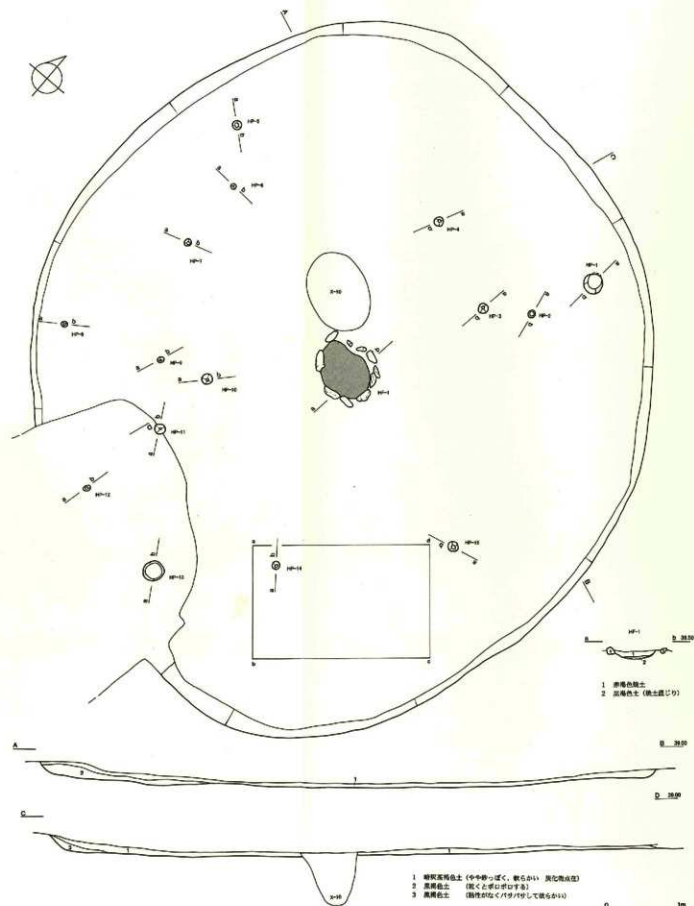
覆土出土の資料（13～16、31～48）

13は胴部と頸部の境が不明瞭な甕。口縁部から体上半部にかけて横走沈線と小波状沈線が交互に施され、頸部のあたりには列点文がめぐる。14は甕とみられる体下半部の復元資料である。31～39は甕の口縁部とみられるもの。42は鉢形土器。口唇に刻み目が施され、体部に沈線で区画された特殊縄文と無文帯が交互にめぐる。15、16、46、47は浅鉢。15は口縁部に小突起が1個付き、口唇に刻み目が施されている。体部には無文地に特殊縄文で緩やかな波状文が施され、後に沈線で区画されている。16、47は無文。46縄文が施されているもの。40、41、43～45は鉢若しくは浅鉢の口縁部。48は底面に沈線文が施された底部。

（工藤研治）

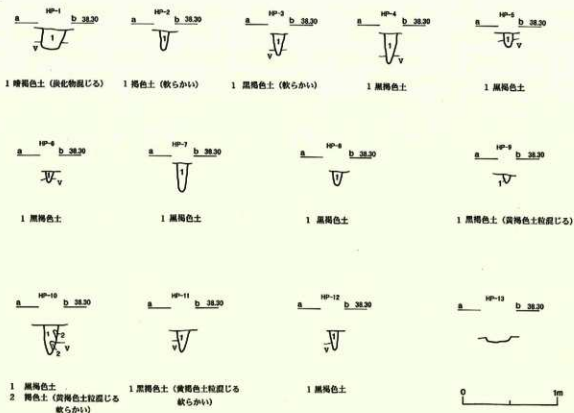
石 器：床面及び床面直上から石鏃（3・4・7）、石錐（11・12・13）、両面調整石器（15・16）、スクレイパー（18）、両極石器、剥片石器片（21）、Rフレイク、石核（22～31）、剥片、原石、たたき石（33～37・39・40・42）、すり石（43・44）、砥石（45・46）、石鏃、加工痕、円形礫石器（54）、有孔自然石（53）、焼成粘土塊等が出土し、覆土からは、石鏃（1・2・5・6・8）石錐（10）、つまみ付きナイフ（14）、靴形石器、両面調整石器、スクレイパー（17・19）、両極石器（20）、石核、磨製石斧（32）たたき石（38・41）、すり石、砥石、石皿・台石（47）、魚形石器（50・51）管玉（52）等が出土している。また、炉から未分類土製品（55）が出土している。1～9は石鏃。全体的に薄身である。1、3～8は有茎凸基。2は有茎平基である。1は狭長に作り上げられている。加工は両面に共に非常に丁寧である。側縁は特に入念な加工が施され直線状に仕上げている。2、3、5、6は両面に素材面を残す。2、4、5は側縁がやや内湾する。3は先端部を欠失し、表面右側の返しがりみを帯びる。4はやや厚身である。5は裏面に焼けはじけが認められる。6は先端の細長い折れ面が裏面に認められる。7、8は未成品で形状は歪んでいる。9は無茎凹基。薄身で丁寧な作りである。基部は比較的大きな剥離で作り出されている。10～13は石錐。10、11は棒状のもので丁寧な周辺加工で尖頭部を作り出す。11は両面に素材面を残し、側面は素材の影響を受けやや反る。上部に柄部が作り出されている。12は黒曜石製で形状は偏平である。背面右側縁先端部と腹面左側縁に丁寧な加工を施し、やや太い先端部を作り出す。使用痕は認められない。13は横長剥片を素材とし剥片の一部に尖頭部を作り出す。14はつまみ付きナイフ。挟持部を両面からの加工で作り出す以外は片面加工である。背面の両側縁に刃部をもち、右側縁に丁寧な加工による急角度の刃部を作り出す。背面の稜線はやや右側縁による。15、16は両面調整石器。15は上下面が折れ面で、未成品が加工途中で放棄されたものである可能性がある。16は表面に大きく自然面を残す。腹面上半部は厚みを取るための周縁加工が施され、下端部がやや鋸歯状を呈する。17～19はスクレイパー。17、18は片面加工のもの。17は柄部が明瞭に作り出される。刃部は下端部に作り出され、柄に斜めにつけられる。18は上部を欠失している。左側縁上部が屈曲していることから柄部があったものと考えられる。周縁調整で左側縁から下端部にかけて、丁寧な加工により丸みを帯びた急角度の刃部が作り出される。19は横長剥片素材で下端部と

H-2



図IV-3 H-2(1)

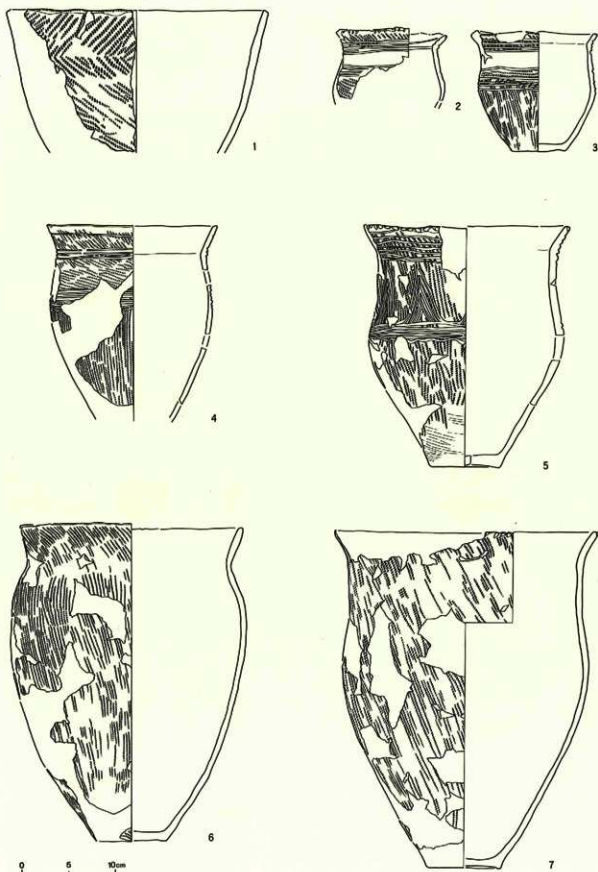
H-2



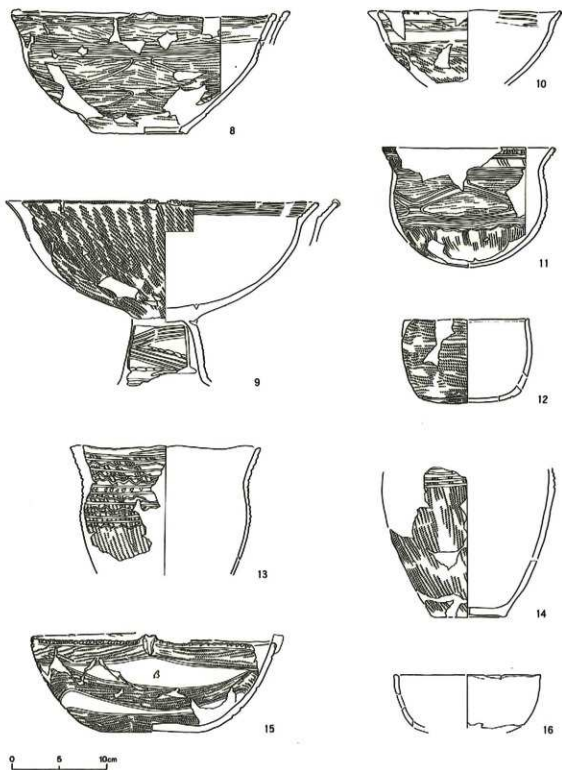
図IV-4 H-2 (2)

背面右側縁に外湾する刃部を作り出す。下端部の刃部は両面からの加工により作り出される。20は両極石器。上端と下端に対向する剥離が認められる。細かい剥離は潰れていて、階段状を呈する。21は剥片石器片。両面調整で下端部は刃部を作り出す途中と考えられる。靴形石器の破損品の可能性が高い。22～31は石核。22～27は小形の石核で取られる剥片も小形である。28～31は比較的大形のもの。22、24は打面、作業面共に転移が著しく、かなり小形の剥片まで取っている。23は上面が平坦な節理面でそこを主に打面としており、裏面の自然面も打面として利用している。25は残核の下端部に細かい加工が施されており、スクレイパーに転用している可能性がある。26は表面と左側面を作業面としている。27は打面と作業面を固定している。28、30は偏平な礫を素材としている。29、31は求心状に剥片を剥離している。32は磨製石斧。表面と裏面周縁に打ち欠きが施され、表面の一部と刃部に研磨が施される。33～42はたたき石。33～36は棒状礫の端部にたたき痕をもつもの。33のたたき痕は軽微である。34は両面にくぼみ状のたたき痕をもつ。35は大形で大きな剥離によるたたき痕が認められる。37は周縁部にたたき痕が認められる。38～40は礫の平坦面にたたき痕が認められるもの。43、44はすり石。43は礫の2側縁をすり面としている。45は砥石。46～48は石皿。いずれもよく使いこまれている。49は石鉈。50、51は魚形石器未成品。50は周囲から打ち欠きが施される。51は周囲からの打ち欠きの後上面の部分的に研磨が施される。52は管玉。53は有孔自然石。偏平な円礫の中央右寄りに自然の孔が認められる。54は円形礫石器。主に裏面からの加工によりほぼ円形に整形している。55は未分類土製品である。

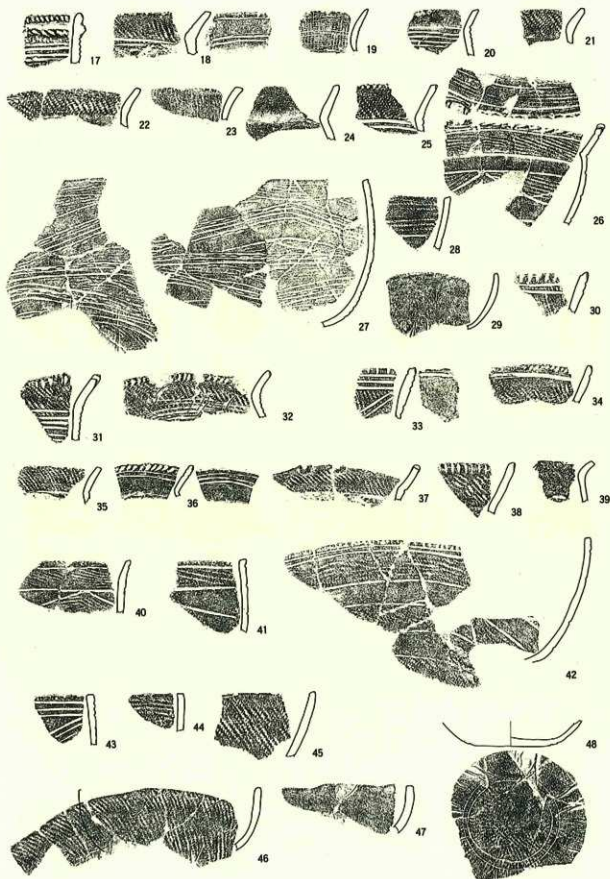
(広田良成)



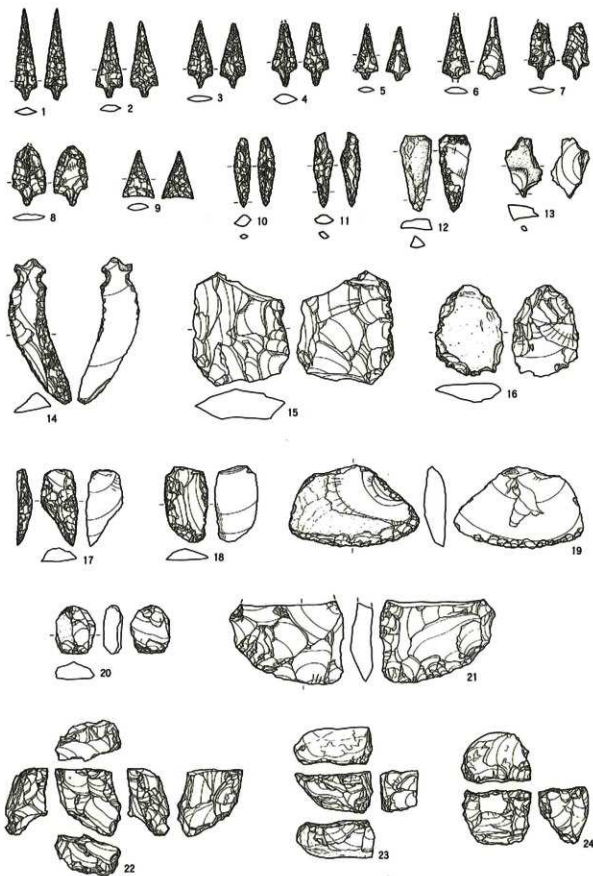
図IV-5 H-2出土の土器(1)



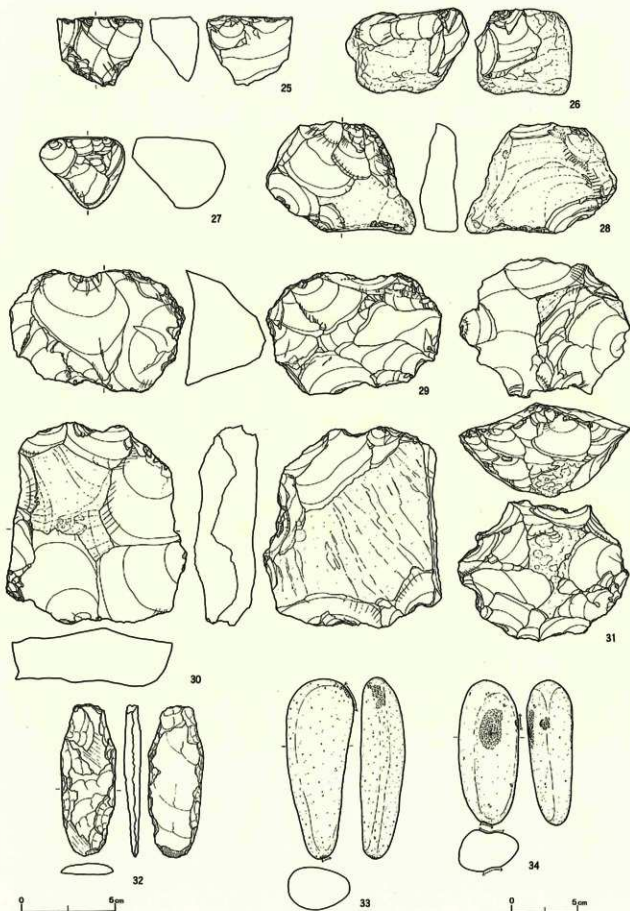
図IV-6 H-2出土の土器(2)



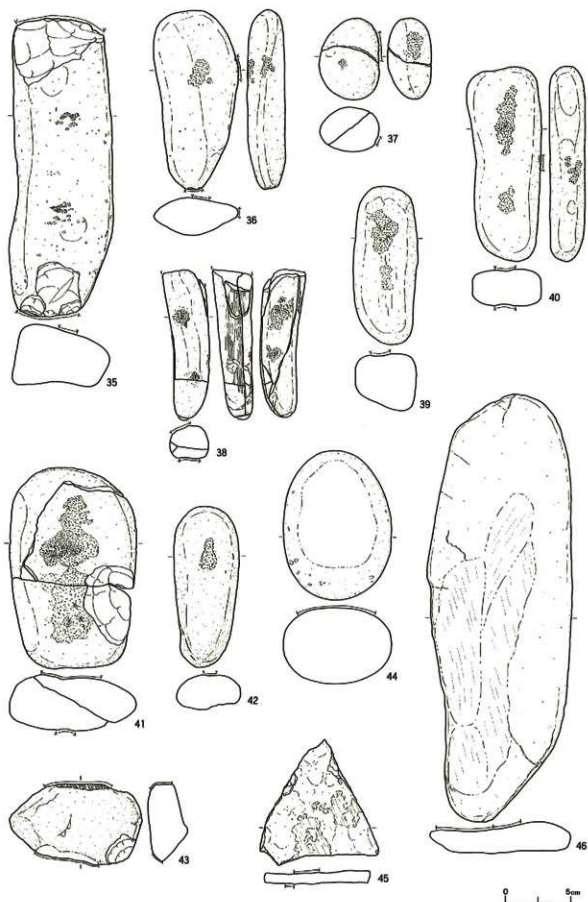
図IV-7 H-2出土の土器(3)



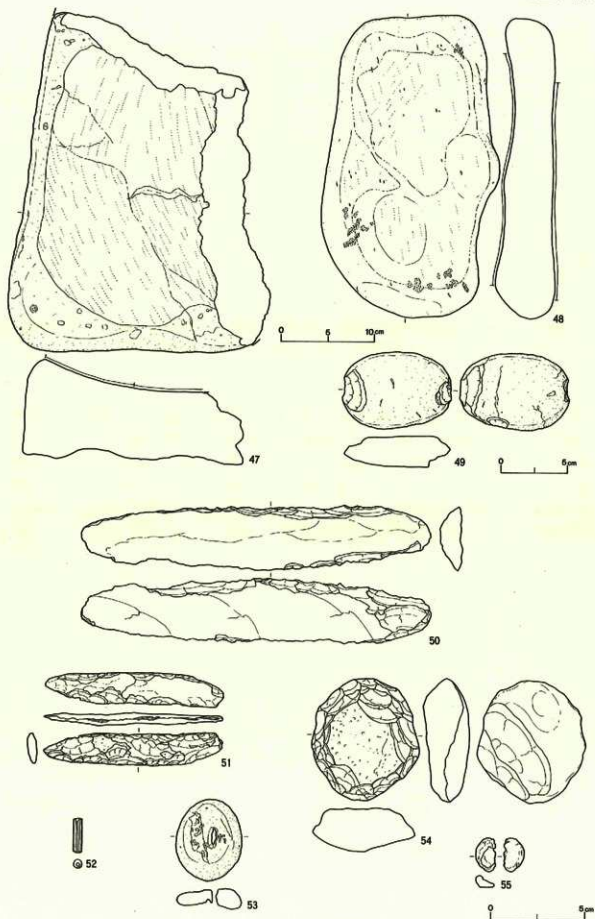
図IV-8 H-2出土の石器(1)



図IV-9 H-2 出土の石器(2)



図IV-10 H-2出土の石器(3)



図IV-11 H-2出土の石器(4)・石製品・土製品

H-3 (図IV-12)

位置 H-18・19、I-18・19 規模 $4.98 \times 4.26 / 4.79 \times 4.12 / 0.22$

特徴 台地先端の平坦面にある。Ⅲ層上面で円形の浅い窪地となっていた。H-2の壁にかかる東西方向の土層観察用のベルトとそれに直交する2本のベルトを残して調査した結果、Ⅲa層から掘り込まれた浅い壁と分かった。床はⅢb層中にある。壁は低いけれども全周で確認された。平面形は円形に近く、床面は平坦である。床面から焼土が3か所検出された(HF-1~3)。柱穴とみられる小ピットは床面から1個検出されたのみである。覆土は薄く、床の3分の2ほどをH-2の掘り上げ土が直接覆っていて、硬く締まっている。H-3廃絶後この場所がH-2あるいはH-4の通路等として使用され、踏み固められたと考えることもできる。遺物の取り上げに当たってはH-2と同様、壁穴の範囲内にあっても上面から出土した遺物はⅢa層出土として扱っている。

遺物(図IV-13~15)

土器：出土資料のうちⅥ群土器を図示する。

床面出土の資料(1、6、8~10)

1はやや肩が張り、頸部が内傾ぎみに立つ甕。頸部は無文をなし口縁部と体部との境には横走沈線がめぐる。床面から出土した1点の破片と周囲の包含層から出土した資料が接合したものである。6、8~10は甕とみなされる口縁部。

覆土出土の資料(2~5、7、11~20)

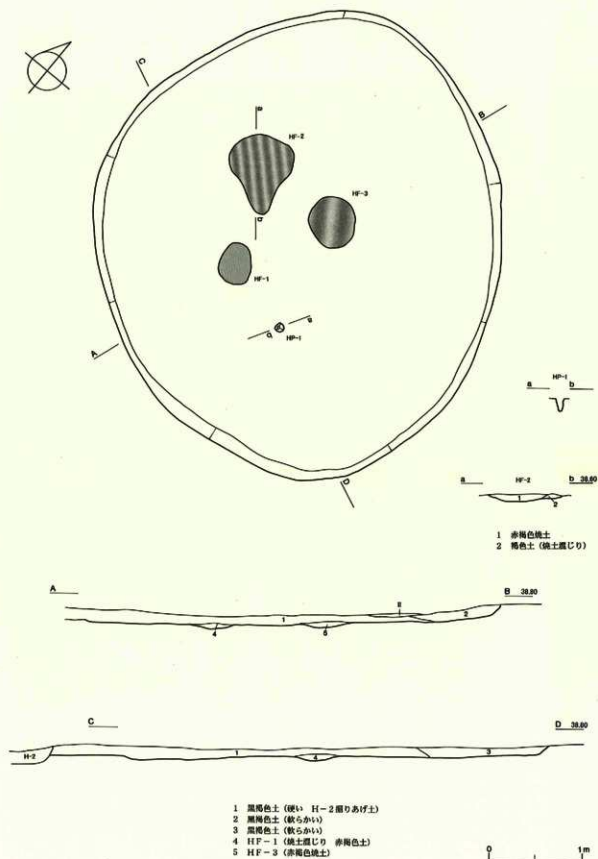
13は頸部が無文をなす甕。11、12は甕とみられる口縁部。2~4は鉢。2は口縁部が外反し肩がやや膨らむもので、口縁部は小波状をなす。胴部には無文地に波状の沈線文が施されている。3、4は底部から口縁部に向かって外に開く平縁のもの。口縁部と胴部に沈線で区画された特殊縄文が帯状に施され、その間は無文帯となっている。5は平縁の浅鉢。口縁部には横走沈線が4条めぐる。胴部には沈線で画された斜行縄文が帯状に2段施され、その間は無文となる。14~20は鉢もしくは浅鉢。口縁部が外反するもの(14)、内傾するもの(17)がある。

(工藤研治)

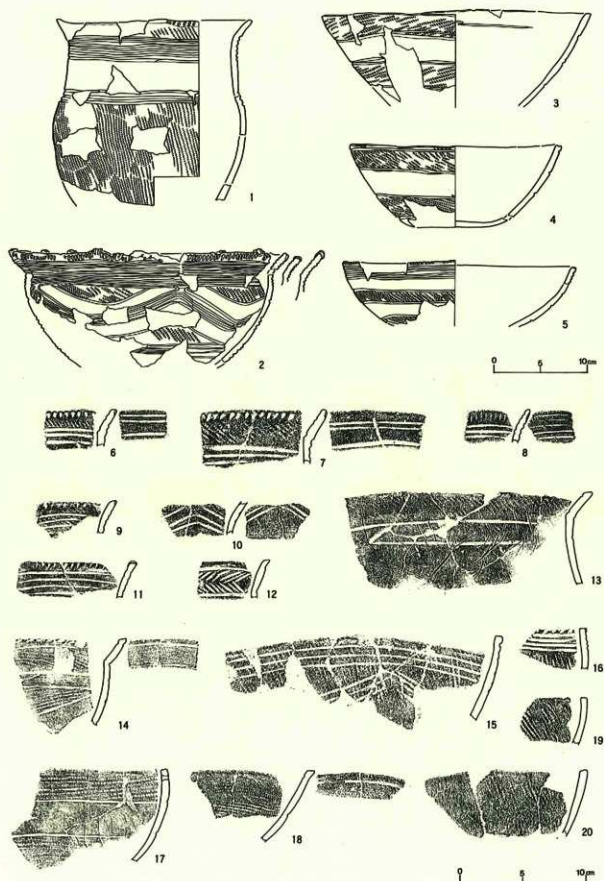
石器：床面から石鏃(2)、剥片石器片、石核(11・12・14)、剥片、加工痕跡が出土し、覆土からは石鏃(1・3・4・5・6)、石錐、靴形石器(7)、スクレイパー(8・9)、挟入石器、両極石器、剥片石器片(10)、Rフレイク、石核(13)、剥片のほか、磨製石斧、たたき石(15)、砥石(16)、台石片(17) 礫・礫片、魚形石器未製品(18)が出土している。1~6は石鏃。全て有茎凸基で、2~4は先端部を欠失する。1、2、5は側縁が内湾し、3、4は外湾する。4、5は素材面を大きく残す。5は両面に周縁加工が施される。6は未成品と考えられる。7、8は靴形石器。9はスクレイパー。10は剥片石器片。11~14は石核。15はたたき石。礫の両端部と表面及び左側面にたたき痕をもつ。16はすり石。両平坦面にすり面を有し、周縁部にはたたき痕が認められる。17は台石。欠損が著しい。18は魚形石器未成品で、裏面に打ち欠きが認められる。表面及び側面には浅いあばた状のたたき痕をもつ。

(広田良成)

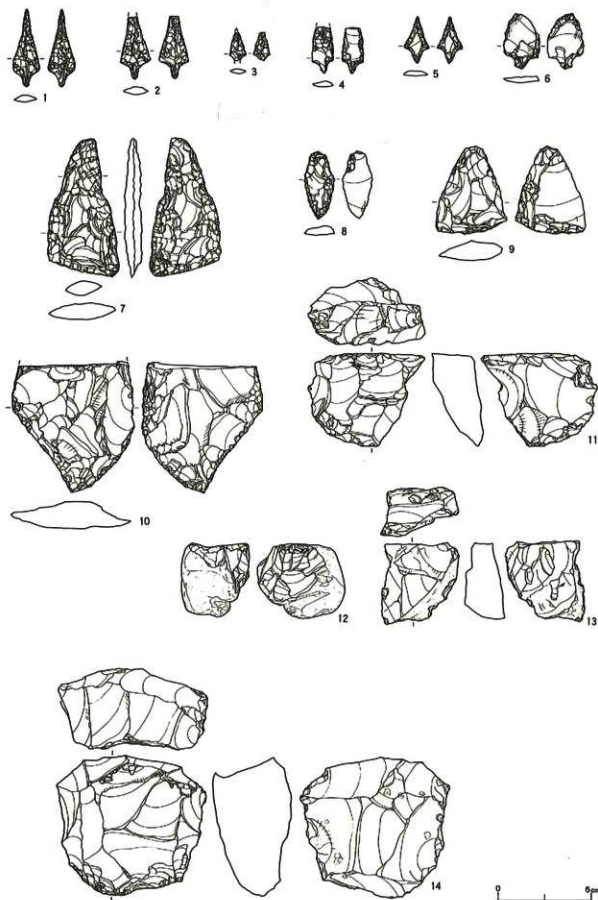
H-3



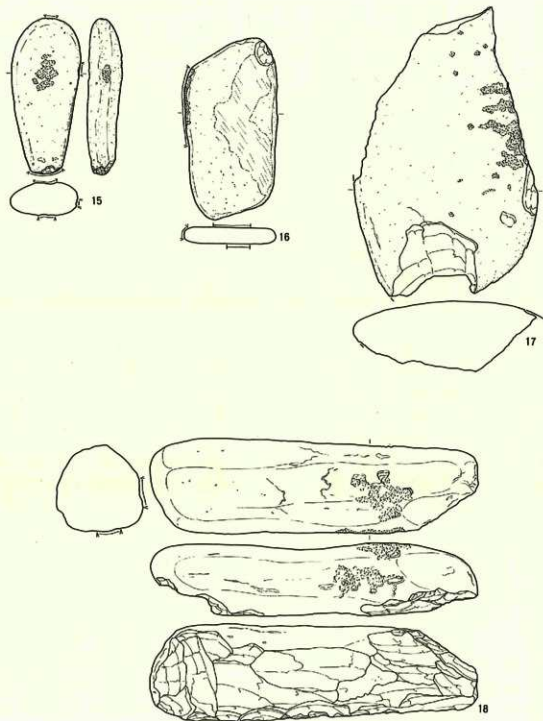
図IV-12 H-3



図IV-13 H-3出土の土器



図IV-14 H-3 出土の石器(1)



図IV-15 H-3出土の石器(2)・石製品

H-4 (図IV-16)

位置 G-17・18、H-17・18 規模 $6.54 \times 6.04 / 5.96 \times (5.80) / 0.15$

特徴 台地先端の平坦面にある。Ⅲ層上面で円形の浅い窪地となっていた。堅穴の中央部は塹壕にカギの手に切られている。直交する2本の土層観察用のベルトを残して調査した結果、H-2やH-3と同様の浅い堅穴と分かった。西側ではH-2の掘り上げ土を切っている。Ⅲa層から掘り込まれ、床はⅢb層中にある。塹壕に切られている部分と崖に面している東側では壁の立ち上がりを検出できなかったため、張り出し部の有無は確認できなかった。平面形は円形に近いと推定される。覆土は薄く、中央部では5cmほどの厚さしかない。床面中央には石囲いの炉跡が1基ある。Ⅱ層の火山灰を除去した段階で全ての炉石が露出していた。柱穴と考えられる小ピットは2個検出された。遺物の取り上げはH-2・H-3と同じく、上面から出土したものをⅢa層出土として扱い、住居跡の遺物とは便宜的に区別している。

遺物 (図IV-17~20)

土器: 出土資料のうちVI群土器を図示する。

床面及び床面直上出土の資料 (1~51)

1~5は甕。床面出土の資料と床面直上、覆土、周囲の包含層から出土した資料が接合している。平縁のものと波状口縁のものが有り、肩の張りが弱く頸部が内傾するもの(1~4)と胴部と頸部の境が不明瞭になり、一連の曲線を描くもの(5)がある。1~3は頸部に無文帯があるもので、上下を横走沈線で区画されている。4、5は縄文が施されたもので口縁部と頸部の境界に沈線がめぐり、6は甕若しくは鉢。無文地の頸部と胴部に波状の沈線文が施されている。7、18、45は鉢。7は口縁部が内傾する丸底ぎみの無文の鉢。18、45は胴部から口縁部にかけて外に開くもので、胴部に無文帯を挟み沈線で縁取られた特殊縄文が施されている。18は底面にも施文されている。8~11、21は浅鉢。8、21は無文。11は台の付く可能性もある。10は台付き鉢。体上半部には無文地に大柄な波状の沈線文が施され、上下を横走沈線で区画されている。47、48は壺。47は頸部に3条の横走沈線がめぐり、その下縁には小波状沈線が施されている。11~15、22~38は甕と考えられる口縁部。36は口縁部が少し外反するもので、頸部には縦走する特殊縄文が施され、胴部との境界には幅の狭い斜行縄文が施されている。16、17、19、20、42~44、46は鉢若しくは浅鉢の口縁部。口縁部が外反するもの(42、43、46)とそうでないものがある。

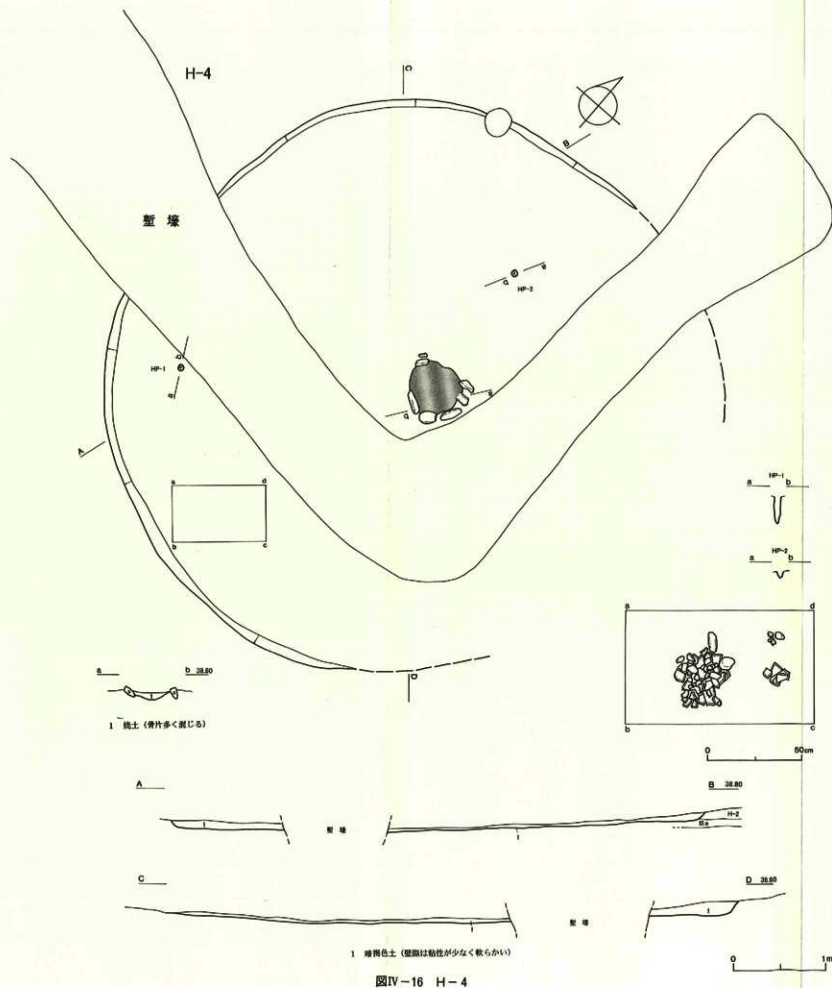
覆土出土の資料 (52~62)

52~55、58~59は甕と考えられる口縁部。56、57、61、62は鉢若しくは浅鉢の口縁部。

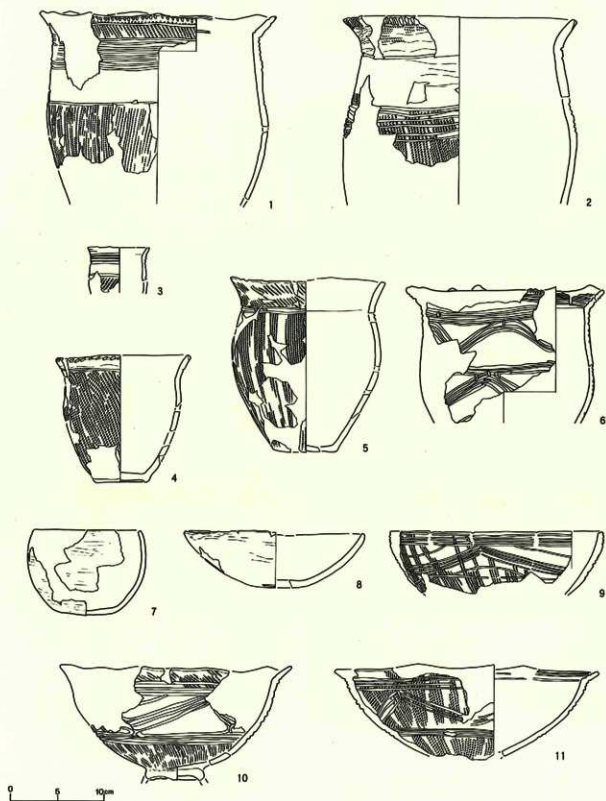
(工藤研治)

石器: 床面から石鏃(1・2)、両面調整石器(3)、スクレイパー(5~9)、挟入石器(10)、両極石器、剥片石器片、Rフレイク、石核(11~14)、剥片、磨製石斧(14)、たたき石(16)、礫石器片、礫・礫片、有孔自然石、石製品片、石製品剥片、焼成粘土塊(17・18)が出土し、覆土からは石鏃、石錐、両面調整石器、スクレイパー(4)、両極石器、剥片石器片、Rフレイク、石核、剥片、砥石、礫・礫片、石製品剥片、石製品片が出土している。1、2は有茎凸基の石鏃。1は先端部を欠失する。2は両面に大きく素材面を残す。3は両面調整石器。4~9はスクレイパー。4~7は片面加工のもので柄部が作り出される。4、5は刃部が丸みを帯びるもの。6~8は刃部が柄に対して斜めにつけられる。10は挟入石器。背面右側縁に挟り部が作り出される。11~14は石核。15は磨製石斧。表面全体と裏面周縁部に打ち欠きが施され、刃部付近のみ研磨が認められる。16はたたき石。大形礫を素材とし、両平坦面と周縁部にたたき痕が認められる。

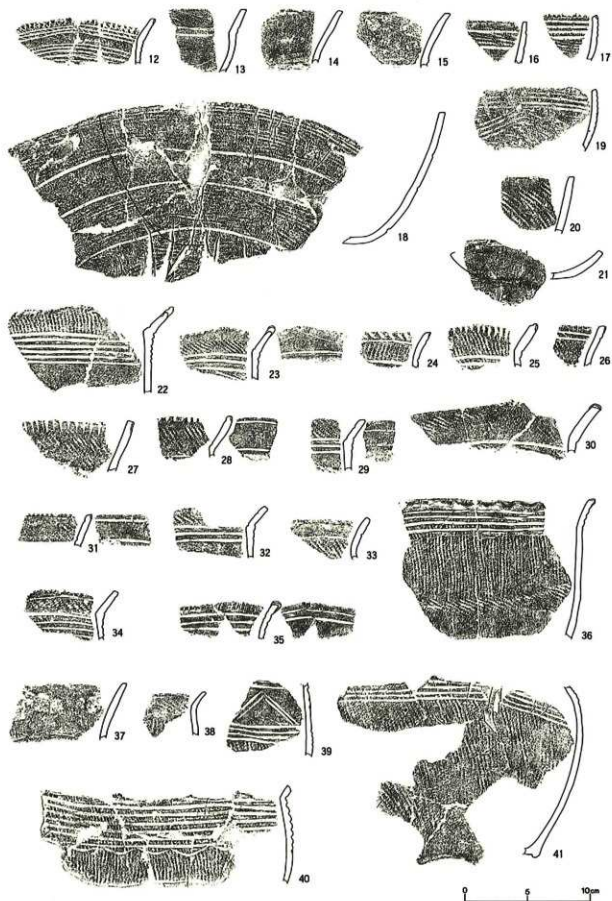
(広田良成)



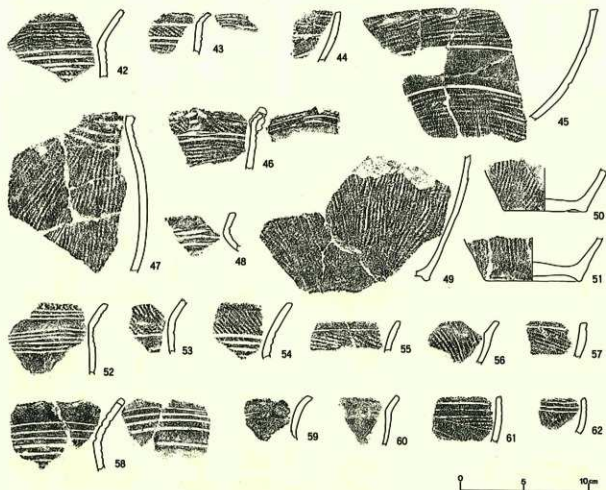
図IV-16 H-4



図IV-17 H-4出土の土器(I)



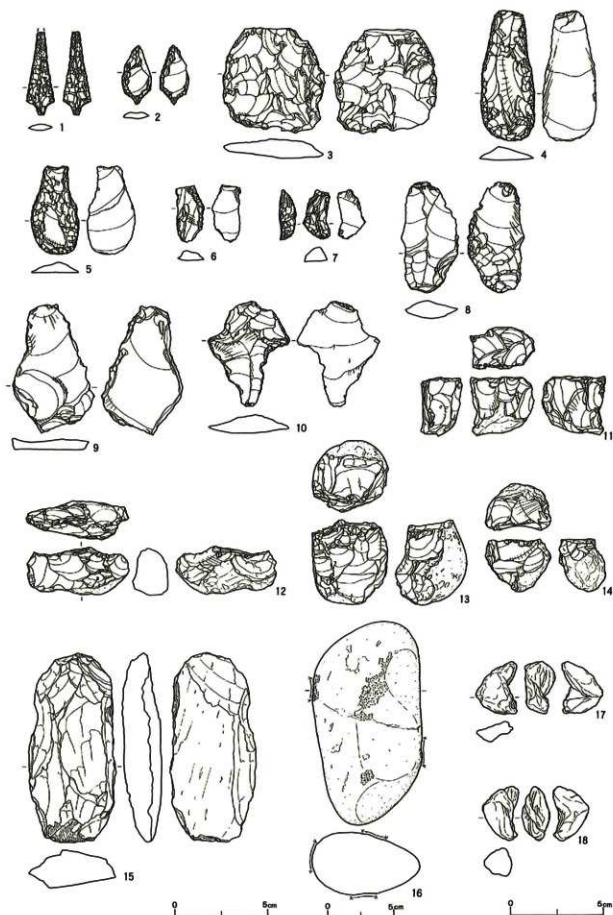
図IV-18 H-4出土の土器(2)



図IV-19 H-4出土の土器(3)

17・18は焼成粘土塊である。明瞭な指頭圧痕が残る。

(立田 理)



図IV-20 H-4出土の石器・石製品

H-5 (図IV-21)

位置 H-18・19

規模 $2.75 \times (0.54) / 2.64 \times (0.48) / 0.17$

特徴 崖際の平坦面にある。東側は崖の崩落によって失われていて、ごくわずかしか残っていない。半割して調査したところ、浅い竪穴の一部と確認できた。Ⅲa層から掘り込まれ、床はⅢb層中にある。平面形は円形に近いと思われる。調査した範囲内では柱穴や炉跡は検出されなかった。住居跡とする確証はないが、便宜的に住居跡の遺構番号を付けてこの項で報告する。

遺物 (図IV-21)

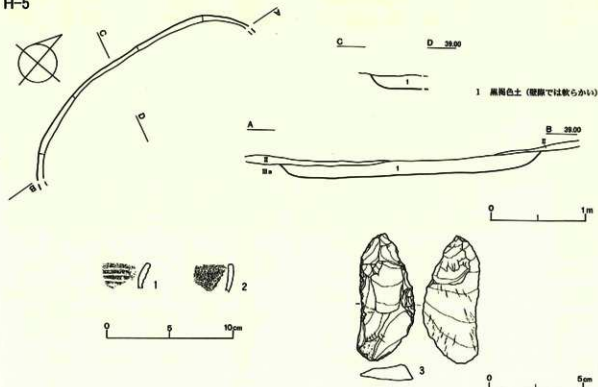
土器：1、2は覆土出土のⅥ群土器。1は甕、2は無文の鉢若しくは浅鉢の口縁部である。

(工藤研治)

石器：覆土からスクレイパー (3)、石核、剥片、原石、礫・礫片、石製品片、石製品剥片などが出土している。3はスクレイパー。背面左側縁に直線状の刃部が作り出される。

(広田良成)

H-5



図IV-21 H-5と出土の遺物

H-9 (図IV-22~33)

位置 O・P-19~21、Q-19・20 規模 10.80×(9.55)/10.05×(9.15)/0.50

特徴 Ⅲ層上面の検出作業中にP-19区から20区にかけて略円形の大きな落ち込みを確認し、住居跡を想定して調査した。既に調査を終えていたO-19区を除き、概ね全周の輪郭が確認された。

プランはほぼ円形だがやや東西に長い。床面は平坦で多少西へ傾斜している。周溝は認められない。壁面は本来垂直に近かったと思われる。堀込みの深さはⅢ層上面から40cm足らず、壕の盛土を切っている北東側でも50cm程度で、ほとんどの部分でⅢ層下底まで達していない。掘り上げ土は概して確認し難かったが、堅穴外の北側の一部(P-21・Q-20区)でⅢ層上面にやや粘土質の土が5cm足らずの厚さで認められた(図IV-31下部網掛け)。

床面の中央に石囲いの炉跡が見られる(HF-2、図IV-22)。炉を囲む礫は一部失われたらしいが方形の炉であったと思われる。堅穴の規模の割に小さい。この南東側に、HF-2に切られた古い炉跡がある(HF-1)。ともに炉内の焼土(特に炉の周縁部)に焼骨片がかなり見られた。

床面では多少疑わしいものまで含めて92基の小穴が確認された(図IV-24・25)。主要なものは径10cm余りで垂直に20ないし60cmほど落ち込み下端が細まる。建物の柱を構成した杭の痕と考えられる。これら杭痕の中から深さや径の類似したものを拾い出し、複数の建物跡が複合しているものと推定した(図IV-26)。

最も古いのはHF-1を囲む4本柱の建物であり、ほぼ同じ位置に2回建て直されたらしい(建物1a~c)。柱の組み合わせは柱穴の規模や切り合いから図IV-26左上のようになる可能性がある。建物1bは1aより新しいとみられる。これらと1cの先後は不明である。4本の柱穴以外に、炉の長軸上に一対の杭痕があるらしいが、これらは建て直した痕跡がない。いずれにしても杭痕の根入れ深が20cmほどと浅いことから、建物1にともなう堅穴の床面は本来もっと浅かった可能性がある。建物1cの南側柱通りはややHF-1に接近し過ぎ、この炉と共存したとは考えにくい面もあるのだが、ことによると1cに伴う炉は堅穴の掘り直しによって削平され、残っていないのかも知れない。とすると1cが最古の建物ということになる。

次に建物1から北西側にずれて、やや規模の大きい建物2が作られたと考えられる。南西側が少し開くほかはほぼ等間隔に5本の柱痕が回る。この建物に伴う炉跡は確認されていないが、炉の長軸上に当たりそうな位置に一対の杭痕があることは建物1と同じである。これらは主柱穴を結んだ線上に位置しないようなので、屋根の荷重を受けない施設の痕跡らしいが、あるいは棟持柱のような構造も考慮すべきであろうか。主柱穴の北側には、想定される建物の中心からほぼ等しい距離(約3.5m離れた位置)に小径で垂直の穴がいくつか見られる。これらは建物2に伴う堅穴の輪郭を示す可能性もある。なお建物2に対応する炉が見られないのは、建物1cについて想像したように、後の堅穴の更新で削平されたことを意味するかも知れない。ただこの解釈は、建物2より古いと考えたHF-1が削平されずに残っていることは矛盾する。

その後HF-2を囲んで建物3が作られた。これは確認された円形の堅穴の中央に位置しており、最終的に拡張された堅穴に伴う建物であると考えられる。建物2と建物3はHP-23を共有した可能性があり、この柱穴が特に深いのは、まだ残っている建物2の柱根の上に建物3の柱を打ち込んだことを意味する可能性がある。建物3の柱穴は相互の距離と炉の中心からの距離がほぼ等しい。正六角形に配列するかも知れたが南側では確認することができなかった。概ね炉の長軸上、炉から北へ1mほど離れた位置にも杭痕がある模様である。建物3では堅穴の壁(特に北側)に沿ってほぼ垂直に打ち込まれた杭痕が確認されている。主柱穴よりかなり細く、軒の荷重を受けたものと考えより、

堅穴の壁を覆った構造の痕跡とみるほうがよいようである。さらに壁と主柱穴の間にも、壁からほぼ等距離に幾つか杭痕が並ぶように見える部分がある。ただしこれらは先に触れたように建物2に伴う可能性もある。

建物3は焼失したとみられる。壁寄りの覆土中に焼土層が形成され(図Ⅳ-27)、その多少下位と思われる層準を中心に炭化材が多く検出された(Ⅴ章4節図24)。焼土層は小グリッドをさらに4分割した50cm四方の範囲を単位として番号(焼土No.)を与えて全量採取し(Ⅴ章9節図24)、浮遊選別をおこなった。平成4年度に独立の焼土として記録したF-25~27はH-9覆土中のものであったようである。炭化材は出土状況の平面図を作成し、一連の材と思われるものごとに番号をつけて取り上げた。材表面の形状や加工が確認できる例はないように思われたので、取上げに際して樹脂による固定などはおこなわず、なるべく粉砕しないよう注意したのみである。

炭化材は放射状に伸びる例が多いが、これと直交するように位置したものもある(Ⅴ章4節図24)。屋根の裾部、または壁面の構造を反映したものと考えられる。明らかに柱と思われる炭化材は確認されず、上屋が腐朽崩壊してから、あるいは解体してから燃えた可能性もないではない。それにしても焼土の分布と覆土の厚さからみて、屋根の全体に葺土があった可能性は小さいと考えられる。

覆土は壁際を除いて薄く、堅穴の中央部では厚さ5cm余りしかない(図Ⅳ-23)。ただ堅穴の東側では、X-9など他の遺構からの掘り上げ土が流入したためやや厚い堆積が見られる。遺構外のa層よりは多少明色で、粘土質の土塊がやや多い。床面に接した厚さ2cmほどの範囲で覆土を全量採取し、小グリッドごとに浮遊選別を実施している。この他に炉の焼土・焼失時の焼土の全量、一部の柱穴の覆土などを浮遊選別している。

H-9からは土器4,021点、石器等7,549点が出土した。この他に木製品と思われるもの2点があるが、炭化しているため確実ではない。土器のうち3,753点までがVI群である。また石器等のうち石器・石製品は92点を占め、石鏃(12点)・スクレイパー(15点)・たつき石(25点)などが目立つ。これら以外に床面覆土等の浮遊選別・水洗篩別に伴って土器648点、石器等(主に微細な頁岩製の剥片)19,792点が得られている。

VI群土器のうち、破片個々の位置を記録したものの出土状況を図Ⅳ-29に示す。堅穴の壁際に多く中央に少ないのは覆土の厚さからしてある程度当然ではあるが、それにしても堅穴中央から半径3mほどの範囲にはごく僅かしか分布していないのが印象的である。また同じ壁際でも南東側には少なく、南西側には密集する傾向にある。図Ⅳ-30・31はH-9覆土出土の破片を含む個体のうち、復元された例の接合破片の分布を示したものである。図Ⅳ-30上部の例の多くのように主に覆土下部(焼失時の焼土・炭化材層より下位と思われる部分)にあって、完形かそれに近い状態で狭い範囲から出土した個体はH-9の焼失に近い時期のものである可能性が高いとみられる。一方図Ⅳ-31上部のようにやや広い範囲に分散して出土した例はH-9との関係にかなり疑問がある。H-9焼失前後と思われる例、口縁部の縄文帯や口唇部の刻みを持たない場合がかなりあるようである。

図Ⅳ-28はH-9周辺のⅢ層上面の地形であるが、この上面付近にややまとまっていた個体の出土状況を図の下部に示した。H-9床面付近の土器より新しい可能性がある。このⅢ層上面付近の包含層は、H-9堅穴の範囲内であってもⅢa層として扱った(図Ⅳ-22の1層)。図Ⅳ-31下部には掘り上げ土と思われるものの直下にあった土器の出土状況を示した。これらはH-9の堅穴の最終的な拡張よりは古いことになり、特にほぼ欠落部分のない状態で出土した図Ⅳ-208の68・図Ⅳ-211の119などは建物3直前の所産かとみられる。

図Ⅳ-32には剥片石器・同石器片・石製品の出土位置、図Ⅳ-33には磨製石器・礫石器・同石器片

の位置を示した。大まかには土器の分布に似ているが、石製品が南西側に集まること、礫石器が必ずしも壁際に集中しないことなどを指摘できるかも知れない。なお床面の小穴の一部は、覆土にかなり多くの剥片（多くは長径2cm未満の小さなもの）を含んでいた。発掘中に注意されたものとしてHP-17・20・23~25・50・61・62があり、また全てではないが小穴の覆土を浮遊選別・水洗篩別した結果、HP-17で305点、同23で1,006点、同24で971点、同25で128点、同29で131点、同32で115点、同38で187点、同50で92点、同51で160点、同53で99点、同61で847点、同62で132点、同83で163点、さらにHP-87で178点の剥片が得られている。HP-17・32・50・61は建物1cの柱穴と考えたものである。住居の廃絶後の窪みが捨て場となって上位から剥片が入り込んだ可能性の他に、建て替えや取り壊しに際して柱を抜いた穴に意図的に剥片の多く混じった土を詰めたということもありうるのかも知れない。

先にも触れたように炭化材の出土状況は本書Ⅷ章4節に図示した（図24）。樹種同定が実施された結果、各属の広葉樹が同定されたがクリ材は認められず、針葉樹材も確認されていない。ただしこれらの炭化材が、屋根の据部や壁など建物の構造の比較的限られた部分に由来する可能性を一応考慮する必要があると思われる。木材以外に炭化したイネ科の桿と思われるものがかなり見られたが、種の同定はおこなっていない。

床面付近その他で採取した土壌の浮遊選別の結果見出された炭化種子の調査結果は本書Ⅷ章9節に記載されている。栽培種の可能性もあるヒエ属種子がかなり出土し、竪穴内の各所で検出されているが特に北西部の壁寄りでは量が多くなる傾向にある。栽培種と考えられるアサの種子も僅かに確認されている。ヒエ属以外ではタデ属・アカザ属・ニワトコ属などの種子がやや目立っている。

動物遺存体も炉跡や覆土中の焼土の浮遊選別で少量確認され、シカ・イワシ・サメ・タイが記載されている（本書別編第3分冊）。

Ⅵ群土器の時期の遺構である。P-27より古く、またH-9の掘り上げ土で覆われていなかったことがほぼ確実であるX-9よりも古いとみられる。南東方に位置するⅥ群土器期の住居群跡との先後は不明であるが、東西・南北方向四辺の石囲い炉のあるH-2などと年代上接近すると思われる。

図IV-28に示すようにH-9の南側では竪穴外周にⅢ層上面で標高39.2mを切る低みが認められ、南側の支柱が存在しないらしいことからみても建物3では南側が出入り口であった可能性が高い。さらに平成3・4年度のO-18・19区の調査で確認できなかったのが単なる不注意でないとすれば、建物3には南壁から屋外まで急激な段差がなかったのではないと思われる。道央以東の縄文竪穴にみるような舌状の出入口構造があった可能性もないとは言えない。

規模の大きさ、上屋の痕跡、炉の存在などから住居跡として特に問題ない。ただ最後に焼失した建物は竪穴規模の割に柱が華奢で炉も小さく、例えば冬期に使われたかどうか疑問である。

（西脇対名夫）

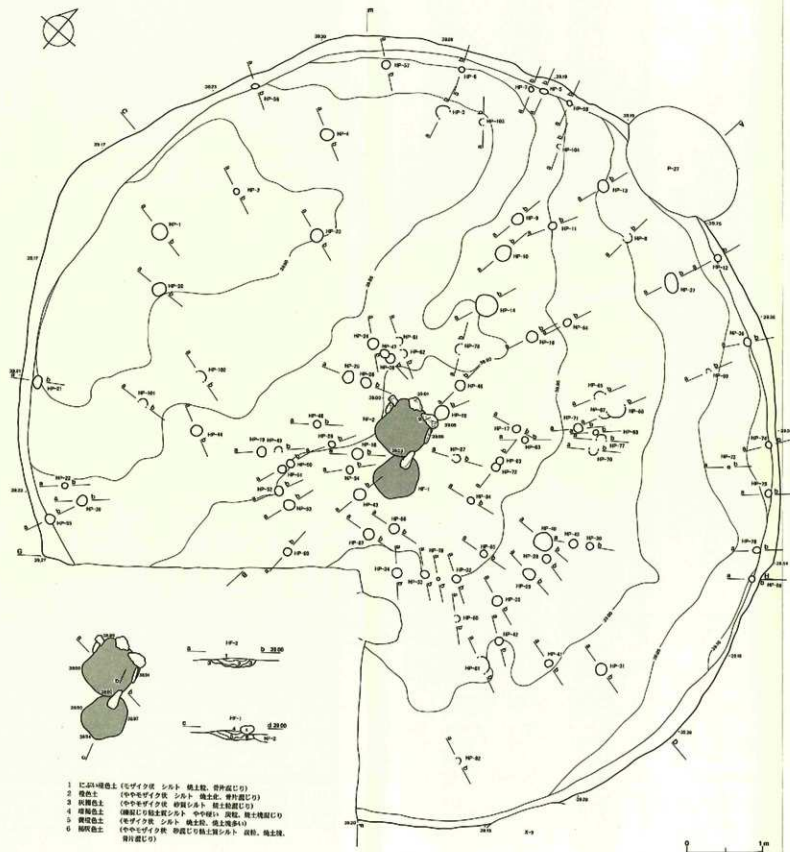
遺物（図IV-34~42）

土器：出土資料のうちⅡ群土器（30、32）、Ⅲ群B類土器（31）、Ⅵ群土器（1~29、33~76）を図示する。

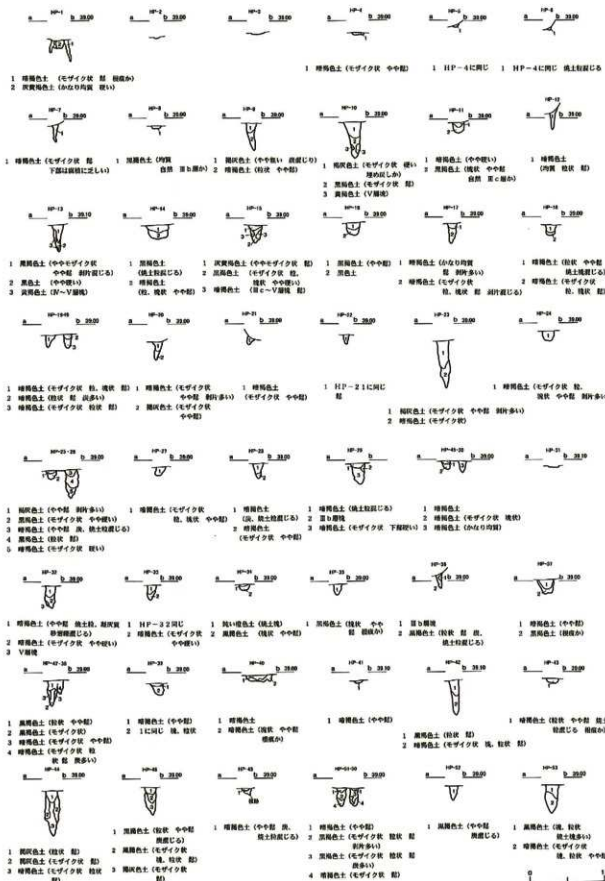
覆土下部出土の資料（1~11）

1~8は甕。緩やかな波状口縁のもの（1、2）と平縁のもの（3~7）があり、頸部に無文帯を残すもの（1~4、6）と無文帯のないもの（5、7、8）がある。1は肩がやや張り、頸部から口縁部にかけて緩やかに開くもので、頸部には無文帯を残す。頸部と胴部の境界には1条の横走沈線がめぐり、口縁部から頸上部にかけては斜行縄文が施され、頸上部には縄文地に4条の横走する沈線文

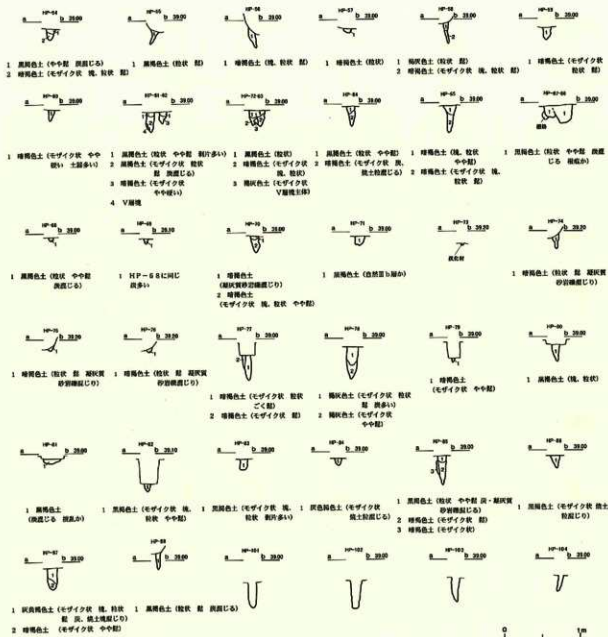
H-9



図IV-22 H-9(1)



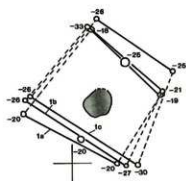
図IV-24 H-9(3)



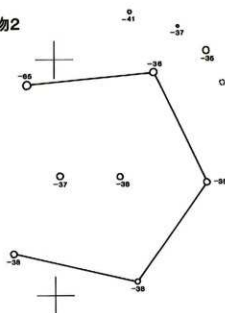
図IV-25 H-9(4)

が施されている。口唇角には刻目が付けられている。2は肩がやや張り、頸部が内傾して立ち上がるもので無文帯の上下は横走沈線で画され、胴部側の横走沈線の下縁には小波状の沈線文が施されている。3、4は肩の張りが弱いもので、3は頸部が内傾し、4は頸部がほぼ直立する。無文帯の上縁は数条、下縁は1条の沈線で画されている。5は縄文が施されたもの。肩と頸部の境界が不明瞭で頸部はやや内傾する。6、7は小型のもの。6は頸部が短く、幅の狭い無文帯を残す。7は胴部が膨らんで口縁部が「く」の字に外反するもの。頸部には沈線文がめぐる。8は口径と器高の比が1:2を超え胴部が少し膨らむやや細身のもので、口縁部は大きく外反する。口縁部は無文で体上部の口縁部との境界には縄文地に横走沈線が数条めぐる。9は口縁部に山形の突起が1か所付く鉢。体上部が張って口縁部は緩く外反する。口縁部と体部の境には横走る沈線文が施されているが途中で切れている。10は口縁部に2個1組の突起が付く丸底の浅鉢。無文地に上下を横走沈線で画された大柄な鋳造状の

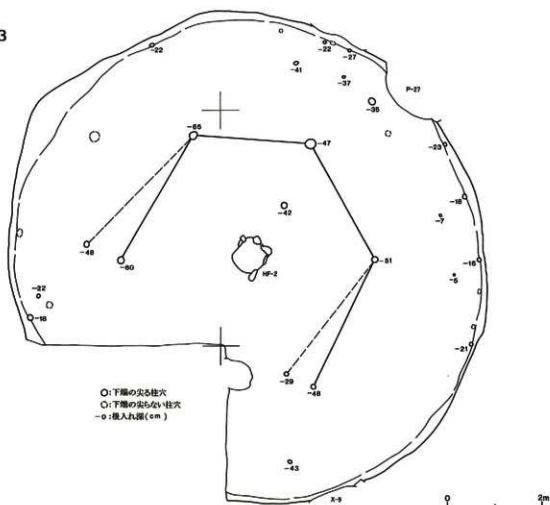
建物1a~c



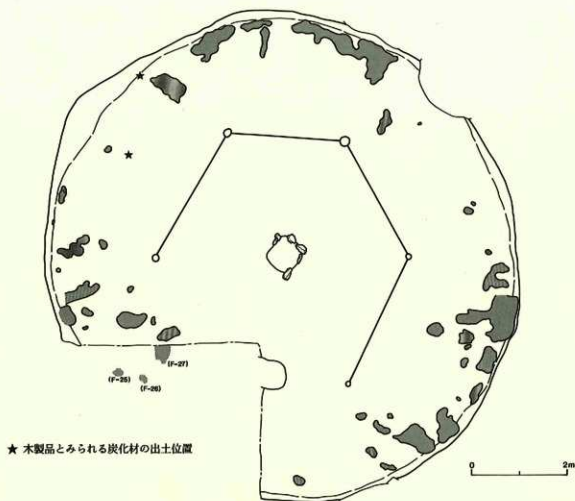
建物2



建物3



图IV-26 H-9 建物垂直材配置案

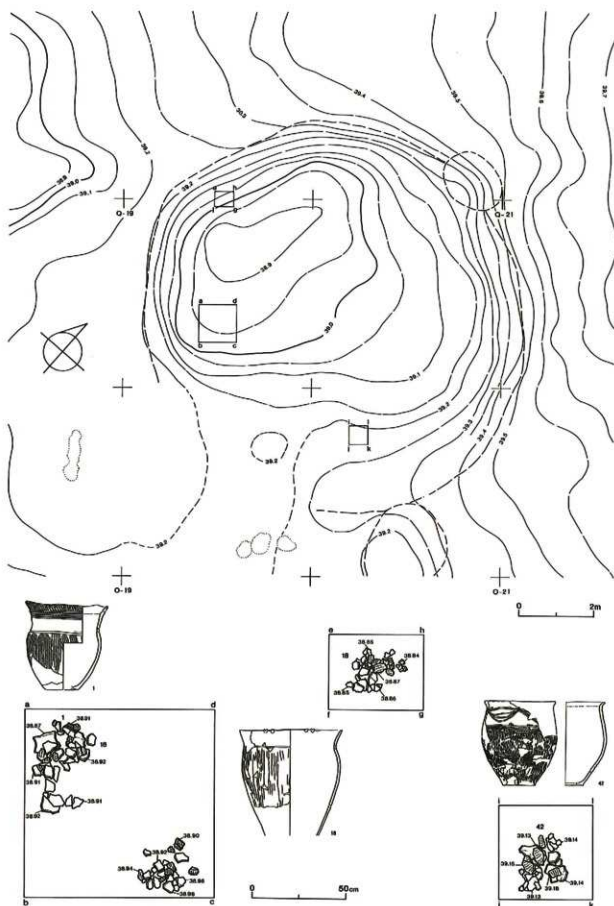


図IV-27 H-9 覆土中の焼土の分布

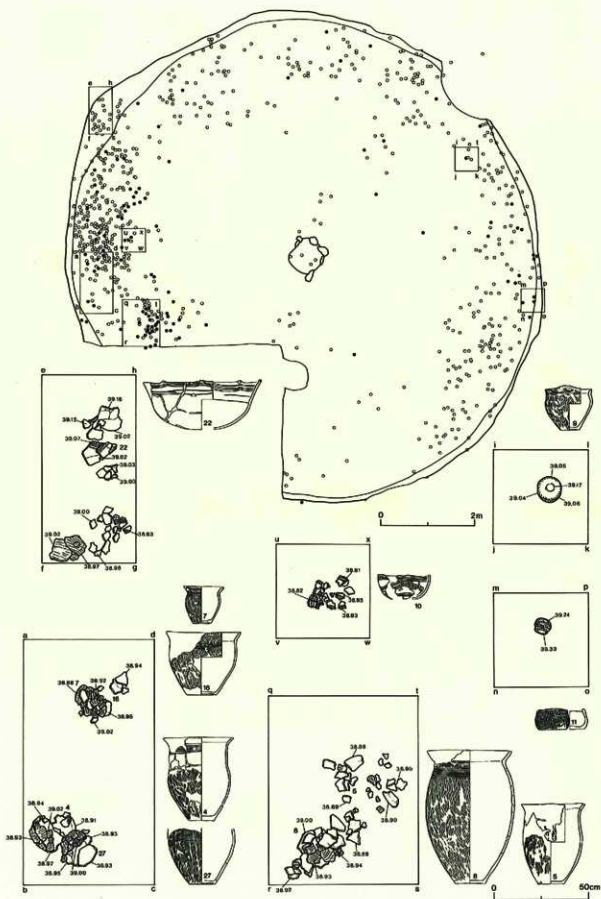
沈線文が施されている。11は体中央部から口縁部にかけてやや内傾する小型の土器。口縁部に横走沈線を1条めぐらし、その下位は底部まで縄文地に乱れた波状の沈線が幾段も施され、底面にも乱れた同心円状の沈線文が施されている。口縁部には2個1組の貫通孔がある。12は台付き土器の台。台部には横走沈線がめぐり、裾の下縁には刻み目が施されている。

覆土出土の資料 (12～76)

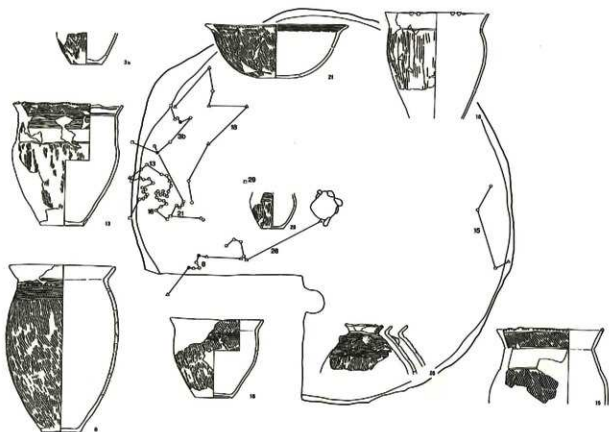
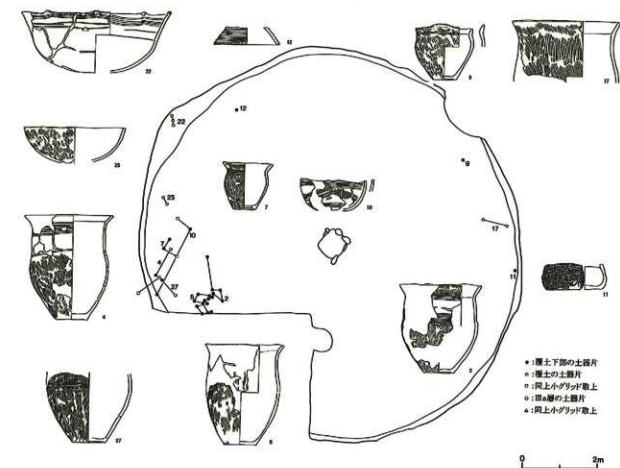
13～18、33～63は甕及び甕と考えられるもの。13は肩が少し張って頸部がやや内傾するもので、頸部には無文帯を残す。無文帯の上部と下部には横走沈線が施されている。口縁部には縄文地に緩やかな鋸歯状沈線がめぐり、口縁部の内面にも沈線文が施されている。14は小型のもの。肩の張りが弱く頸部が内傾して口縁部が外反する。頸部には無文帯が残り、無文帯の上下には横走沈線がめぐり、上部の横走沈線の下縁には小波状の沈線文が施されている。15は肩の張りが弱く頸部が強く内傾し、口縁部が強く外反するものである。16は肩と頸部の境が不明瞭な鉢に近い器形のもので、全面に縄文が施され、口縁部と体部の境には沈線文がめぐり、17、54は頸部が緩く内傾するもので全面に縄文が施されている。18は体上部がやや膨らみ口縁部が外反するもの。口縁部を無文とし、体部と口縁部の境には横走沈線が1条めぐり、口唇には2個1組の貼瘤が付けられ、瘤の上には刻み目が施されている。19～22は大型の丸底鉢。21は平縁、他は波状口縁。19は体上部に4本単位の大柄な鋸歯状の沈線文が



図IV-28 H-9付近Ⅲ層上面の地形（上）と出土の土器

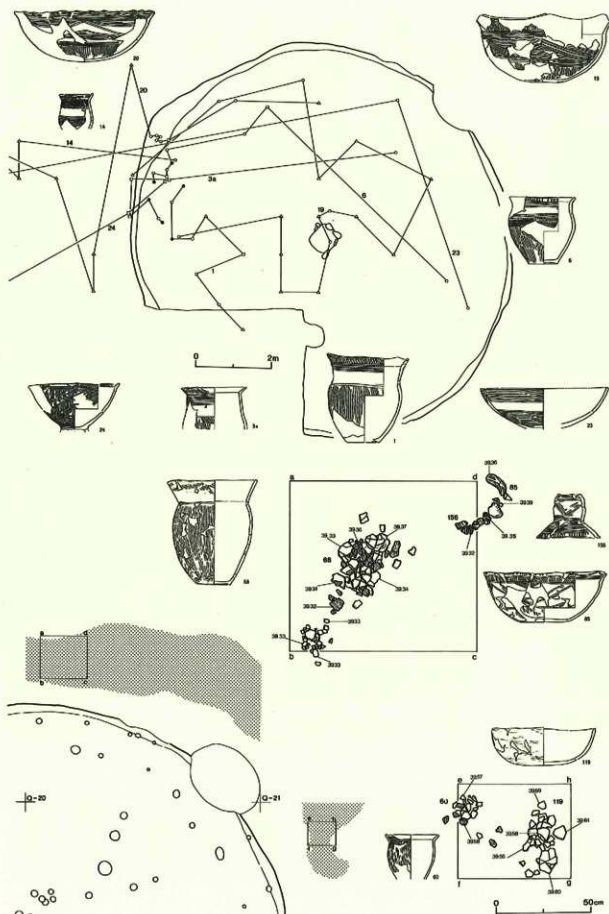


図IV-29 H-9覆土の土器出土状況(1)

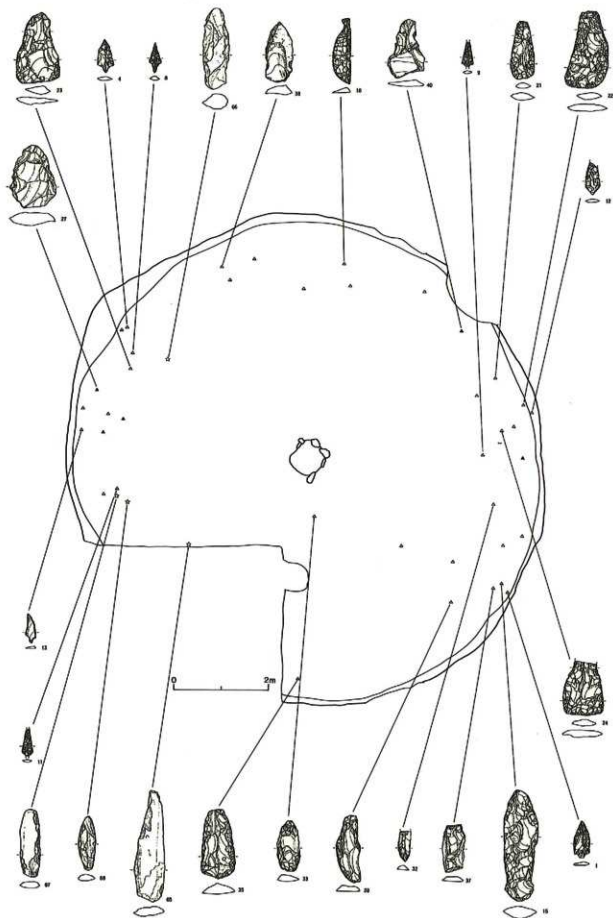


図IV-30 H-9 覆土の土器出土状況(2)

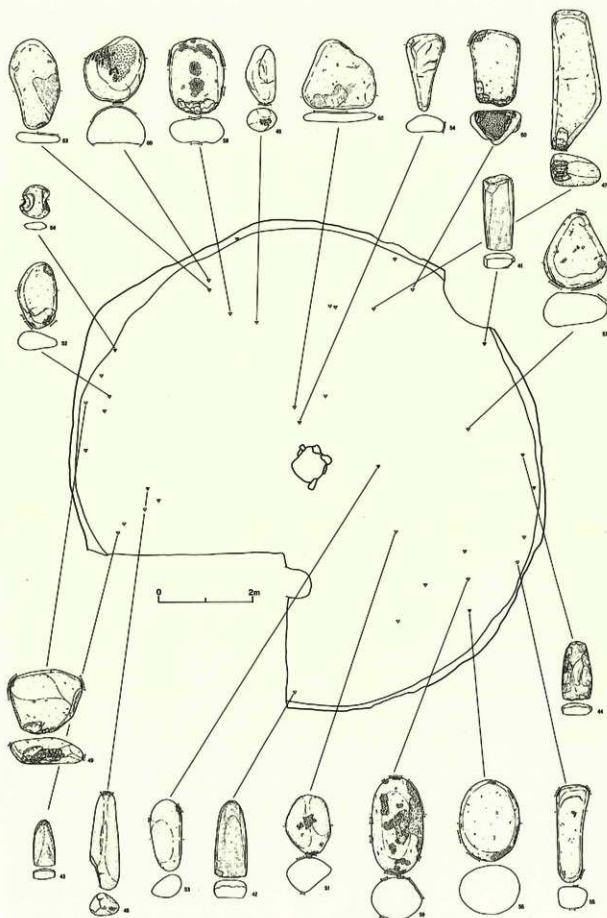
IV Ⅲ層上部の調査



図IV-31 H-9 覆土の土器出土状況(3)・掘上土と直下の土器



図IV-32 H-9 覆土の石器出土状況(1)



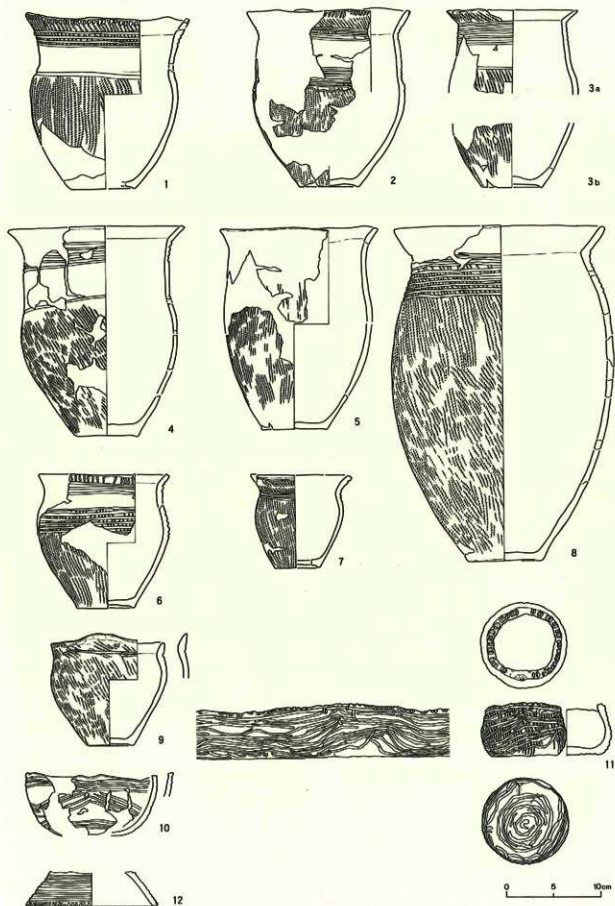
図Ⅳ-33 H-9 覆土の石器出土状況(2)

施され、上下を同じく4本単位の横走沈線で区画されている。沈線文で区画されて生じた三角形の部分には沈線施文後に横走する特殊縄文が施されている。20は上下を横走沈線で区画された文様帯に沈線で鋸歯状の文様が描かれている。沈線で区画されて生じた三角形部には沈線の施文後、横走する特殊縄文が施されている。21は口縁部が強く外反するもので、全面に縄文が施されている。口縁部内面にも横走沈線が施されている。22は無文地に沈線文が施されるもので、沈線文は口縁部にのみ施されている。64~72は鉢若しくは浅鉢。23、25は平縁で丸底の浅鉢。23は沈線文で縁取りされた横走する特殊縄文が施されたもので、体中部には無文帯が残る。25には全面に縄文が施されている。24、73は台付き鉢。24は口縁部がやや外反するもので、体部には縄文地に沈線で綾杉文が施されている。台部を欠く。73は縄文地に上下を横走沈線で画された大柄な鋸歯状の沈線文が施されたもの。口縁部の内面にも沈線文が施されている。台部を欠く。26、74~76は壺。26は体上部に上下を横走沈線で画された文様帯に沈線で鋸歯状文が施されたものである。文様帯の下縁には小波状の沈線文がめぐる。沈線文は縄文地に施されたものである。体上部には横方向に貫通孔の開いている小突起が貼り付けられている。

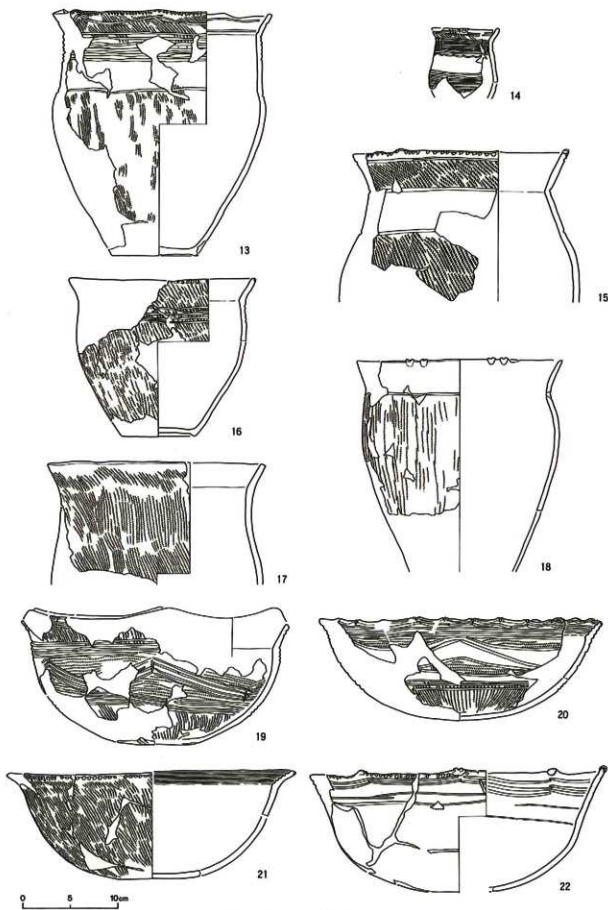
30、32はⅡ群土器。30は斜行縄文の施されたもので口唇断面は丸い。胎土には繊維が含まれている。32は疎な斜行縄文の施されたもの。口唇断面は丸い。胎土には繊維が含まれている。

(工藤研治)

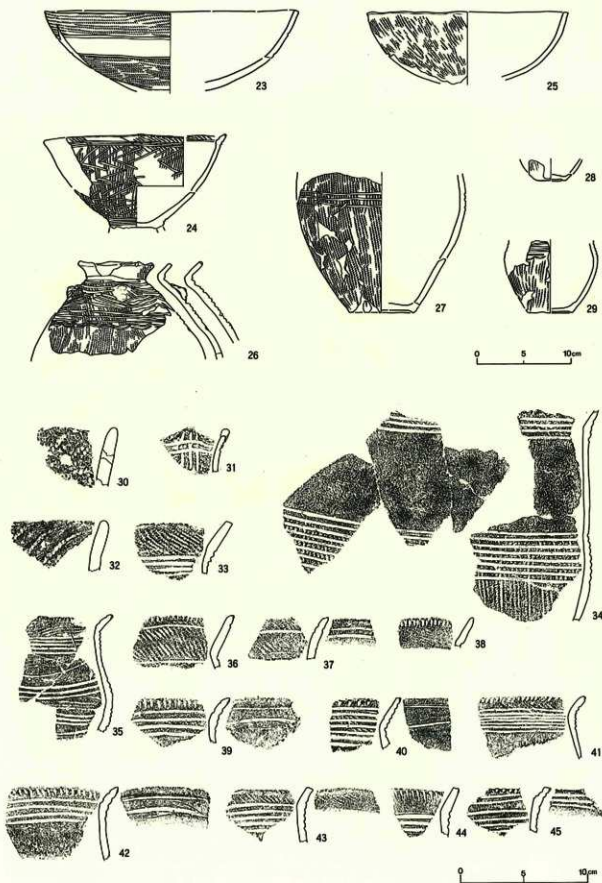
石 器：床面からは礫・礫片が出土したのみである。覆土からは石鏃（1~14）、石槍（15）、石錐（16~17）、つまみ付きナイフ（18）、靴形石器（19~25）、両面調整石器、スクレイパー（26~40）、挟入石器、剥片石器片、Rフレイク、石核、剥片、原石、磨製石斧（41~44）、磨製石器片、たたき石（46~60）、すり石（61~63）、砥石（45）、石錘（64）、礫器、加工痕礫、礫石器片、礫・礫片、魚形石器（65~69）、三角形礫石器（70）、円形礫石器、未分類石製品、石製品剥片、焼成粘土塊が出土している。1~14は石鏃で、全て有茎凸基である。1~5はやや幅広のものである。1~4は両面に素材面を残し、作りは粗雑である。6~11は比較的幅の狭いもので、全て先端部を欠失している。12~14は石鏃の未成品と考えられる。15は石槍。先端部が丸みを帯び基部がやや膨らむ。16、17は石錐。16は棒状のもので、中央付近がやや膨らむ。17は両面の両側縁に加工を施し尖頭部を作り出している。18はつまみ付きナイフ。背面右側縁に急角度の刃部を作り出し、稜線は右側に寄る。腹面右側縁に細かな加工が施される。19~25は靴形石器。19、20は小形で周縁加工のもの。どちらも先端が尖り、柄に対して刃部が斜めに付けられる。21~24は大形で両面加工のもの。いずれも刃部は下縁に作り出され、柄に対してほぼ直角に付けられる。25は未成品と考えられる。26、27は両面調整石器。26は裏面の周縁部に部分的に細かい加工が施される。28~40はスクレイパー。28~31は片面調整で柄をもち、刃部はいずれも急角度である。28は柄に対して刃部が斜めに付けられる。29は刃部が尖頭状を呈する。30は刃部再生により刃部が柄より小さくなっている。31は小形で周縁加工のもの。32は上半部を欠失しており、柄のあった可能性がある。33は半両面加工で末端部に刃部を作り出す。34は両面加工のもの。35~39は両側縁に刃部を作り出す。41~45は磨製石斧。正面の鎬は軽微で、裏面は明瞭である。いずれも片刃で刃縁は直線状である。41は裏面左側縁に擦切痕を残す。42は刃部に細かい刃こぼれ状の欠失が認められる。43はやや小形で斜方向及び縦方向に研磨が施される。44は全体に打ち欠きを残し、刃部に細かい欠失が認められる。45は小形で正面にたたき痕が認められる。基端及び刃縁に丁寧な研磨が加えられる。46~60はたたき石。46~51は礫の端部にたたき痕をもつもの。46~48は棒状礫を素材とする。49は下端部に剥離によるたたき痕をもつ。50は下端に細かい敲打によるたたき痕が広く認められる。52~57は周縁部にたたき痕が認められるもの。52~55は棒状礫を素材とし、側縁から



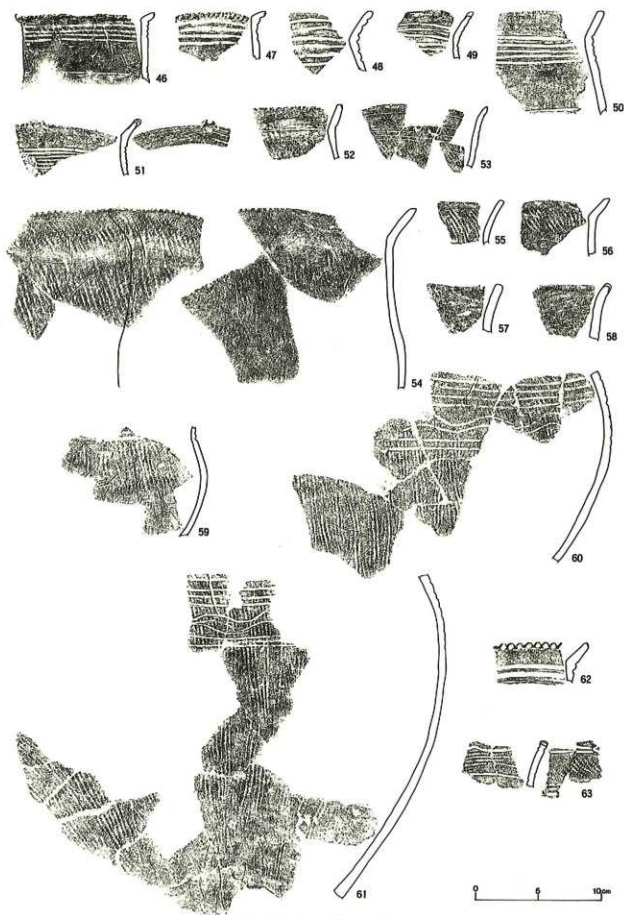
図IV-34 H-9 出土の土器(1)



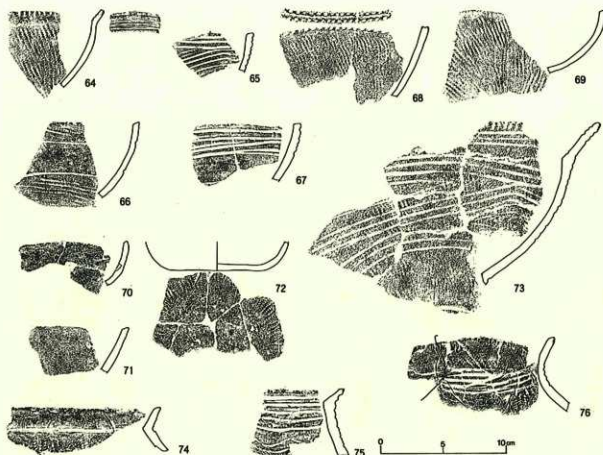
図IV-35 H-9出土の土器(2)



図Ⅳ-36 H-9出土の土器(3)



図IV-37 H-9出土の土器(4)



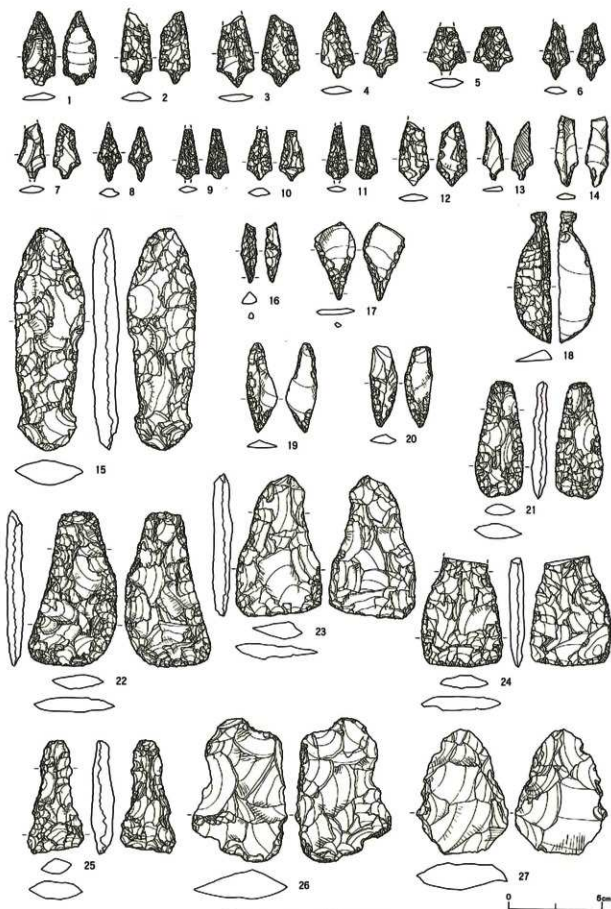
図IV-38 H-9出土の土器(5)

端部にかかる角の部分たたいている。58～60は両平坦面にたたき痕が認められるもの。58、59はたたき痕がくぼみ状を呈する。60は浅く広いたたき痕をもつ。61～63はすり石。61は両面周縁加工ですり面は形成されていないが、偏平打製石器と考えられる。62、63は平坦面にすり面が認められるもの。どちらも偏平礫を素材とする。64は石錐。両面からの打ち欠きにより袈刈を作り出している。65～69は魚形石器。いずれも未成品と思われる。65がやや大形だが、それ以外は小形である。両面に打ち欠きが施されるだけのものが多く、68のみ裏面に研磨が認められる。70は三角形礫石器。角が丸みを帯び、形状は円形に近い。

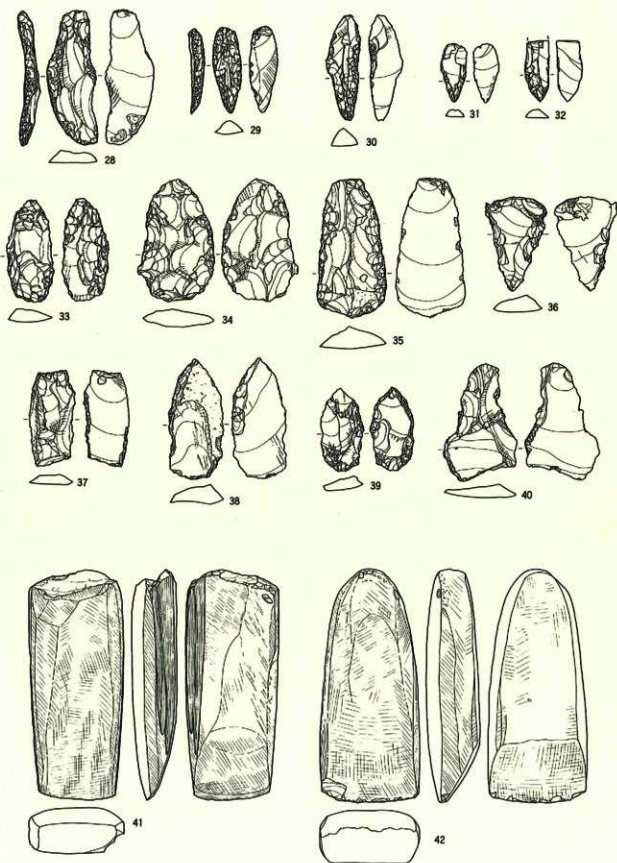
(広田良成)

木製品：なお図示していないが、炭化した木製品と思われるものが2点出土している。1点は長さ30mm以上ある棒状のもので、横断面は長径13mm、短径11mmの楕円形を呈する。芯を外して木取りされており、炭化のため不確実ながら表面をかなり平滑に整えているらしい。器具の一部かと思われる。散孔材製で、樹種は未同定。もう1点は径10mm余りの円棒状に表面を整えたものらしいが、小さな断片で確実でない。やはり散孔材製。

(西脇対名夫)

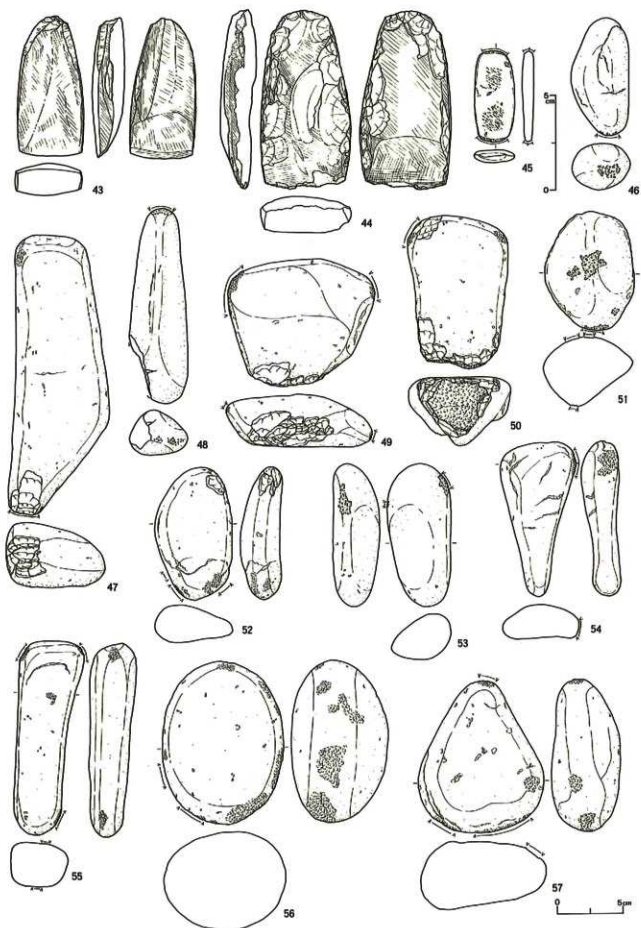


図IV-39 H-9出土の石器(1)

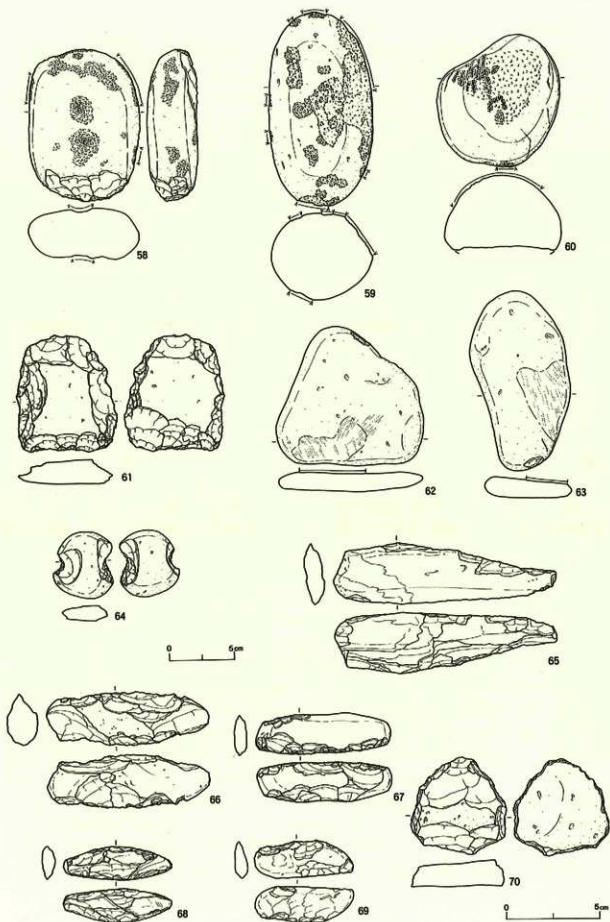


0 5cm

図Ⅳ-40 H-9出土の石器(2)



図IV-41 H-9 出土の石器(3)



図Ⅳ-42 H-9出土の石礫(4)・石製品

(2) 土墳墓

Ⅲ層上部の調査で発見された土墳墓は38基である。すべて縄文時代、恵山式土器の時期のものである。土墳墓には上面が小礫等で覆われた配石土墳と、礫の伴わない土墳がある。前者には原則としてX-1、X-2のように「X」の記号を付けて表示しているが、7か年度にわたる調査の過程で配石のない土墳や配石を確認できなかった土墳にも「X」の記号をつけたものがある。

X-1 (図Ⅳ-44~49)

位置 L・M-17

規模 $1.47 \times 1.44 / 1.06 \times 0.83 / 0.80$

特徴 Ⅲ層上面で楕円形に砂利がめぐり、その内部に黄褐色火山灰の落ち込みが2ヶ所あることから確認された。包含層や地山には砂利が含まれておらず、土墳を埋め戻した時に周囲にまかれたものと考えられる。

砂利の長軸に沿ってトレンチを入れ、二つの土墳が切り合っていないことを確認した後にそれぞれ半截を行った。両土墳は砂利の分布状況からみて、極めて近接した時期に掘られたと推定される。ただし、平成3年度に砂利の広がりを検出した後、4年度に精査がもちこされたため、先後関係があったとしてもわかりにくくなっていた可能性は残る。

平面形は円形である。壁は急角度で立ち上がり、西側には段がある。南側では縄文時代の土墳、P-12と重複するが、本遺構が新しい。墳底はほぼ平らである。

覆土1層はよごれない灰褐色土であったが、2層以下は埋め戻されたと思われるよごれた土であった。覆土の上位から中位にかけては土墳のまわりにまかれたものと同様な砂利が含まれていた。出土遺物は、砂利の間には土器片や礫石器・有意の礫等のまとまりがあり、玉や石鏃等も出土した。また火山灰の直下から土製品(図Ⅳ-49-18)が出土している。覆土4層と7層からは土器片が多量に出土した。これらの中にはほぼ完形に復元できたものもあり、埋め戻しの際に土器を割っていたと考えられる。覆土上位、中位から出土した石器には、石鉈、靴形石器、石鏃がある。土墳の北側では覆土下位から骨片が検出された。東側では、覆土下位から1点、墳底から4点の石鏃が出土した。これらの先端はさまざまな方向を向いている。

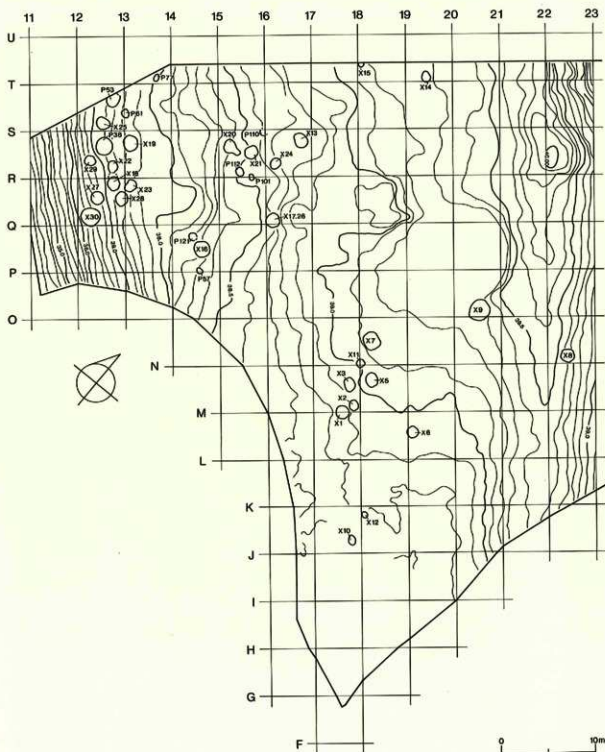
(中田裕香)

遺物(図Ⅳ-46~49)

土器：出土遺物のうちⅥ群土器を図示する。

上面出土の土器(1~4)

1は肩の張りが弱く頸部がやや内傾する甕。口縁部は外反し、緩やかな波状口縁をなす。波頂部には小さな貼瘤が付けられその上に刻み目が施されている。頸部には無文帯が残り、頸上部と肩部には横走沈線と小波状沈線がめぐり、口縁部内面にも縄文が施されている。X-1覆土及びX-3上面出土の資料と接合した。3は口縁部が外反する小型の浅鉢。口縁部と体下半部には縄文が施され、体上半部には無文地に横走沈線が施されている。口縁部内面には縄線文が1条めぐり、X-1覆土上部及びX-2覆土上部から出土した資料と接合した。4は壺。口縁部と体下半部を欠く。肩部には縄文地に大柄な鋸歯状沈線が施され、上下を横走沈線で区画されている。横走沈線の間には刺突列がめぐり、部分がある。下位の横走沈線の間には小波状沈線も施されている。2は甕と壺の中間的な器形のものである。胴部から肩部にかけて一連の曲線を描き、口縁部は強く外反する。口縁部から肩の上部にかけて無文地に横走沈線と小波状沈線が交互に施され、その下位には幅の狭い無文帯を挟んで沈線文で縁取りされた特殊縄文が施されている。X-1覆土及びX-2覆土出土の資料と接合した。



図Ⅳ-43 土墳墓位置図

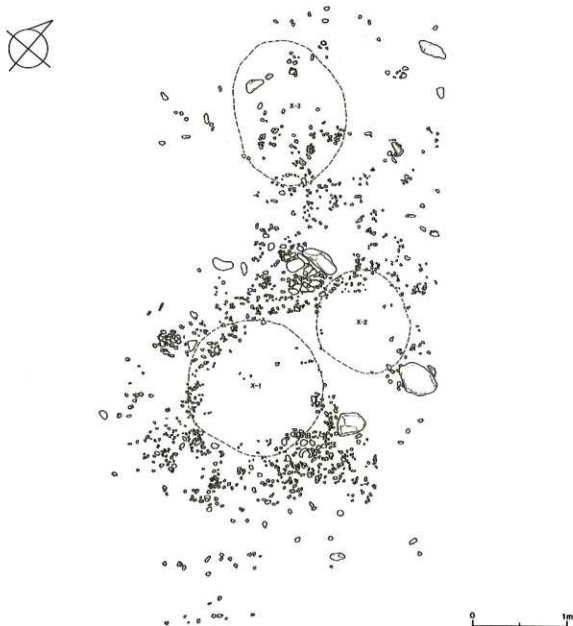
覆土出土の資料（5～28）

5～8、18～22は甕。波状口縁をなすもの（5、7、18～20、22）と平縁のもの（6、8、21）がある。5～6は肩部と頸部の境界が不明瞭で一連の曲線を描くものである。頸部には無文帯を残す。5、6は無文帯の上下に横走沈線と小波状沈線が施されたもので、5には横走沈線の間に刺突列がめぐる。7は無文帯の上下を横走沈線で区画したものである。平底である。8は頸部がやや張り出し、頸部が内傾するもので、頸部にも縄文が施され、口縁部と肩部には沈線文が施されている。

9、23～26は鉢若しくは浅鉢。9は口縁部がやや内傾するもので、無文地に鋸歯状若しくは波状の沈線が施されている。26は丸底の鉢とみなされるもので、握手のようなものが剥がれた痕が残る。

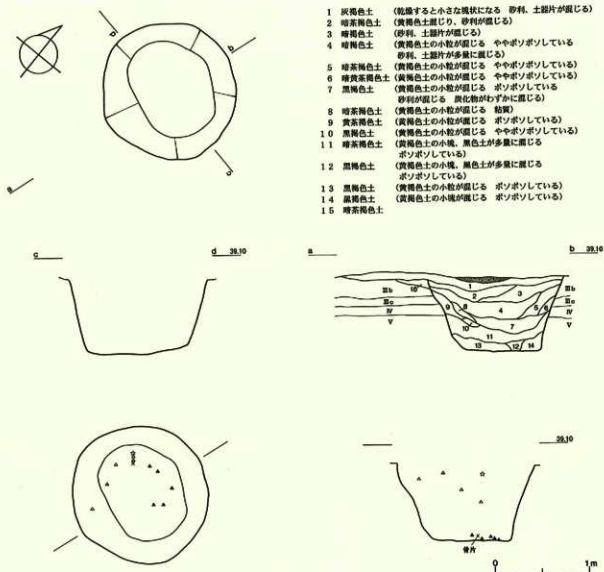
10は台付き土器の台と考えられるもの。無文で裾の縁に沈線文がめぐる。

11～14、27、28は壺。11～13は口縁部を欠く。11は頸部に刺突列がめぐり、体上半部には沈線文と特殊縄文による幅広の文様帯がある。12縄文地に横走沈線と鋸歯状沈線が交互に施されている。13は



図IV-44 X-1・2・3上面遺物出土状況

X-1



図IV-45 X-1

縄文の施されたもの。肩部に沈線文で縁取りされた横走する特殊縄文が施されている。27には肩部に沈線文が施され、沈線文の間には刺突文がめぐる。28は大柄な波状文と横走沈線、小波状沈線、刺突文で肩部の文様帯が構成されている。

15～17は体下半部の復元資料。15には沈線で縁取りされた特殊縄文で鋸歯状と帯状の文様が施されている。16、17は縄文が施されたものである。

(工藤研治)

石 器：境底から石鏃（1～3・6）、覆土からは石鏃（4・5）、石筈（7～11）、靴形石器（12～14）、両面調整石器、両極石器（15）、Rフレイク、石核（16）、剥片、たたき石（17）、礫・礫片、未分類土製品（18）が出土している。上面からは剥片石器片、剥片、が出土している。1～6は石鏃。全て有茎凸基で、作りは丁寧なものが多い。側縁は4がやや外湾する他は全て直線状である。3は先

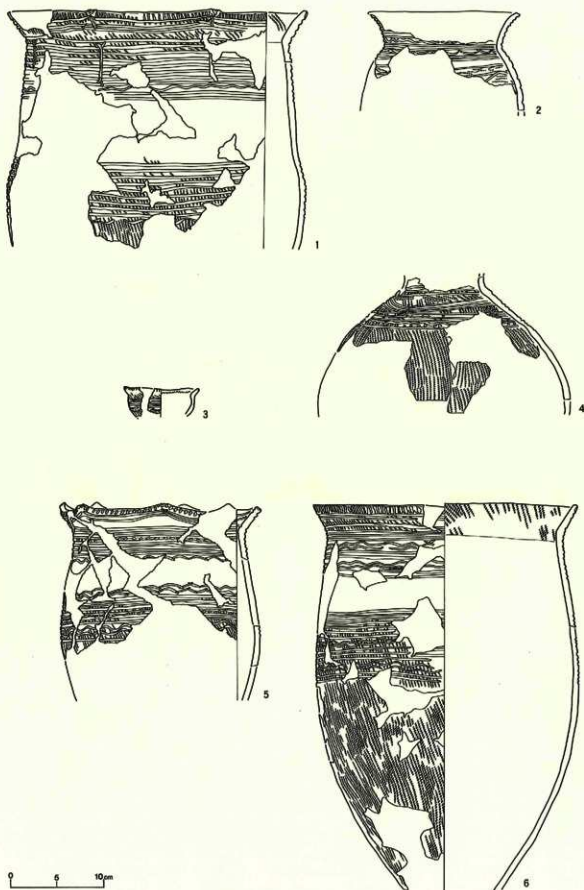
端部が折れている。

7～11は石鋸。全て有茎凸基で側縁は浅く外湾する。10、11は裏面に大きく素材面を残す。12～14は靴形石器。いずれも両面加工で作りは丁寧である。形状は非対称である。12は柄部が明瞭に作り出される。刃部は柄部とほぼ直角をなし、浅く内湾する。13、14は柄部が明瞭でなく、刃部は基部に斜交する。14は刃部が外湾する。15・16は石核。17はたたき石。下半部を欠失し、周縁部及び平坦面にたたき痕をもつ。

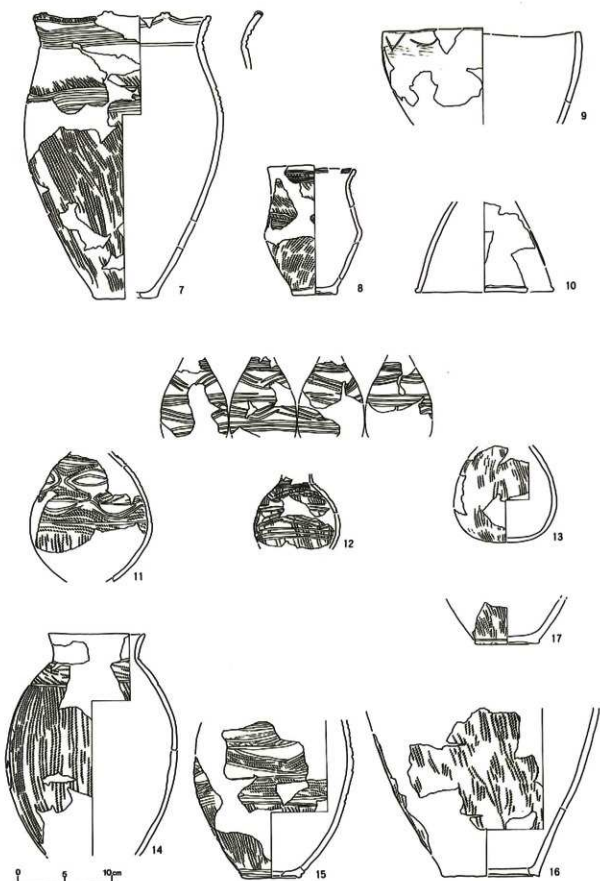
(広田良成)

18は未分類土製品である。キンチャク状の粘土塊である。先端部には子指大のくぼみがある。大きさに比べてやや重く、何かを内包する可能性がある。

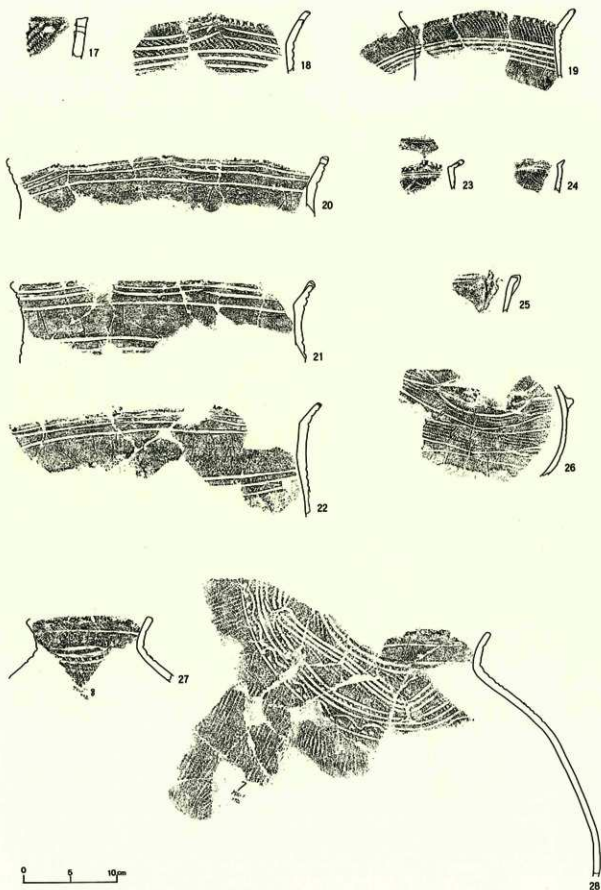
(立田 理)



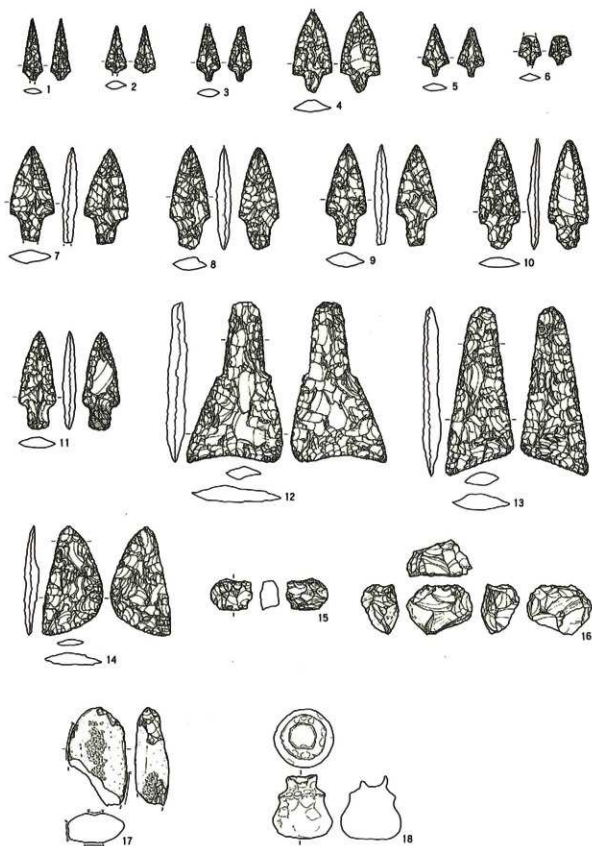
図Ⅳ-46 X-1出土の土器(1)



図IV-47 X-1出土の土器(2)



図IV-48 X-1出土の土器(3)



図IV-49 X-1出土の石器・土製品

X-2 (図IV-44・50)

位置 M-17

規模 $1.10 \times 0.98 / 0.87 \times 0.63 / 0.56$

特徴 平面形は楕円形である。壁の立ち上がりは急である。墳底は中央部がやや深くなっている。覆土の上位から中位にかけては、X-1に同じく砂利が含まれていた。

北西側の覆土上位からは、暗茶褐色の扁平な礫が出土した。石質は砂岩かと思われる。この礫は風化が激しく、取り上げの時にバラバラになってしまった。覆土中位では北西側で小型の鉢形土器(図IV-51-2)が横倒しの状態で出土した。土器の内部には黒色土がつまっていた。また、南側では小型の壺形土器の破片がまともに出て出土した。隣接するX-1とは遺物の組み合わせに違いが認められる。

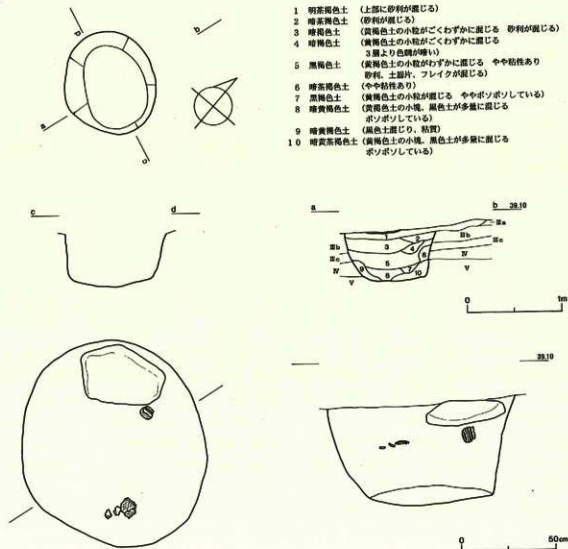
(中田裕香)

遺物(図IV-51)

土器：出土した資料のうちVI群土器を図示する。

上面出土の資料(1、2)

X-2



図IV-50 X-2

1、2は上面から出土した資料と包含層から出土した資料が接合したものである。1は浅鉢。口縁部がやや外反し、緩やかな波状口縁をなす。口縁部には無文地に緩やかな波状の沈線文と横走る沈線文が施されている。体部には縄文地に大柄な鋸歯状の沈線文が施されている。口縁部の内面にも横走沈線がめぐり、2は小型の鉢。口縁部と体部の境には縄文地に横走沈線がめぐり、その下位には沈線で長円形の文様が連続して描かれている。

覆土出土の資料(3～5)

3は縄文地に沈線文が施された壺。口縁部を欠く。5は鉢。4は横走沈線の下縁に鋸歯状の沈線が施された胴部。

(工藤研治)

石器：覆土からスクレイパー(6)、挟入石器、鋸歯縁石器(7)、剥片石器片、Rフレイク、石核(8)、剥片、すり石、石製剥片、上面からは剥片が出土している。6、7はスクレイパー。6は横長剥片素材で細かい加工により背面末端部と腹面右側縁に刃部を作り出す。8は石核。小形で細かい剥片を取っている。

X-3(図IV-44、52)

位置 M-17

規模 1.55×1.25/1.15×0.89/0.80

特徴 III層上面で黄褐色火山灰の落ち込みがみられ、その周囲を砂利がめぐっていることから確認された。砂利の遺存状況はX-1・2の周囲に比較してまばらであり、平成4年度の段階では明確な範囲をとらえることはできなかった。

平面形は楕円形である。壁は急角度で立ち上がり、南側は段がつく、北側ではIII層下位で縄文時代の焼土F-38を切って構築されている。墳底は西側に向かってやや傾斜している。

遺物は主に土壌の西側に分布している。覆土中位からは石皿や礫、下位からは石銚、磨製石斧が出土した。墳底では糸魚川産のヒスイの玉(図IV-54-13)1点が出土している。

(中田裕香)

遺物(図IV-53・54)

土器：VI群土器を图示する。

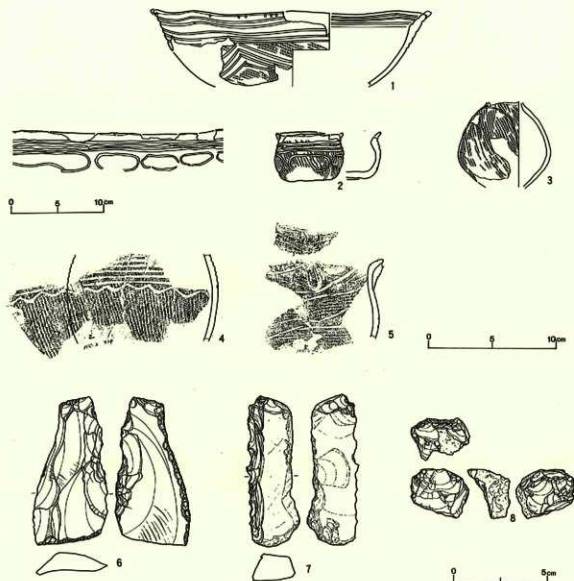
上面出土の資料(1、2)

1、2は上面出土の資料と覆土及びI層出土の資料が接合したものである。1は肩部と頸部の境界が不明瞭で一連の曲線を描き、口縁部が強く外反する平縁の土器である。口縁部から頸部にかけて縄文地に横走沈線がめぐり、2は肩がやや張り頸部が内傾する波状口縁のものである。頸部には無文帯が残り、無文帯の上下は横走沈線で区画されている。口縁部の内面にも沈線文が施されている。

覆土出土の資料(3～6)

3は肩の張りが弱く頸部が内傾するもの。頸部には無文帯が残り、上下を横走沈線で区画している。4は壺と甕の中間的な器形のもの。口縁部は波状をなし、体上半部に大柄な鋸歯状の沈線文と沈線で縁取りされた特殊縄文が施され、文様帯の上下は横走沈線で区画されている。口縁部の内面にも沈線文が施されている。5は頸部から肩部にかけて横走沈線が施された壺。文様帯の下方には小波状沈線が施されている。6は口縁部がやや内傾する丸底の鉢。口縁部には横走沈線が3条めぐり、体部には無文地に沈線で縁取りされた特殊縄文が施され、大柄な渦文が描かれている。薄手で焼成は良く、器面は丁寧に磨かれている。特殊縄文を縁取っている沈線は縄文施文後に施されているが、縁取りの沈線が施文される前に引かれた細い沈線が部分的に認められることから、特殊縄文を施文するための下書きのようなものがあつた可能性がある。器面の磨きは文様施文後に行われている。

(工藤研治)

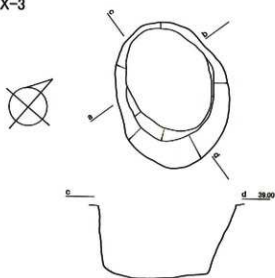


図IV-51 X-2出土の遺物

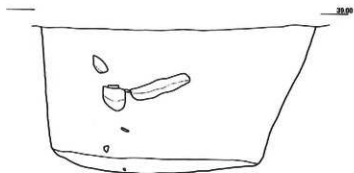
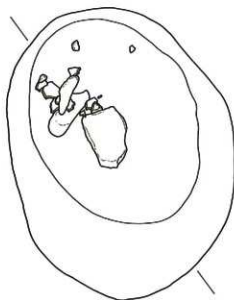
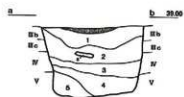
石 器：墳底から玉 (13)、覆土からは石鏃 (1)、石銛 (2)、靴形石器 (3)、両極石器、剥片石器片、Rフレイク、石核 (4～8)、剥片、磨製石斧 (9)、砥石 (11)、台石・石皿 (12)、礫・礫片が出土している。上面からはRフレイク、剥片、たたき石 (10) が出土している。1は有茎凸基の石鏃。両面周縁加工で大きく素材面を残す。側縁は浅く内湾する。2は石銛。スベード形で返し丸みを帯びる。3は靴形石器。半両面加工で裏面に大きく素材面を残す。全体の作りは丁寧で、柄部が明瞭に作り出される。刃縁はやや外湾し、柄部に対して斜めに付けられる。4～8は石核。9は磨製石斧。全面に丁寧な研磨が認められる。正面右側縁及び裏面左側縁に擦切痕を残す。片刃で刃縁はわずかに外湾する。10はたたき石。礫の端部にたたき痕を有する。11は砥石。中央に窪んだ顕著なすり面をもつ。12は石皿。表面は全面よくすっている。13はひすい製の玉。両側から穿孔が施される。

(広田良成)

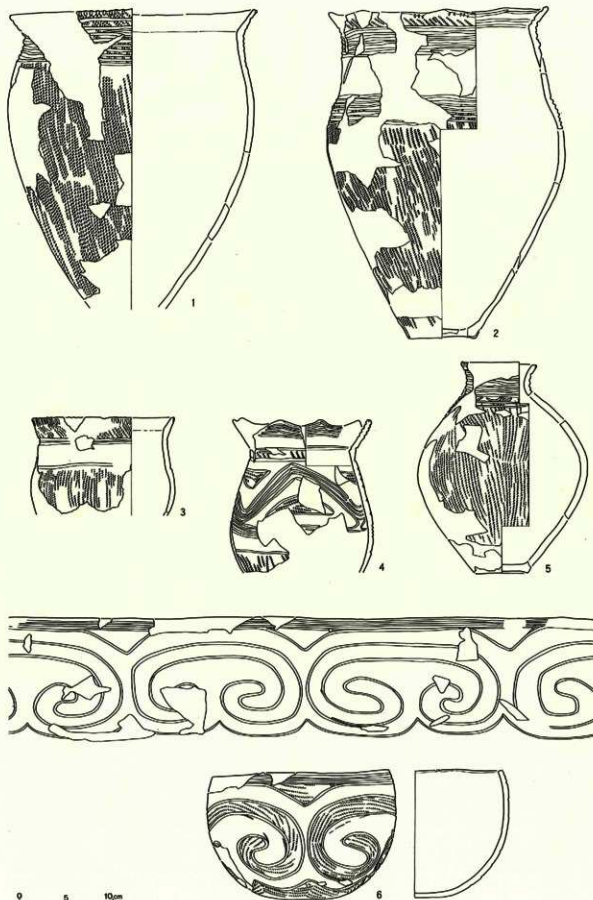
X-3



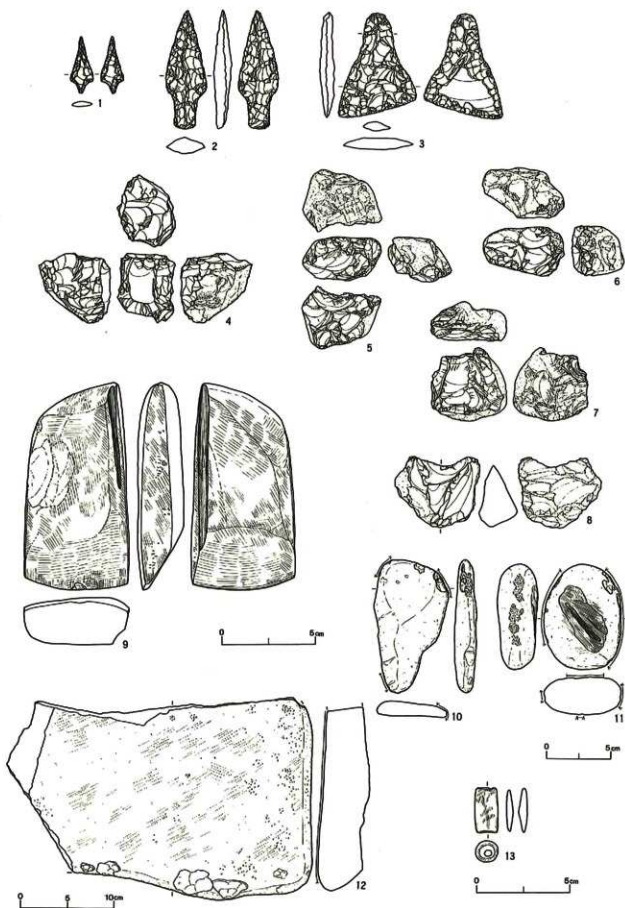
- 1 黒褐色土 (径2～3cmの小礫が混じる)
- 2 黒褐色土 (黄褐色土粒が微量混入する)
- 3 黒色土 (粘質のある黒色土 ごく微量の黄褐色土粒が混入)
- 4 黒褐色土 (1～2cm程度の黄褐色土粒が混在)
- 5 黒褐色土 (黄褐色土がブロック状に混入)



図IV-52 X-3



図IV-53 X-3出土の土器



図IV-54 X-3出土の石器・石製品

X-5 (図Ⅳ-55・56)

位置 M-18

規模 $1.52 \times 1.23 / (0.93) \times 0.70 / 0.68$

特徴 Ⅲ層上面で黄褐色火山灰がほぼ円形に落ちこみ、その周囲に砂利がめぐることから確認された。

土壌の平面形は楕円形である。壁は急角度で立ち上がる。縄文時代の墓(P-19)や土壌(P-24)と切り合いがあったために、壁の立ち上がりを見つけれず、掘りすぎた部分が多い。墳底はほぼ平坦である。

北側の砂利の中からは青竜刀形石器や土器片のまとまりが出土した。これらのうち青竜刀形石器は、縄文時代の遺物を恵山期の人々が採集してきた可能性がある。また南西部では有意の礫がまとまって出土したが、それらの中には焼けたものもみられた。

覆土中位(4層・6層)には砂利が含まれ、土器片も多量に混じていた。覆土下位では土壌の北側で石器類が出土した。靴形石器は刃部を立てた状態で出土した。(中田裕香)

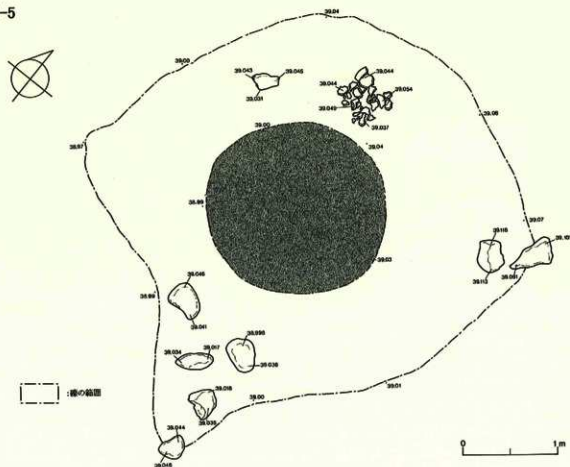
遺物 (図Ⅳ-57・58)

土器:出土した資料のうちⅥ群土器を図示する。

上面出土の資料(1)

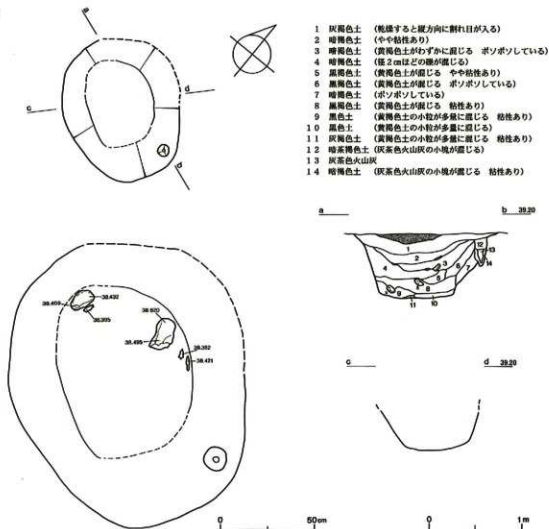
1は肩の張りが弱く頸部が内傾する甕。頸部には無文帯が残り、無文帯の上下は横走沈線で区画されている。上面から出土した資料と包含層から出土した資料が接合したものである。

X-5



図Ⅳ-55 X-5 上面遺物出土状況

X-5



図IV-56 X-5

覆土出土の資料 (2~11)

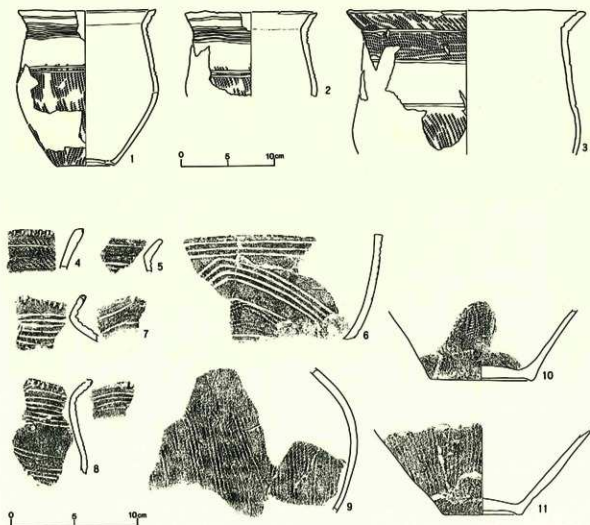
2、3は肩の張りが弱く頸部が内傾する甕。頸部には無文帯が残る。2は無文帯の上下が横走沈線と区画されているもの。3は頸部の無文帯の上位に横走沈線と縁取りされた特殊縄文が施されている。4、5、8は甕と考えられる口縁部。6は大柄な鋸歯状沈線が施された鉢。体下部には沈線と縁取りされた特殊縄文が施されている。7は横走沈線が施された壺。8は縄文の施された壺の胴部。10、11は揚げ底を呈する底部。

(工藤研治)

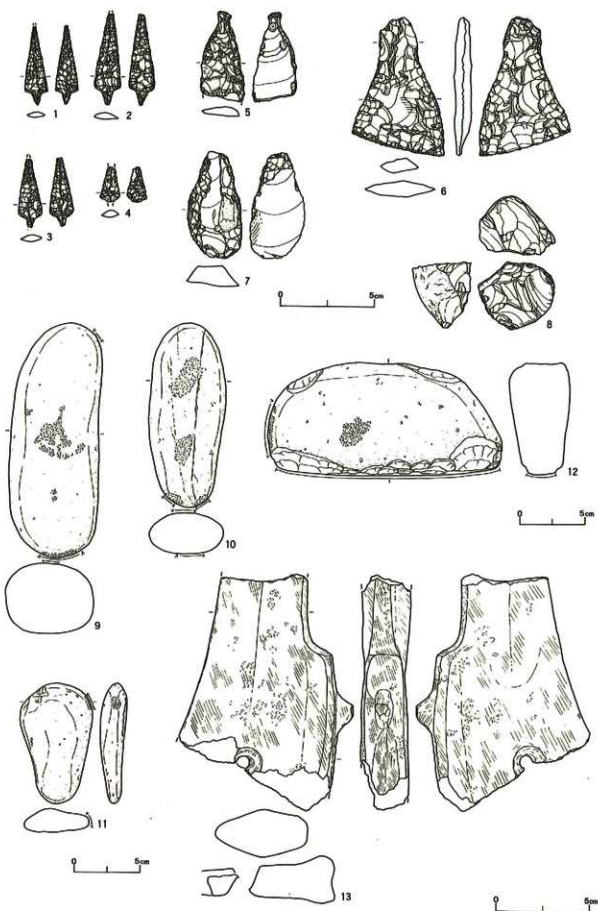
石 器：覆土から石鏃 (2~4)、つまみ付きナイフ (5)、靴形石器 (6)、両面調整石器、スクレイパー (7)、両極石器、剥片石器片、Rフレイク、石核 (8)、剥片、磨製石器片、たたき石 (9~11)、すり石 (12)、礫・礫片、上面からは石鏃 (1)、両極石器、Rフレイク、石核、剥片、礫・礫片、青竜刀形石器 (13) が出土している。1~4は石鏃。全て有茎凸基で先端部を欠失する。特に側縁は細かい加工で直線状に仕上っている。5はつまみ付きナイフで、下部を欠失する。腹面の右側縁と背面に加工が施される。6は靴形石器。両面加工で作りは丁寧である。刃部は末端部に作り出される。刃縁はやや外湾し、柄に対して斜めに付けられる。7はスクレイパー。背面に周縁加工が施され

柄部と刃部が作り出される。腹面の柄部に施される加工はバルブの厚みを取るためのものと考えられる。8は石核。9～11はたたき石。9、10は棒状礫を素材とし、端部と平坦面にたたき痕をもつもの。11は礫の側縁から端部にかけてたたき痕が認められる。12はすり石。礫の側縁に打ち欠きを施し、やや幅の広いすり面を形成する。13は青竜刀形石器。柄部と刃部の下部を欠失する。残存部は両面に丁寧な研磨が施される。

(広田良成)



図IV-57 X-5出土の土器



図IV-58 X-5 出土の石器・石製品

X-6 (図IV-59)

位置 L-19

規模 $1.26 \times 1.18 / 1.12 \times 1.02 / 0.45$

特徴 L-19-③でⅢ層1回目を掘り下げた時に黄褐色火山灰の落ち込みが認められたため、半截し、確認した。平面形は円形である。壁は急な角度で立ち上がる。墳底は南側でやや深くなっている。確認面や覆土に砂利が含まれず、遺物も少ないなどほかの土壌墓とは覆土の状況に若干の違いがある。

(中田裕香)

遺物 (図IV-59)

土器: 覆土からⅡ群A類、Ⅱ群B類、Ⅲ群A類、Ⅳ群土器が出土した。

石器: 覆土から石鏃(1)、剥片石器片、剥片、礫・礫片が出土している。1は無茎平基の石鏃。先端部をわずかに欠失する。両面に丁寧な加工が施され、側縁は直線状である。

(広田良成)

X-7 (図IV-60)

位置 N-18

規模 $1.90 \times 1.80 / 1.61 \times 1.35 / 0.59$

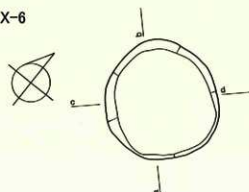
特徴 Ⅲ層上面で黄褐色火山灰が落ち込んでいることから確認された。

平面形は不整形である。北側では恵山期の焼土F-36を切っている。壁の立ち上がりは急で、北側には段がある。壁付近の覆土には土によごれが少なかった。土壌の中央部では覆土下位に多量の暗黄褐色土の小塊や焼土・焼骨片をわずかに含んだ暗茶褐色土(4層)が堆積していた。また墳底の直上には炭化物・焼骨片・砂利を少量含むよれた黒褐色土(12層)が浅い皿状に堆積していた。セクション図に示した覆土の堆積状況からは、一度土壌を掘った後、中央部をさらに掘りくぼめ、埋め戻した可能性も考えられる。

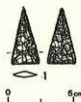
土壌の墳口部南側では礫が落ち込んでいた。また、土壌の南側、約1mの地点からは、Ⅲ層1回目の掘り下げ時に魚形石器の未製品や石皿が出土している。

覆土中には土器片が散在し小型の土器も出土している。鉢形土器(図IV-61-2)は覆土中位から

X-6



- 1 暗茶褐色土 (黄褐色火山灰混じり)
- 2 暗茶褐色土 (やや粘質)
- 3 暗茶褐色土 (暗茶褐色土混じり ボソボソしている)
- 4 暗茶褐色土 (黒土の小塊混じり 粘質)
- 5 褐色土 (ボソボソしている)
- 6 暗茶褐色土 (黄褐色火山灰が多量に混じる)
- 7 黒褐色土 (暗茶褐色土混じり)
- 8 暗茶褐色土 (ややボソボソしている)
- 9 黒褐色土
- 10 暗褐色土
- 11 暗茶褐色土 (粘質)
- 12 暗茶褐色土 (黒くよごれている 粘質)
- 13 暗褐色土 (10層より混みがある)
- 14 暗茶褐色土 (黒くよごれている 粘質)



図IV-59 X-6と出土の遺物

横倒しの状態で、また甕形土器が覆土下位で底部を上にして出土している。内部には礫が入っていた。

覆土中位から石鏃が4点まとまって出土した。ただし2点は調査時に掘りあげてしまい、位置の計測は行っていない。覆土下位では甕形土器の東側から先端の欠けた石鏃が出土している。

遺物の出土状態 上面で魚形石器、台石、線刻礫が出土している。覆土中位からは小型の鉢(図IV-61-2)横向きの状態で出土し、石器等は石鏃4点が出土している。覆土下位からは小型の甕が伏せた状態で出土した。甕の中の土からは礫が出土した。また先端の折れた石鏃も出土している。

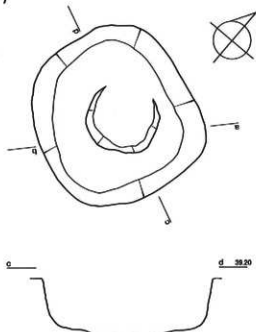
(中田裕香)

土 器: VI群土器を図示する(1~22)。すべて覆土から出土したものである。1は小型の甕。頸部に横走沈線で縁取りされた特殊縄文が2段施されている。3~13は甕と考えられる口縁部。2は小型の丸底鉢。器面にはL Rの原体による縄文が施され、口縁部には縄文地に横走沈線と小波状沈線がめぐる。底面にも縄文が施されていて同心円の沈線文が施されている。14~19は鉢若しくは浅鉢とみなされる口縁部。20は図の天地が逆になっているが、台付き土器の台の裾部分である。低い隆起帯の上に刻み目が施されている。21は小型の丸底土器の底部。22は底部に横走縄文が施されている。

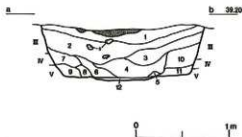
(工藤研治)

石 器: 覆土から石鏃(1~8)、石錐、靴形石器(9)、スクレイパー(10・11)、両極石器、剥片石器片、Rフレイク、石核(12)、剥片、磨製石斧(13・14)、たたき石(15~17)、すり石(18・19)、石鋸、石皿・台石(20)、礫・礫片、魚形石器、線刻礫(23・24)、軽石製石製品(25)、石製品片、石製品剥片が出土している。上面からは魚形石器(21)が出土している。1~8は石鏃。全て有茎凸基で、3~8は先端部を欠失する。いずれも加工は丁寧で精巧な作りである。側縁は3、4がやや内湾し、他は直線状を呈する。5~7は裏面に素材面を残す。8は基部を欠失する。9は靴形石器片。上半部を欠失し、現存部には丁寧な両面加工が施される。10、11はスクレイパー。10は上部を欠失する。背面末端部に素材の剥片の形状を利用して急角度の刃部を作り出す。刃部先端は尖頭状を呈し、

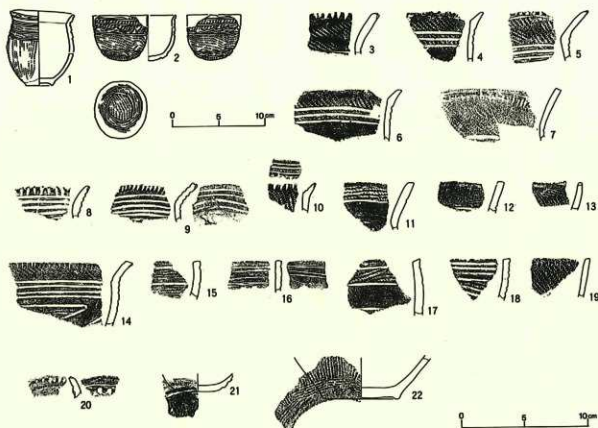
X-7



- 1 暗褐色土 (やや粘性あり)
- 2 黒褐色土 (暗黄褐色土混じり ややボソボソする)
- 3 暗褐色土 (ボソボソする)
- 4 暗茶褐色土 (暗黄褐色土の小塊が多量に混じる 炭素褐色土の小塊、焼骨片がわずかに混じる)
- 5 暗黄褐色土 (ボソボソしている)
- 6 黒褐色土 (砂利や暗黄褐色土の小塊がわずかに混じる 粘性あり)
- 7 暗茶褐色土 (粘性あり)
- 8 暗黄褐色土 (暗褐色土混じり 粘性あり)
- 9 黄褐色土 (暗褐色土混じり 粘性あり)
- 10 暗褐色土 (ボソボソしている)
- 11 暗黄褐色土
- 12 黒褐色土 (黄褐色土混じり 炭化物、焼骨片、砂利が少量混じる)



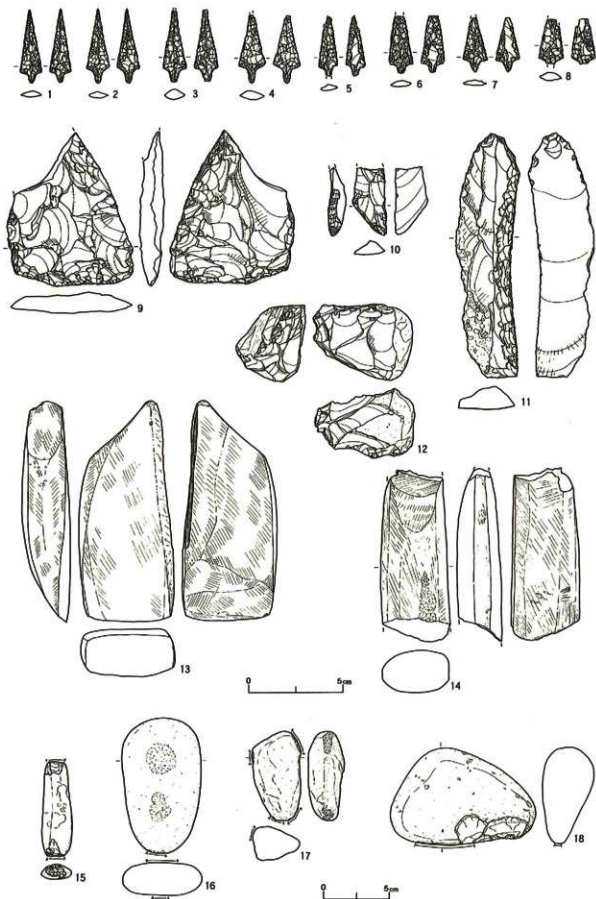
図IV-60 X-7



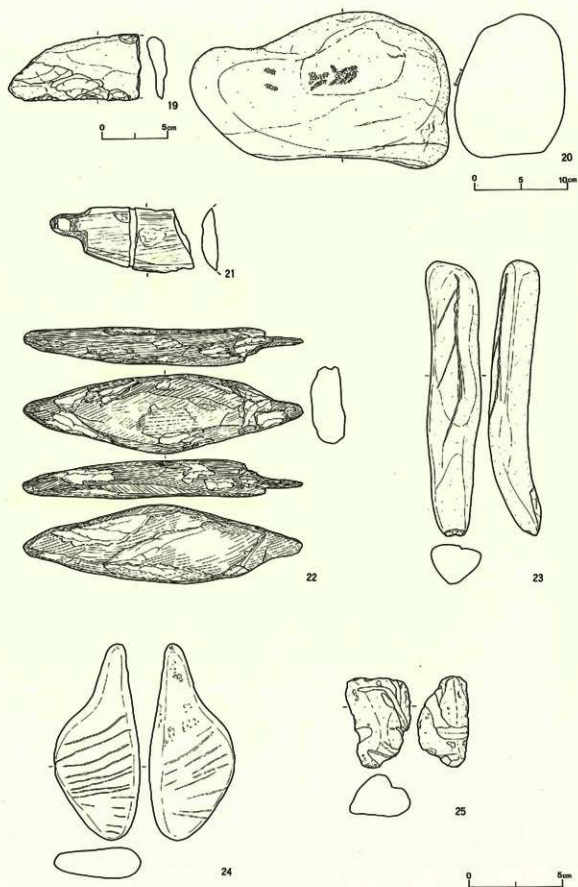
図IV-61 X-7出土の土器

刃縁は柄に対して斜めに付けられる。11は縦長剥片素材のスクレイパー。背面右側縁に浅く内湾する刃部を作り出す。12は石核。13、14は磨製石斧。13は右側面に擦切痕が認められる。全体に斜方向に丁寧に研磨される。片刃で刃縁は直線状を呈する。14は刃部と基端部を欠失する。正面中程に整形時の敲打痕が認められる。15～17はたたき石。15は棒状礫の両端に剥離によるたたき痕をもつ。16は下端と平坦面にたたき痕がある。17は礫の周縁部にたたき痕が認められるもの。18、19はすり石。共に礫の1側縁にすり面をもつ。18は部分的に打ち欠きが施される。19は右半分を大きく欠失する。扁平な礫を素材とし、1側縁に両面からの打ち欠きにより細いすり面を作り出す。20は台石。表面中央付近に弱いたたき痕が認められる。21、22は魚形石器。21は大部分を欠失する。22は打ち欠きの後全体に横及び斜方向の研磨が施される。23、24は線刻礫。25は軽石製石製品。幅の広い溝が数条巡っており、線刻礫の可能性もある。

(広田良成)



図IV-62 X-7出土の石器(1)



図Ⅳ-63 X-7出土の石器(2)・石製品

X-8 (図IV-64・65)

位置 N-22

規模 1.47×1.43/1.24×1.20/0.71

特徴 Ⅲ層上面に黄褐色火山灰の落ち込みがあり、その南側に砂利が散在していることから確認された。

平面形は不整形である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土上位から中位には砂利が少量含まれていた。5層の北側に堆積した部分では、含まれる砂利の量が多かった。また、土壌の北西側では墳口から約50cm下にベンガラと思われる赤い粒がわずかに認められた。墳底はV層まで掘り込んだほかの土壌墓とは異なり、IV層中にある。南東側の遺物の集中の間の部分に黒い染み状のよごれがごく薄く認められたが、これは遺体の痕跡の可能性がある。

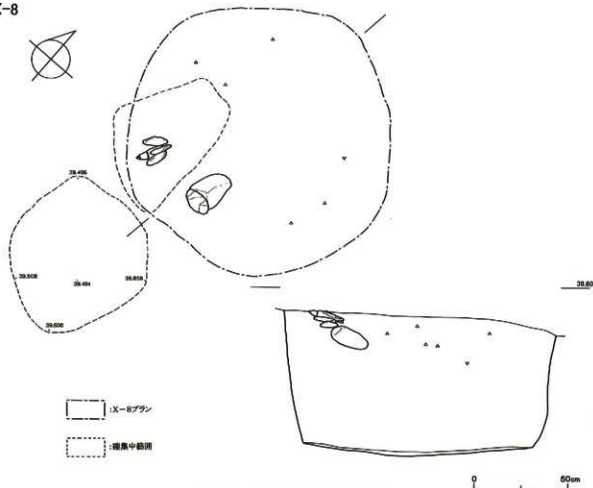
遺物の出土状態 N-22-⑥では墳口部の砂利の中から魚形石器、たたき石、有意の礫が出土した。覆土上位には石鐮、スクレイパー、等の石器類が散在していた。土壌の中央部付近では、覆土下位で小型の土器等の遺物がまとまって出土した。壺形土器(図IV-66-2)は横倒しの状態で出土した。甕形土器(図IV-66-1)はやや傾いた状態で出土した。墳底からは石鐮が先端を北東に向けた状態で出土した。

(中田裕香)

遺物(図IV-66~68)

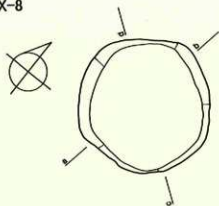
土器: 出土資料のうちVI群土器を図示する。

X-8

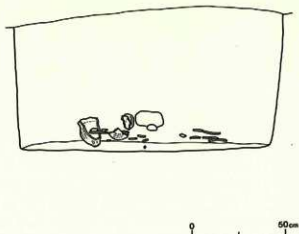
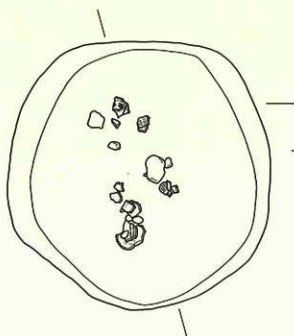
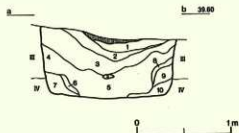


図IV-64 X-8 上面遺物出土状況

X-8



- 1 暗黄褐色土 (乾燥すると縦に割れ目が入る 砂質)
- 2 暗茶褐色土 (厚1cm程度の砂利がわずかに混じる 砂質)
- 3 暗褐色土 (厚1〜2cm程度の砂利がわずかに混じる ボソボソしている)
- 4 暗褐色土 (粘質)
- 5 黒褐色土 (炭化物、暗茶褐色土の小塊がごくわずかに混じる ボソボソしている)
- 6 暗黄褐色土 (粘質 風くよがれている)
- 7 暗黄褐色土 (6層より粘性がある)
- 8 暗茶褐色土 (暗黄褐色土混じり 粘質)
- 9 黒褐色土 (ややボソボソしている)
- 10 暗黄褐色土 (粘質)



図IV-65 X-8

覆土下部出土の資料（1～3）

1は縄文の施された小型の甕。肩と頸部の境界が不明瞭で一連の曲線を描くもの。2は小型の壺。3は縄文が施された体下半の資料。

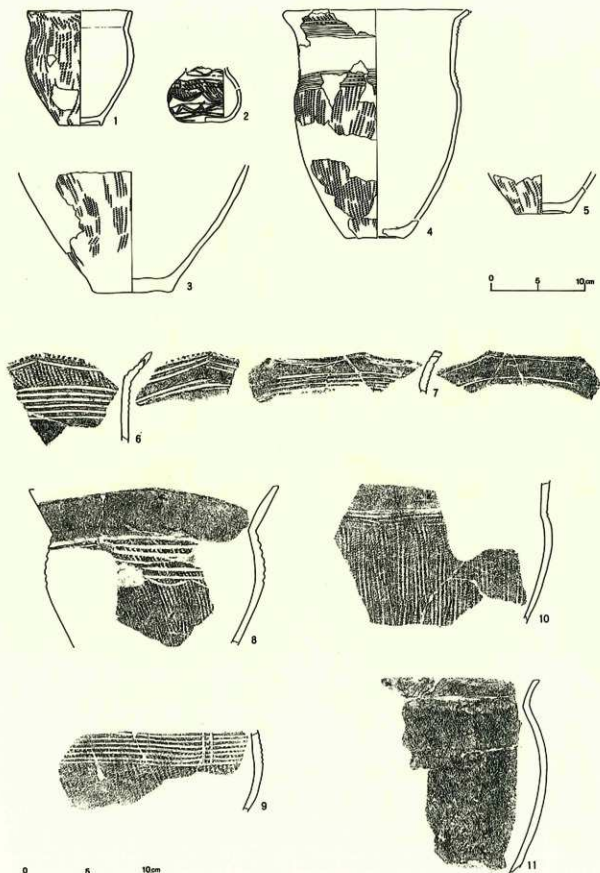
覆土出土の資料（4～18）

4は肩がやや張り、頸部がやや外に開く甕。頸部には無文帯があり、無文帯の上下は沈線で区画されている。6～11は甕と考えられるもの。8は口縁部が大きく外反するもので、体上部には横走沈線がめぐり、下縁には小波状沈線が施されている。10は肩がやや張るもので、無文の頸部と肩部の境界には沈線文がめぐり、その下位には胴部の縦走縄文との間に幅の狭い横走縄文が施されている。11は無文のもので器面はかるく磨かれている。12は口縁部が内傾する鉢。口唇直下には刺突列がめぐり、体部には4条単位の沈線で大柄な鋸歯状文とその上下を区画する横走沈線が施されていて、そこに生じた三角形の余白には横走する特殊縄文が施されている。14～16は鉢若しくは浅鉢の口縁部。18は壺の口縁部である。

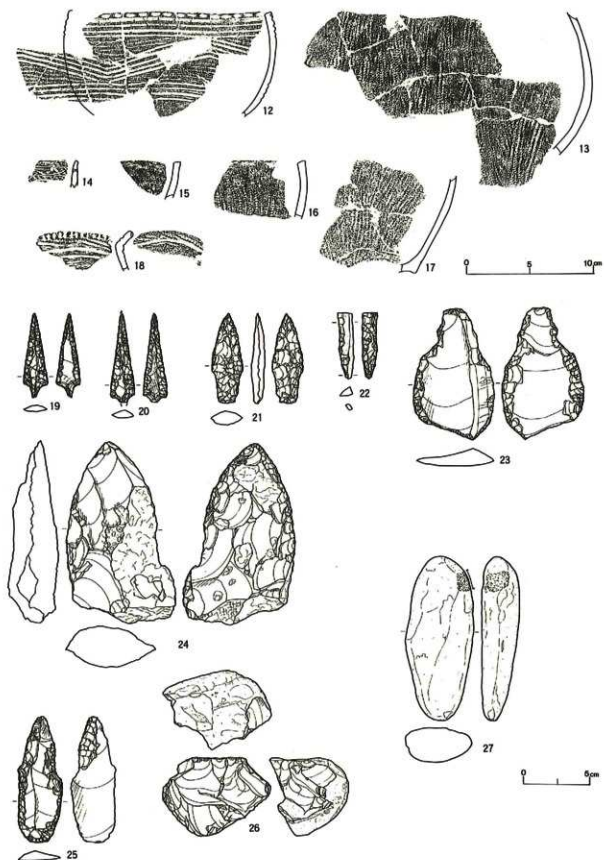
（工藤研治）

石器：墳底から石鏃（19）、覆土から石鏃（20）、石銛（21）、石錐（22）、靴形石器（23）、両面調整石器、スクレイパー（24・25）、Rフレイク、石核（26）、剥片、たたき石（27）、すり石、礫・礫片、魚形石器（28～31）、軽石製石製品、未分類石製品、石製品剥片が出土している。19、20は石鏃。有茎凸基で周縁加工で、両面に素材面を残す。21は石銛。茎部の幅が広く返しは不明瞭である。側縁はやや外湾する。22は石錐。棒状で背面に自然面を残す。側縁の細かい加工により尖頭部を作り出している。23は靴形石器。両面の周縁加工により柄部と刃部を作り出している。末端部に細かい剥離が認められ、使用痕と考えられる。24、25はスクレイパー。24は両面に焼けはじけが認められる。腹面の両側縁に刃部が作り出される。25は身と柄に分かれる。背面に周縁加工が施され、両側縁に刃部が作り出される。26は石核。27はたたき石。棒状礫の側縁から端部にかけてたたき痕を有する。28～31は魚形石器。29～31は未成品と考えられる。32は軽石製石製品。短い擦痕もしくは線刻が数本連続して認められる。

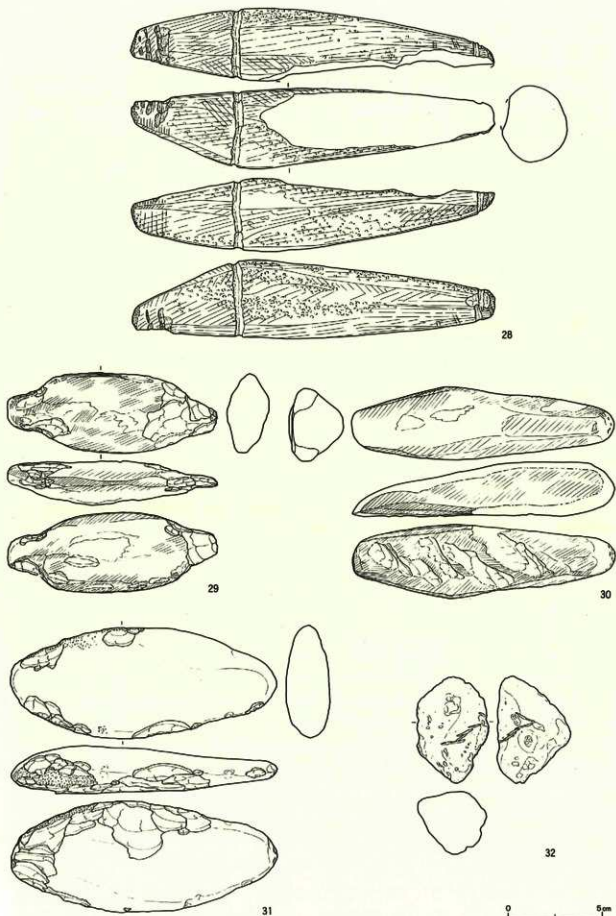
（広田良成）



図IV-66 X-8出土の遺物(1)



図IV-67 X-8出土の遺物(2)



図IV-68 X-8出土の遺物(3)

X-9 (図IV-69)

位 置 O-20

規 模 $(2.33) \times 2.06 / 1.87 \times 1.66 / 0.66$

特 徴 Ⅲ層上面で黄褐色火山灰の落ち込みが認められたため、a-bラインに沿ってトレンチをいれた。トレンチの中からはフレイク・チップが多数出土したが、土によごれがみられず木の根も入っていたのでそれらは自然のくぼみに堆積したものと考え、V層に達しない段階でいったん掘り下げを中止し、包含層調査に切り替えた。しかしO-20でⅢ層中位から下位で恵山式土器の破片が出土したため、再び土壌の存在を想定してトレンチの北側を半截した。

南側の上場は包含層調査の時に削平してしまっていたが、平面形は不整形であったと思われる。壁の立ち上がりは東側よりも西側で緩やかである。

覆土中の礫・砂利はほかの土壌墓に比較して少なかった。覆土中位から下位には焼土、V層の黄褐色土の小粒、炭化物が含まれていた(3・3'・5・5'・6層)。これらのうち、3層と3'層、5層と5'層は土の硬さに若干の違いがあり、土壌中央部の覆土(3層・5層)の方が硬くしまっていた。墳底の中央部では、黄褐色土混じりの黒褐色土が皿状に堆積していた。

土壌の規模・中央部が皿状にくぼむ形状・覆土の堆積状況はX-7に類似している。

遺物の出土状態 覆土上位から小型の甕形土器の底部が倒立の状態出土した。また壁際の覆土上位からは石鏃が出土した。このほかにもa-bラインの北側の壁付近の覆土上位から2点出土している。北東壁付近の覆土上位からは石鏃が出土している。土壌中央部の覆土中位からは魚形石器が出土している。覆土下位(5層と5'層の境目付近)からは骨片が出土した。

(中田裕香)

遺 物 (図IV-70~73)

土 器 : 出土資料のうちⅣ群A類(10, 11)、Ⅵ群土器を図示する(1~9、12~31)。

覆土下部出土の資料(1、2)

1は小型の甕。肩の張りが弱く頸部はやや外に開く。頸部には無文部を残すが、それを区画する沈線文は施されていない。2は縄文が施された揚げ底の底部。

覆土上部出土の資料(3~5)

3、4は肩が張って頸部がほぼ直立する平縁の甕。頸部には無文帯が残し、無文帯の上下は沈線文で区画されている。3は肩部の沈線文の下縁に小波状沈線が施されている。5は小型の甕。無文地に細い沈線で横走、縦走、鋸歯状の文様が全面に施されている。

覆土出土の資料(6~31)

6、8は甕。12~23は甕とみなされる口縁部。6は肩の張りが弱く頸部が内傾するもの。頸部には無文帯が残る。無文帯の上縁には沈線で縁取りされた横走する特殊縄文が施され、下縁には1条の横走沈線がめぐる。8は肩と頸部の境が不明瞭で一連の曲線を描くもの。体上半部に幅の広い文様帯があり、沈線で縁取りされた無文帯で柄な波状文が描かれている。7は大型で平縁の丸底鉢。口縁部は反外する。体上部には横走沈線で区画された無文帯が残る。口縁部の内面にも横走する沈線文が施されている。24~30は鉢若しくは浅鉢。29は縄文のみのもの。9、31は壺。9は肩部に幅の広い文様帯のあるもので、沈線文と特殊縄文で文様が描かれている。

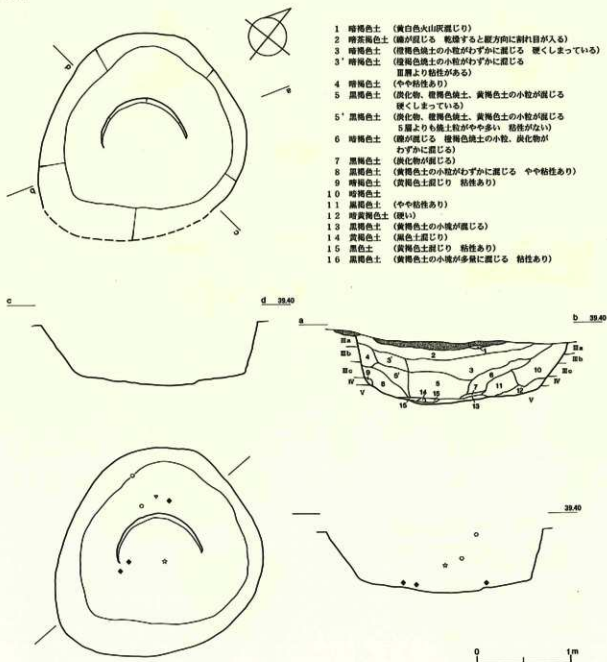
11、12はⅣ群A類土器。11は口縁部に貼付帯が施され、貼付帯上には横位施文、体部には縦位施文の縄文が施されている。12には底面にも縄文が施されている。

(工藤研治)

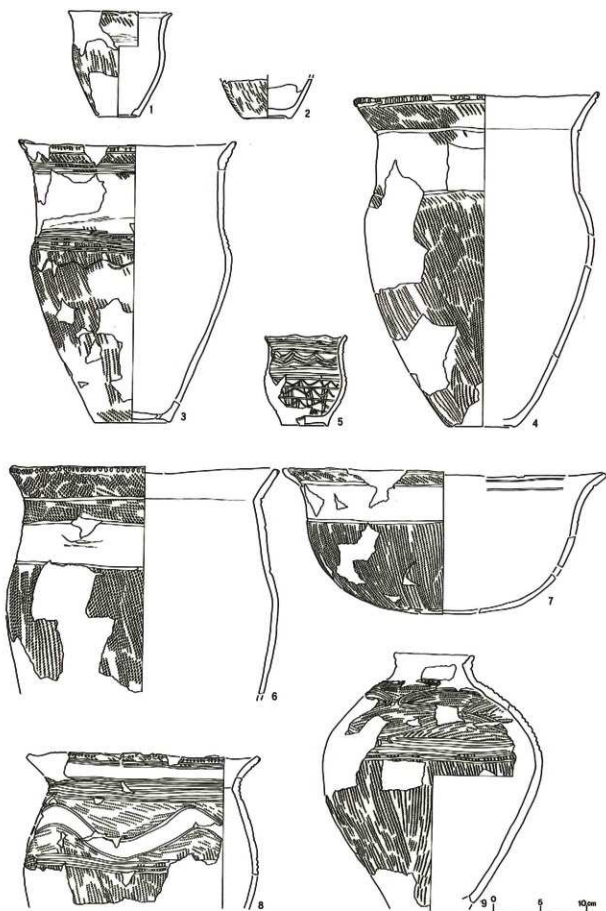
石 器 : 覆土から石鏃(1~6)、石錐(7)、つまみ付ナイフ(8)、靴形石器(9~12)、両面調整石器、スクレイパー(13)、抉入石器、鋸歯緑石器(14)、両極石器、剥片石器片、Rフレイク、石核

(15・16)、剥片、たたき石(17・18)、すり石、砥石(19)、石皿・台石(21)、礫器(20)、礫石器片、礫・礫片、魚形石器(22)、石製品剥片、焼成粘土塊、未分類土製品が出土した。上面からは砥石が出土した。1～6は石鏃。1～4は有茎凸基。1、2は狭長で作りが丁寧なもの。1は裏面に大きく素材面を残し、2は先端部を欠失する。3、4は幅が広く作りが雑である。5、6は無茎凹基で側縁は外湾する。6は裏面に素材面を残し、粗雑な加工が施される。7は石錐。棒状で両側縁から丁寧な加工が施され尖頭部を作り出す。8はつまみ付きナイフ。両面加工で中央付近で弱く屈曲し、刃部再生を行っている可能性がある。9～12は靴形石器。11以外は刃部が柄に対して斜めに付けられる。9は両面加工のもので末端部に直線的な刃部が作り出される。10、12は片面周縁加工のもの。10は刃

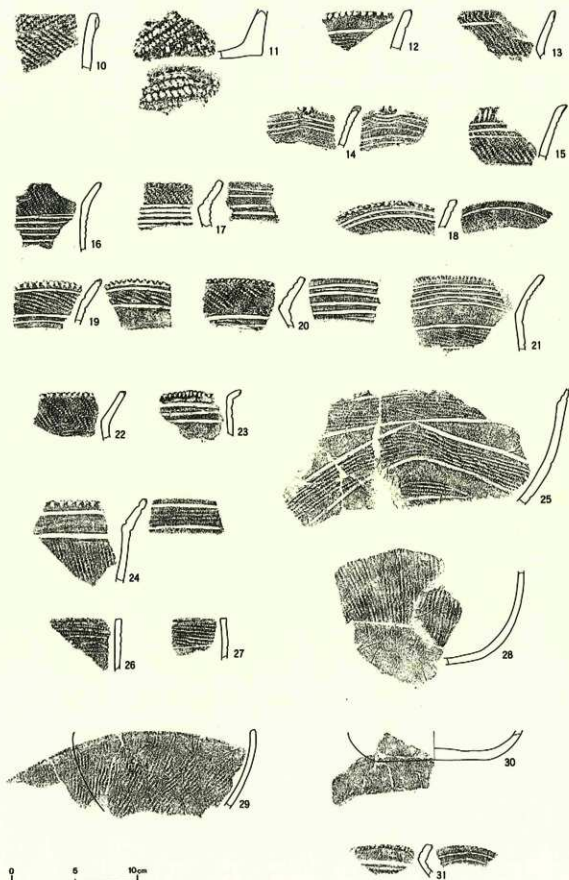
X-9



図IV-69 X-9



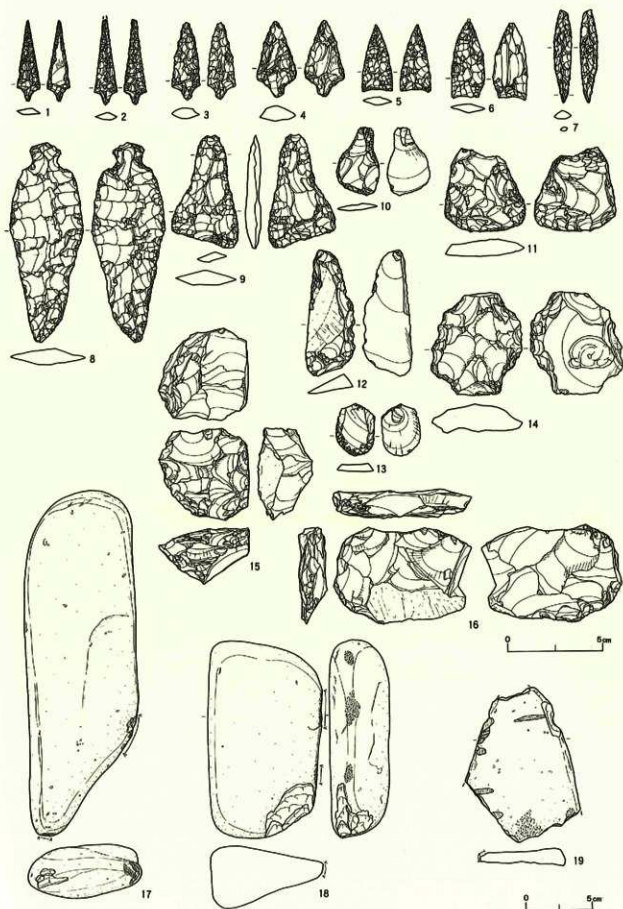
図IV-70 X-9出土の土器(1)



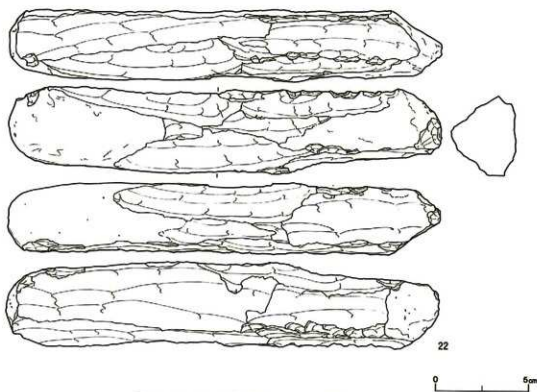
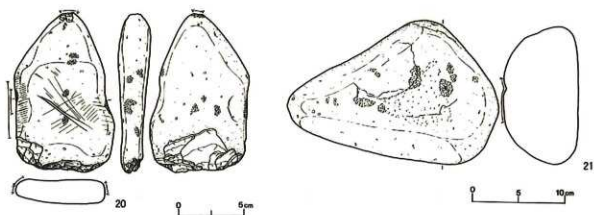
図Ⅳ-71 X-9出土の土器(2)

部がやや丸みを帯びる。12は加工が雑で未成品の可能性がある。11は上部を欠失する。13はスクレイパー。背面末端部に円形の刃部が認められる。14は鋸歯縁石器。背面右側縁に鋸歯状の刃部を作り出す。15、16は石核。17、18はたたき石。17は大形でやや偏平な角礫の角にたたき痕をもつ。左端のたたき痕は剥離により、右端は主として敲打による。18は表面右側縁と右下角にたたき痕をもつもの。19は砥石。上下部を大きく欠失する。周辺部に溝状の擦痕が認められる。20は礫器。偏平な礫の下端部に両面からの加工により直線的な刃部を作り出す。表面には擦痕が認められる。21は台石。礫の平坦面に浅いあばた状のたたき痕を有する。部分的に細かく深くぼみ状のたたき痕も認められる。22は魚形石器未成品。棒状礫を素材とし、側縁からの加工により全体を整形し、断面形は三角形状を呈する。

(広田良成)



図Ⅳ-72 X-9出土の石器(1)



図IV-73 X-9出土の石器(2)・石製品

X-10 (図IV-74)

位置 J-17

規模 $1.09 \times 0.76 / 0.79 \times 0.38 / 0.69$

特徴 H-2の調査過程でⅡ層の火山灰の落ち込みを確認できた。H-2の調査とあわせてトレンチを掘ったところ、H-2より新しい遺構と分かった。掘り込み面はⅢa層上部。平面形は長円形で長軸方向は北西-南東である。底はやや凹凸があり、南側が深くなっている。壁は急に立ち上がる。覆土は埋め戻された堆積状態を示す。

遺物の出土状態 土壌の上面では小礫やその他の遺物は発見されなかった。覆土からⅡA類土器、Ⅵ群土器、石鏃、剥片が出土した。

遺物 (図IV-74)

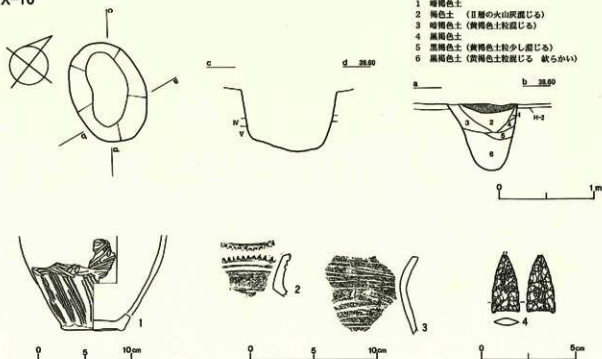
土器: 1~3は覆土出土のⅥ群土器である。1は体下半部まで沈線文が施されたもの。2、3は壺と考えられる口縁部。

(工藤研治)

石器: 4は覆土出土の石鏃である。無茎凹基で先端部を欠失し、作りはやや雑である。側縁は浅く外湾し、部分的に鋸歯状を呈する。

(広田良成)

X-10



図IV-74 X-10と出土の遺物

X-11 (図IV-75)

位置 M・N-17

規模 (0.87×0.82/0.53×0.47/0.54)

特徴 Ⅲ層上面で黄褐色火山灰がわずかに落ち込んでいたため、土壌の存在を想定して半截を行った。10cm程掘ると火山灰はなくなりⅢ層のような土になったため、一時掘り下げを中止し、包含層調査に切り替えた。しかしⅢ層下位以下のレベルから恵山式土器や石鏃等が出土し、それらの周囲の土に黄褐色土のわずかな混じりがみられたため、再び土壌を想定した半截を行い、確認した。

土壌の平面形は楕円形である。壁は急な角度で立ち上がる。竈底は中央部がやや深くなっている。
遺物の出土状態 VI群土器40点、Ⅲ群A類土器4点、剥片23点、石鏃2点、石核2点、剥片石器片1点が出土している。すべて覆土からの出土である。

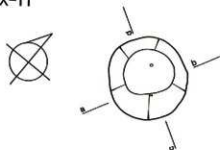
(中田裕香)

土器：1は覆土出土の浅鉢。口縁部が外反するもので全面に縄文が施されている。口縁部の内面には沈線文が施されている。

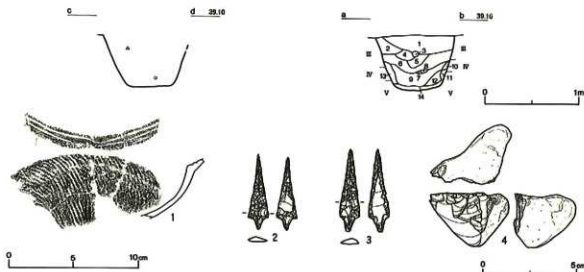
(工藤研治)

石器：2、3は有茎凸基の石鏃。共に裏面は周縁加工で素材面を残し、側縁は弱い凹凸がある。2は茎部末端が尖る。3は左右非対称である。4は石核。小形の礫を素材とし打面、作業面を共に固定する。

X-11



- 1 暗褐色土 (黄褐色土の小粒がごくわずかに混じる 砂粒が混じる)
- 2 暗褐色土
- 3 木根跡 (ボソボソしている)
- 4 暗褐色土 (暗黄褐色土混じり)
- 5 黒褐色土 (黄褐色土の小粒が多量に混じる 砂粒が混じる)
- 6 黒褐色土 (黄褐色土の小粒がごくわずかに混じる)
- 7 暗茶褐色土
- 8 黒褐色土
- 9 黒褐色土 (黄褐色土の小粒が混じる やや粘性あり)
- 10 暗黄褐色土
- 11 暗黄褐色土 (黒色土混じり やや粘性あり)
- 12 黒褐色土 (黄褐色土の小粒が多量に混じる ややボソボソしている)
- 13 淡黄褐色土 (粘性あり)
- 14 黄褐色土 (黒色土の小粒が多量に混じる 粘性あり)



図IV-75 X-11と出土の遺物

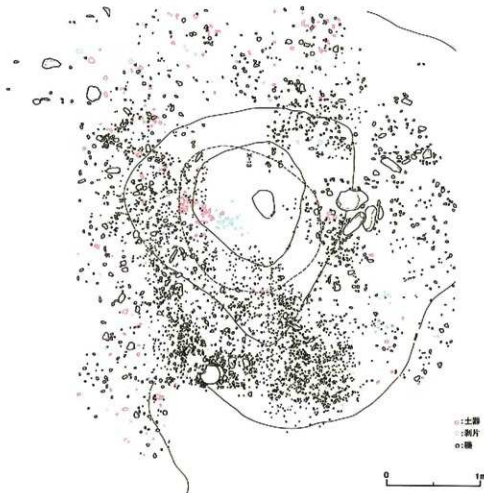
X-13 (図IV-77~79)

位置 R-16

規模 1.65×1.41/1.33×1.18/1.16

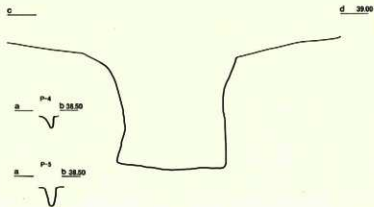
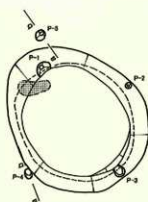
特徴 調査区西部の平坦面に位置する。Ⅲ層上面でⅡ層の火山灰が落ち込んでいるすり鉢状の窪地が確認できた。窪地の周囲には4.5×5 mほどの範囲で小礫が密に分布し、大型の礫もいくつか点在していた。土層観察用のベルトを残して上面の小礫を取り除いたところ、窪地北側のⅢ層上面から焼土が3か所検出された。葬送儀礼に関する焚き火跡であろうか。小礫層の調査後、窪地を半割して南半を掘り下げ、底と壁を確認した。覆土の上部には小礫が多く混じる粘質の硬い土層(覆土3層)が落ち込んだ状態で堆積しており、小礫は土壌の上面とその周囲の広い範囲を覆っていたことが分かった。土壌の平面形は卵形。長軸方向はほぼ東-西であり、西側が少し尖る。底は平坦でⅤ層の下位にある段丘礫層の上面まで達している。断面形はフラスコ状ビットに似て底が少し広がり、壙口も広くなっている。壙口部の壁際からは柱穴状の小ビットが5個検出された。このうち東西にある2個は土壌を半割した際、土層断面から確認できたものである。小礫層に覆われているが、小ビットの覆土から小礫は出土していない。他の小ビットからも小礫は出土しなかった。小ビットの配置から何らかの上屋があったと推定されるが、土壌が小礫で覆われる前に撤去されていた可能性が高い。壙底の西部

X-13

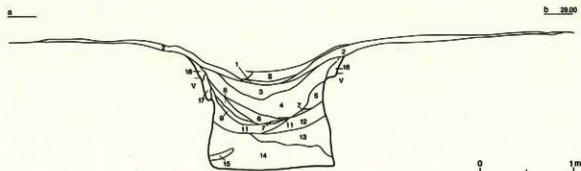


図IV-77 X-13上面遺物出土状況

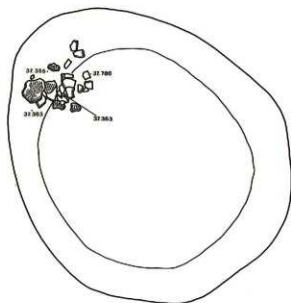
X-13



- 1 褐色土 (小礫多く混じる)
- 2 暗褐色土 (粘質硬い 小礫多く混じる)
- 3 暗褐色土 (粘質硬い 小礫多く混じる)
- 4 褐色土 (黄褐色土粒多く混じる)
- 5 黄褐色土 (黄褐色土粒多く混じる 軟らかい)
- 6 褐色土 (黄褐色土粒混じる)
- 7 黒色土 (軟らかい)
- 8 黄褐色土 (黄褐色土粒少し混じる 軟らかい)
- 9 黄褐色土 (黄褐色土粒混じる 軟らかい 11より 明るい)
- 10 褐色土 (粘土 砂状の塊状片混じる)
- 11 黄褐色土 (黄褐色土粒多く混じる)
- 12 暗褐色土 (黒色土と黄褐色土均質に混じる)
- 13 褐色土と黄褐色土互層
- 14 黄褐色土 (硬い)
- 15 黄褐色土 (軟らかい)
- 16 暗黄褐色土
- 17 黒褐色土
- 18 褐色土 (黄褐色土粒混じる)



図IV-78 X-13(1)



0 50cm

図IV-79 X-13(2)

では鉢形土器が1個つぶれた状態で出土し、土器の下からベンガラと糊状になった骨の小片が検出された。

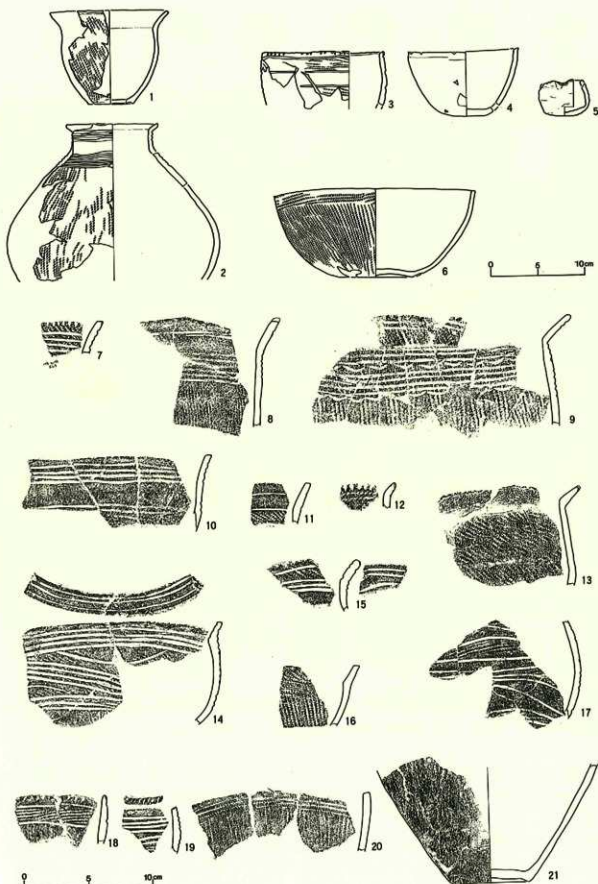
覆土は下半にV層主体の硬く締まった黄褐色土や黄褐色土と黒褐色土が交互に堆積する土層、上半にはⅢ・Ⅳ層にV層が混じる黒褐色若しくは褐色の土層が堆積しており、V層の黄褐色土が先に埋め戻されているのがわかる。堆積状態は上半の覆土12層以上と下半の覆土13層以下とは大きく異なっていて、覆土12層以上の土層は土壌上面の窪みに対応して「U」字状に落ち込んでいるのに対し、13層以下の土層ではそれが顕著ではない。土壌の窪みは掘り上げた土がすべて埋め戻されていないため生じたことは明らかであるが、埋葬時から窪地になっていたとは考え難く、当初の土壌上面が地表と同じかそれより少し高く盛り上がっていたと仮定すると、本土壌の窪みは覆土上半が大きく陥没したために生じたと考えることができる。陥没の原因としては遺体などの有機物の腐朽や土壌内が中空に近い状態になっていたことなどが想定されるが、覆土上半がどのような状態であったのかは不明である。また、墳底に遺体があったことがほぼ確実であるにもかかわらず、覆土下部では大きな土層の陥没が認められない。遺体がある程度腐朽するまで上層のある土壌に安置していた可能性もある。

遺物の出土状態 上面の小礫層にはⅥ群土器の細かい破片や、頁岩の剥片が多量に混じっている。頁岩の石核も7点出土しているので、剥片にはこの場で剥離されたものも多くあると考えられる。小礫層を除去した後、土壌の東側からⅥ群土器がつぶれた状態で出土し、西側から魚形石器が1点出土した。墳底の西部からは鉢形のⅥ群土器が1個つぶれて出土した。覆土からは石鏃が37点出土しているが、まとまって出土したものはない。

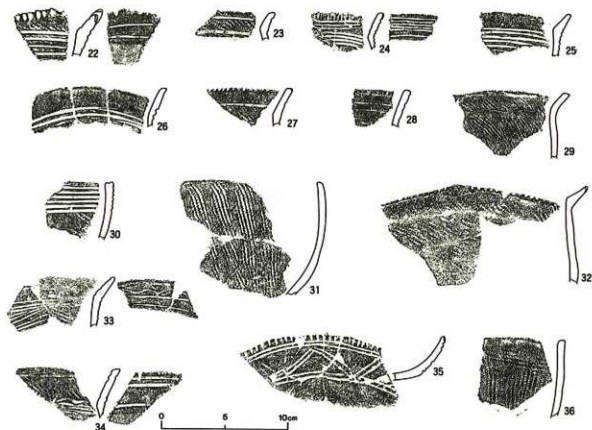
遺物 (図IV-80~83)

土器 : 出土資料のうちⅥ群土器を図示する。

上面出土の資料 (1~5、7~32)



図IV-80 X-13出土の土器(1)



図IV-81 X-13出土の土器(2)

1、3～5は上面の小礫層出土の資料と小礫を除去した後に出土した資料が接合したものである。1は縄文が施された小型の甕。3、4は鉢。3は沈線縁取りされた横走る特殊縄文が施されたもの。4は無文。5はミニチュアの無文の鉢。6は上面の小礫に混じって出土した壺。頸部には無文帯が残り、無文帯の上下には沈線文が施されている。10～13、22～29は甕と考えられる口縁部。14～20、30、31、33は鉢若しくは浅鉢の口縁部。

墳底出土の資料(6)

6は掘り底の鉢。体部から口縁部にかけて緩やかに外に開くもので口縁部には横走る縄文、体部には縦走る縄文が施されている。

覆土出土の資料(34～36)

34は甕と考えられる口縁部。35は浅鉢。無文地に沈線で鋸歯状文が描かれ、その上下には横走る沈線文が施されている。36は口縁部に横走る縄文が施され、体部には縦走る縄文が施されている。

(工藤研治)

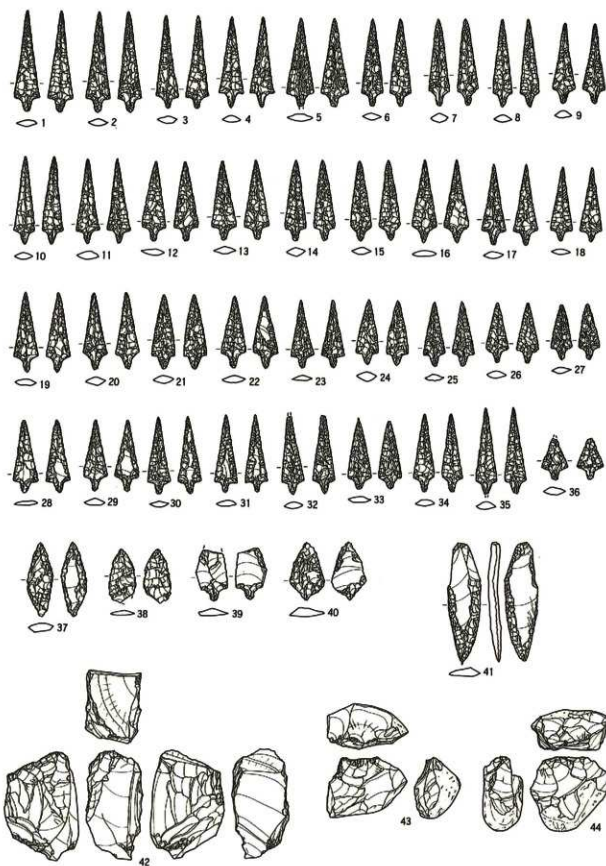
石 器：墳底から礫、覆土からは石鏃(1～20・22～31・33～35・37)、石銚、石槍、靴形石器(41)、剥片石器片、石核(43・44)、剥片、磨製石斧(45)、たたき石(48)、礫・礫片、未分類石製品(55)、石製品剥片、焼成粘土塊(56)が出土している。上面からは、石鏃(21・32・36・38～40)、石鏃、靴形石器、両面調整石器、剥片石器片、Rフレイク、石核(42・43)、剥片、磨製石斧(46)、たたき石(47・49・50)、すり石(51)、石皿・台石(52)、礫石器片、礫・礫片、魚形石器(53)、未分類石製品(54)石製品片が出土している。1～40は石鏃。1～35は加工が丁寧で狭長に作り上げられてい

る。側縁の加工は特に細かく、浅い内湾状もしくは直線状に仕上げている。側縁から先端部にかけてゆるく外湾するものが多い。周縁加工で片面あるいは両面に素材面を残すものもあるが、加工が雑なわけではなく、素材となる剥片が薄身であるため周縁加工のみを施したと考えられる。36はやや幅広で、先端部を欠失する。37は菱形を呈する。38は木葉形で基部を一部欠失する。39、40は未成品と考えられる。39は裏面左側縁の一部と茎部のみ加工が施される。41は靴形石器。両面周縁加工のもので刃部は柄に対して斜めにつけられる。刃縁はゆるく外湾し、先端は尖頭状を呈する。42～44は石核。45、46は小形の磨製石斧。45は正面に素材面を残す。片刃気味の両刃で刃部は縦方向及び斜方向の研磨により研ぎ出されている。刃縁は直線状である。側面及び基端部にも丁寧な研磨が認められる。46は基部を大きく欠失する。両刃で刃縁は弱く外湾する。47～50はたたき石。47～49は棒状礫の端部にたたき痕があるもの。47は主にやや大きな剥離によるたたき痕で、48、49は細かい敲打によるたたき痕である。50は周縁部及び平坦面にたたき痕が認められる。51はすり石。偏平礫の一侧縁に両面からの打ち欠きにより細いすり面を作り出す。52は石皿。礫の表裏の平坦面にすり面をもつ。53は魚形石器。先端部を欠失し、全面に斜方向の研磨が施される。部分的に整形時の敲打痕が認められる。54、55は未分類石製品。

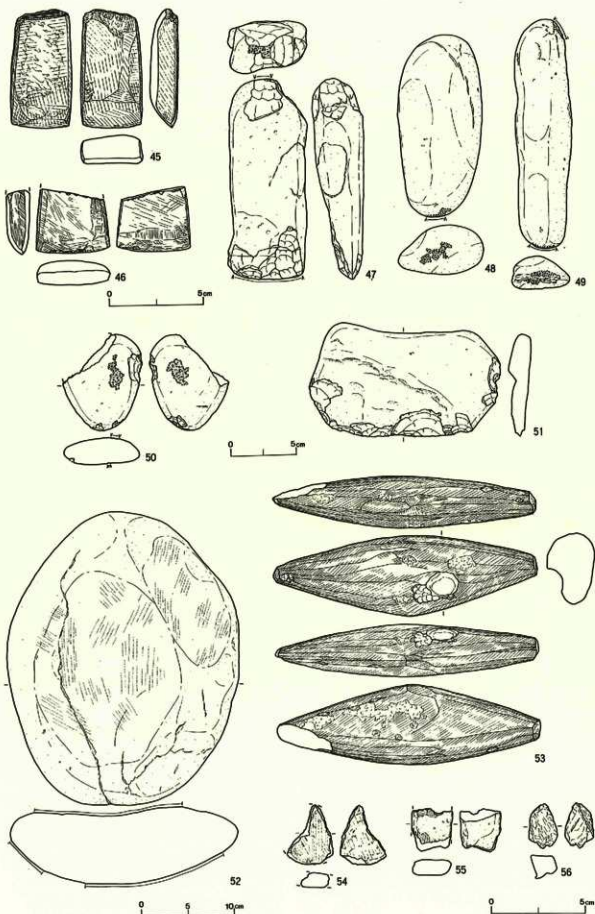
(広田良成)

56は焼成粘土塊である。色調は浅黄橙色である。

(立田 理)



図IV-82 X-13出土の石器(1)



図Ⅳ-83 X-13出土の石器(2)・石製品・土製品